

問題児たちが異世界から来るそうですよ？—笑う自由人—

カゲショウ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

過去に起きた『ある事件』以来、世界に嫌われた少年、天野剣士へあまの けんしゝ。

そんな剣士のもとに届いた一通の招待状。

それを読んだ剣士は『人間』になるために “箱庭” に行くことを決意する。

しかし、自由過ぎる剣士の行動は『問題児』認定するには十分だった……

目次

YES！ ウサギが呼びました！

プロローグ

1

01話 箱庭につきました！

3

02話 烏合のリーダーに会いました

11

03話 喧嘩売りました

21

04話 ”サウザンドアイズ”に行こう

33

05話 和装ロリに出会いました 前編

37

06話 和装ロリに出会いました 後編

48

07話 居残りで決闘しました

59

08話 ノーネームに着きました

69

09話 例の外道と戦いました 前篇

79

10話 例の外道と戦いました 後編

92

11話 外道に誓いました

107

12話 一悶着ありました

121

13話 留守番（強制）任せられました

132

14話 夜空に目標立てました

141

番外編01話 箱庭のとある日常く freedom side 〉

149

番外編02話 金髪ロリと自由人

159

あら、魔王襲来のお知らせ？

15話 おや、問題児失踪のお知らせです

171

16話 おや、北側到着のお知らせです

180

17話 おや、フラグ建設のお知らせです

193

18話 おや、魔王についてのお知らせです

203

19話 おや、魔王と登場のお知らせです

YES！　ウサギが呼びました！
プロローグ

オレは世界から嫌われた

だから今日もオレは河原の土手で寝ていた。

誰も話しかけず、誰も近づかず……。

恐らくこの世界の憎しみや怒りはオレに向いていると言ってもいいかもしれない。

「暇だな……」

そよ風がさわさわと植物を揺らしていく中、制服姿で寝るオレははたから見ればサボリのように見えるだろう……いや、その通りなんだけど……。

この世界に……というよりこの街にはオレの居場所はない。

今も高校には通っているが、あまり学校へは行かない。

行っても睨まれるか舌打ちされるかだもんなあ……。

まあ、それは過去の『ある事件』がきっかけなのだが……いかんせん今は眠いので考えるのも思い出すのも面倒くさい……。

「さ、あと一眠りするか」

そう思ってもう一度寝ようとする。が、顔の上に落ちてきた何かによつてそれは妨害された。

「何これ……手紙？」

誰かが飛んできたのかと思ひ裏を見る。

そこには『天野剣士殿へ』と書かれていた。

「……」

自分の名前を見たのはいつ以来だろうか……。

『あの事件』以来一人になったオレは人とはあまり関わってこなかった。

自分から一人になるようにしてたわけではない。周りの奴らがオレを避けているのだ。

あるものは、出会っただけで逃げ出し

あるものは、目が合っただけで恐怖で体を震わせ
あるものは、声を掛けただけで謝り

あるものは、オレを『殺す』ために凶器を持って襲って来たり……。
だからこそ気になった。たとえ悪戯でもオレに手紙を送ってきた
奴のことが。

手紙の封を開き、中の文章を読む。

そこにはこう書かれていた。

『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。』

その才能（ギフト）を試すことを望むのならば、
己の家族を、友人を、財産を世界の全てを捨て、
我らの”箱庭”に来られたし』

この世界でオレは『人間』として扱われてこなかった。
いや、『人間』になれなかった。

『人間』としてはあまりにも『規格外』過ぎた。

だからオレはいつも一人だった。

大切なものも失い、守るべきものも失ってしまった。

唯一、オレを『人間』としてくれた人ももういない。

そんな世界にオレは嫌気がさしていた。

だからオレは選んだ。”箱庭”へ行くことを……。

そこに行けば何かが変わる……。いや、『規格外』から『人間』へとな
れるような気がした。

確証はない。だけど、そんな気がしてたまらなかった。

「ハハッ」

久しぶりの招待に思わず笑いがこぼれてしまった。

『人間』になれることを信じて……。

今日もオレは笑う。

01話 箱庭につきました!

気が付くとオレは空から落ちていた。

……夢だな。うん、きつと夢だ。そうに違いない。

下の世界が見たこともない形をしているのも、空からすごい勢いで落下しているのも、オレの他に三人も同じように落下しているのも夢で気のせいだ。

三人のうち一人が何故か楽しそうに大声で笑っているようだが、きつとそれも夢だろう。

あーあ、なんだ、結局夢落ちかー。

よし寝よう。夢から覚めよう。はいお休みー。

落下中に寝る体勢を取り、目を閉じる。

眠りに落ちるまで、3、2、1……

ドパーンッ!

カウント終了と同時に水に落ちた。

つか、痛い……てことは夢じゃない?

とりあえず浮上して辺りを見回すと、知らない場所の湖みたいなところにいる。浮いていた。

「何処だよ、此処……」

あまりの急展開に頭が追いついていない。

しかし、オレはこういう時の打開策を知っていた。

それはとても簡単で、良くしていたことだ。

「お休み……」

とりあえず頭を休める。これに限る!

水の上? ハハッ、そんな些細な問題は睡眠よ……この状況には関係ないのさ!

「し、信じられないわ! まさか問答無用で引き摺りこんだ挙句、空に放り出すなんて!」

「右に同じだクソツタレ。場合によっちゃその場でゲームオーバーだぜコレ。石の中に呼び出された方がまだ親切だ」

オレが水に仰向けに寝ていると、少年の声と少女の声が聞こえてき

た。

生きてたんだ……まあ、俺も生きてるけどね！

「……………いえ、石の中に呼び出されたら動けないでしょ？」

「俺は問題ない」

「そう。身勝手ね」

身勝手のレベルじゃないだろ、それは……。

目を開けて視線を岸の方へ移すと、ロングヘアの少女とヘッドホンの少年はフン、と互いに鼻を鳴らして服の端を絞っていた。

「此処……どこだろう？」

ショートカットの少女が猫を拭きながら呟いた。

「さあな。まあ、世界の果てっぽいものが見えたし、どこぞの大亀の背中じゃねえか？」

え、あの落下している中で確認できたの？ 凄いなーオレそんなの見えなかったし……あ、寝ようとしてたんだっけ？

「まず間違いないだろうけど、一応確認しとくぞ。もしかしてお前たちの変な手紙が？」

「そうだけど、まずは”オマエ”って呼び方を訂正して。私は久遠飛鳥よ。以後は気をつけて。それで、その猫を抱きかかえている貴女は？」

「……春日部耀。以下同文」

黒髪ロングの娘、ショートカットの娘と自己紹介が続く。

というか、ショートカットの娘自己紹介はしより過ぎじゃない？

「それで、最後に、野蛮で凶悪そうなその貴方は？」

「高圧的な自己紹介をありがとよ。見たまんま野蛮で凶悪な逆廻十六夜です。粗野で凶悪で快樂主義と三拍子そろった駄目人間なので、用法と用量を守った上で適切な態度で接してくれよお嬢様」

明らかに久遠にケンカ売ってるよな……。

あ、なんか浮いてたら眠くなってきた……。

「そう。取扱説明書くれたら考えてあげるわ、十六夜君」

「ハハ、マジかよ。今度作つとくから覚悟しとけ、お嬢様」

心からケラケラと笑う逆廻十六夜。

傲慢そうに顔を背ける久遠飛鳥。
我関せず無関心を装う春日部耀。

……自己主張が強いやつばっかだなあ……じゃ、寝よう。お休み
|。

「で、さつきから水に浮いてるあいつは誰なんだよ」

Z Z Z ……

「さあ？ 私は知らないわよ。春日部さんは？」

「知らない」

Z Z Z ……

「……あいつ生きてんのか？」

「……………行つてくる」

バシヤバシヤという水音が近づいてきた。

起きるのだるいな……寝とこ……。

「……」

あれ？なんか体が引つ張られてる……岸まで連れて行つてくれる
のかな？

「で、彼は大丈夫なの？」

「……………寝てる」

「はっ？」

「へえ……」

あれ？もしかしてオレの安否確認しに来てくれたの？

……………しようがない、起きるか。

「ふあ……つと」

「あ、起きた」

上体を起こして目を開けると、逆廻のニヤニヤした顔と久遠の呆れ
た表情をした顔と春日部無表情な顔が見えた。

……とりあえず運んでもらったお礼をするか。

「えつと……オレを運んでくれたのは誰なんだ？」

「私……」

春日部が小さく手を上げる。

「そうか。ありがとな春日部」

お礼を言うと、春日部は少し驚いた表情をした。

「……さっきの聞こえてたの？」

「おう。こいつが逆廻でこっちが久遠だろ？」

人差し指で逆廻、久遠と指差す。

すると二人も少し驚いたような顔をしたが、逆廻はさつきと同じ顔、久遠はさらに呆れた顔になった。

「で？ 寝坊助さんの名前はなんていうのかしら？」

久遠に話題を振られた。ならば答えるしかないな！

オレはいつものように顔にへらへらした笑いを浮かべた。

「天野剣士だ。基本自由に過ごしてるので、オレの行動にツツコミいれてると疲れるのでよろしくー」

「ハハハ！ 面白えなお前」

「いやいや、逆廻程じゃないよ」

ハハハと笑いあうオレと逆廻。いいなあ、こんな人と笑い合うのって……。

「私たちも笑う？」

「遠慮するわ……はあ……」

隣りで久遠がため息をついている。そんなため息ばかりついていると幸せが逃げるぞ？

「で、呼び出されたはいいいけどなんで誰もいねえんだよ。この状況だと、招待状に書かれていた箱庭とかいうものの説明をする人間が現れるもんじゃねえのか？」

「そうね。なんの説明もないままでは動きようがないもの」

「……この状況に対して落ち着きすぎているのもどうかと思うけど」

「春日部もな」

「全員だろ」

（全くです）

……何処からか同意の意見が聞こえるな。

そこで、ふと十六夜がため息交じりに呟いた。

「仕方がねえな。こうなったら、そこに隠れている奴にでも話を聞か？」

物陰に隠れていた何かがガサツと音を立てて飛び跳ねた。

「なんだ、あなたも気づいていたの？」

「当然。かくれんぼじゃ負けなしだぜ？そっちの二人も気づいてたんだろ？」

「風上に立たれたら嫌でもわかる」

「人の視線には敏感なんぞな」

「……………へえ？面白いなお前ら」

軽薄そうに笑う十六夜の目は笑っていない。つか恐えな逆廻。

理不尽な召集を受けた三人は腹いせに殺気の籠もった冷ややかな視線を出てきたウサミミの生えた愉快生物に向ける。

ちなみにオレはそんなことはしていない。何故かって？ 眠いから。

「や、やだなあ皆様。そんな狼みたいに怖い顔で見られると黒ウサギは死んじやいますよ？ ええ、ええ、古来より孤独と狼はウサギの天敵でございます。そんな黒ウサギの脆弱な心臓に免じてここは一つ穏便に御話を聞いていただけたらうれしいでございますヨ？」

「断る」

「却下」

「お断りします」

「眠いな…………」

「あつは、取りつくシマもないですね♪」

バンザイー、と降参のポーズをとる黒ウサギ。

しかし、その目は冷静に四人を値踏みしていた。

すると春日部は黙って黒ウサギの隣に立ち、

「えい」

「フギャー！」

黒いウサ耳を根っこから鷲掴み、力いっぱい引つ張った。あ、あれ生えてるんだ。

「ちよ、ちよっとお待ちを！ 触るまでなら黙って受け入れますが、まさか初対面で遠慮無用に黒ウサギの素敵耳を引き抜きに掛かるとは、どういう見ですか!？」

「好奇心の為せる業」

「自由にも程があります!」

「へえ? このウサ耳って本物なのか?」

今度は逆廻が右から久遠は左からウサミミを掴む。

「ちよ、ちよっと待——」

みんなほどほどにねー。

オレは心の中でそう言っただけで黒ウサギがいじられる姿を終始眺めることにした。

「いい天気だなあ……」

「ちよっと! 助けてくださいよおおおおおおおお!」

□ ■ □ ■ □

「あ、あり得ない。あり得ないのですよ……まさか話を聞いてもらうために小一時間も消費してしまうとは……学級崩壊とはきつとこのような状況を言うに違いないのデス……」

「いいからさっさと進めろ」

うるうると涙を瞳に浮かばせながらも、黒ウサギは話を聞いてもらえる状況を作ること成功した。うん、よかったね。

オレたちは黒ウサギの前の岸边に思い思いに座り込み、話を『聞くだけ聞こう』という程度には耳を傾けている。

ちなみにオレは春日部の右横に座って半分寝てる。

黒ウサギは気を取り直して咳払いをし、両手を広げて言った。

「それではいいですか、皆様。定例文で言いますよ? 言いますよ? さあ、言います!」

ようこそ”箱庭の世界”へ! 我々は皆様にギフトを与えられたものたちだが参加できる『ギフトゲーム』への参加資格をプレゼントさせていただくかと召還いたしました!

「ギフトゲーム?」

「そうです! 皆様は皆、普通の人間ではございません! その特異な力は様々な修羅神仏から、悪魔から、精霊から、星から与えられた

恩恵でございます。『ギフトゲーム』はその”恩恵”を用いて競い合う為のゲーム。そしてこの箱庭の世界は強大な力を持つギフト保持者がオモシロオカシク生活できる為に造られたステージなのでございますよ！」

「そうなんだ……」

『普通の人間ではない』という部分について反応してしまった。

でもまだ『人間』か……なんか嬉しいな。

両手を広げて箱庭をアピールする黒ウサギ。飛鳥は質問するために挙手した。

「まず初歩的な質問からしていい？ 貴女の言う”我々”とは貴女を含めた誰かなの？」

「YES！ 異世界から呼び出されたギフト保持者は箱庭で生活するにあたって、数多とある”コミュニティ”に必ず属していただきます♪」

「嫌だね」

すっぱり断る逆廻。こういうところ凄いな、こいつ……。

「属していただきます！ そして『ギフトゲーム』の勝者はゲームの”主催者”（ホスト）が提示した商品をゲットできると言うとってもシンプルな構造となっております」

「……”主催者”って誰？」

「様々ですね。暇を持て余した修羅神仏が人を試すための試練と称して開催されるゲームもあれば、コミュニティの力を誇示するために独自開催するグループもございます。特徴として前者は自由参加が多いですが”主催者”が修羅神仏名だけあって凶悪かつ難解なものが多く、命の危険もあるでしょう。しかし、見返りは大きいです。”主催者”次第ですが、新たな”恩恵”（ギフト）を手にすることも夢ではありません。後者は参加のためにチップを用意する必要があります。参加者が敗退すればそれらは全て”主催者”のコミュニティに寄贈されるシステムです」

「後者はかなり俗物ね」

久遠がすっぱりと切り捨てる。

ま、確かにその通りだから何も言わないけど。

「俺からの質問だ。ゲーム自体はどうやって始めればいいんだ？」

「コミュニティ同士のゲームを除けば、それぞれの期限内に登録していただければOK！ 商店街でも商店が小規模のゲームを開催しているのよかったら参加していつてくださいな」

久遠が黒ウサギの発言に片眉をピクリと上げる。

「……つまりギフトゲームとはこの世界の法そのもの、と考えてもいいのかしら？」

お？ と驚く黒ウサギ。

それにしてもみんなこの話が理解できるなんて凄いな。オレはもう頭がパンクしそうなほどなのに……。

「なあ、春日部」

「何？ 天野？」

「オレ、少し寝るから話が終わったら起こしてくれ」

そう言うと春日部は右手でサムズアップしてきた。これはOKの証なのか？

ならいいや、寝よう……。

02話 烏合のリーダーに会いました

「――の。――まの」

体が揺らされながら誰かが呼ぶ声がする……。

だが残念だったな。ヒーローなら起きていただろうがオレはそんなことじゃ起きないぞ！

「天野、起きて」

「痛っ！」

その声と同時に頭に衝撃が来る。

目を開けると春日部が右の掌をオレの頭に対して縦にした状態で見ていた。

「おはよう、天野」

「おはよう、春日部」

傍から見れば穏やかに挨拶を交わしているように見えるように見えるだろう。

だが、その考えは春日部の右手とオレの頭のこぶを見て思い直してほしい。

「まったく……剣士君はこの世界で死にたいのかしら？」

久遠が腰に手を当てて起きれている。む？ もしやオレが話を聞いてないと思っっているな？

「ハハハ、そんなわけないだろう？」

「……では黒ウサギが行ったことを説明してください」

「この世界は面白い」

「よく聞いてたじゃねーか」

「だろ？」

「最後だけじゃないですかお馬鹿様！」

バシューーンッ！ といういい音とともにオレと逆廻はハリセンで叩かれた。……地味に痛いな。

「要するにあれでしょ？ オレたちが持つてる”恩恵”（ギフト）を使って『ギフトゲーム』をするけど、相手には十分注意しろってことだろ？」

「微妙にあつてることが納得いきませんが……もういいです。では今から黒ウサギの仲間のところにお連れしますね♪」

切り替え早いなこの黒ウサギ……ま、いっか。

こうしてオレたちは黒ウサギの仲間のところへ向かうのであった

「あ、春日部」

「何？」

「冒険してくる」

「行ってらっしゃい」

——オレ以外の三人が。

□ ■ □ ■ □

剣士が黒ウサギのもとを離れてからすぐ、「ちよつと世界の果てを見てくるぜ！」

と言って十六夜が抜け、現在は飛鳥と耀の二人だけが黒ウサギに付いて行っていた。

そして、大きな建物が見えてくると、黒ウサギは何かを見つけて大きく手を振り始めた。

「ジン坊ちゃん！ 新しい方を連れてきましたよー！」

そう叫ぶと向こうも気が付いたようで、少し黒ウサギたちに近づく。

「お帰り、黒ウサギ。そちらの御二方が？」

「はいなこちらの御四人様が——」

黒ウサギがクルリ、と二人を振り返り、笑顔のまま固まった。

「……………え、あれ？」

黒ウサギは困惑した顔で飛鳥と耀を見る。

「あと二人いませんでしたっけ？ ちよつと目つきが悪くて、かなり口が悪くて、全身から”俺問題児”ってオーラを放っている殿方と”俺自由です”って感じでへらへら笑ってた殿方が……」

「ああ、十六夜君たちのこと？ 十六夜君なら”ちよつと世界の果て

を見てくるぜ!”と言って駆け出していったわ。あっちの方に”

飛鳥はどうでもいいように上空から見えた断崖絶壁を指さす。

「な、なんで止めてくれなかったんですか!」

”止めてくれるなよ”と言われたもの”

「ならどうして黒ウサギに教えてくれなかったのですか!?!」

”黒ウサギには言うなよ”と言われたから”

「嘘です、絶対嘘です! 実は面倒くさかったただけでしょう御二人とも!」

「うん」

ガクリ、と黒ウサギが前のめりに倒れる。

「……それで、剣士さんは何処へ?」

”冒険してくる”としか言わなかったから……”

「なお性質が悪いです!」

さらに前のめりになる黒ウサギ。

そして、何かを思い出したかのようにあせた顔を上げる。

「た、大変です! ”世界の果て”にはギフトゲームのため野放しにされている幻獣が……!」

「幻獣?」

「は、はい。ギフトを持った獣を指す言葉で、特に”世界の果て”付近には強力なギフトを持ったものがあります」

「あら、それは残念。もう彼らはゲームオーバー?」

「ゲーム参加前にゲームオーバー? ……斬新?」

「冗談を言っている場合じゃありません!」

ジンは必死に事の重大さを訴えるが、二人は叱られても肩を竦めるだけで反省した様子は窺えない。

黒ウサギはため息を吐きつつ立ち上がった。

「はあ……ジン坊ちゃん。申し訳ありませんが、皆様の御案内をお願いしてもよろしいでしょうか?」

「わ、わかった。黒ウサギはどうする?」

「問題児を捕まえに参ります。事のついでに——”箱庭の貴族”と謳われるこのウサギを馬鹿にしたこと、骨の髄まで後悔させてやりま

すっ！」

悲しみから立ち直った黒ウサギは怒りのオーラを全身から噴出させ、黒か青かわからない髪（黒ウサギなので恐らく黒）を淡い緋色に染めていく。

外門めがけて空中高く跳び上がった黒ウサギは外門の脇にあった彫像を次々と駆け上がり、柱に水平に張り付く。

「一刻程で戻ります！ 皆さんはゆっくりと箱庭ライフをご堪能くださいませ！」

黒ウサギは、淡い緋色の髪を靡かせ踏みしめた門柱に亀裂を入れる。全力で跳躍した黒ウサギは弾丸のように飛び去り、あっという間に三人の視界から消え去っていった。

巻き上がる風に髪の毛を押さえていた飛鳥が呟く。

「……………箱庭の兎は随分早く跳べるのね。素直に感心するわ」

「ウサギたちは箱庭の創始者の眷属。力もそうですが、様々なギフトの他に特殊な権限も持ち合わせた貴種です。彼女なら余程の幻獣と出くわさない限り大丈夫だと思うのですが…………」

飛鳥は「そう」と呟き、心配そうにしているジンに向き直った。

「黒ウサギも堪能くださいと言っていたし、御言葉に甘えて先に箱庭に入るとしましょう。エスコートは貴方がしてくださいるのかしら？」

「え、あ、はい。コミュニケーションのリーダーをしているジンⅡラツセルです。齢十一になったばかりの若輩ですがよろしくお願いします。御二人の名前は？」

「久遠飛鳥よ。そこで猫を抱き抱えているのが」

「春日部耀」

ジンが礼儀正しく自己紹介し、飛鳥、耀、もそれに倣う。

「さ、それじゃあ箱庭に入りましょう。まずはそうね。軽い食事でもしながら話を聞かせてくれると嬉しいわ」

飛鳥がジンの手を引いて外門をくぐり、耀はそれについていく。

「あ、やつほー久遠、春日部」

「あ、ジン君だ」

「……………」

外門をくぐるとそこには傍らに桶を乗せた台車を押している狐耳が生えた少女を置いた剣士がいた。

「何で此処に剣士君がいるのかしら……？」

さつきまで黙ってたと思えばいきなり『あなたはいらぬ』発言ですか？

「酷いなあ、久遠」

「酷いも何も、あなたh冒険に出かけたんじやなかったの？」

「飽きたからやめた」

「飽きたって……はあ……」

今思ったけど久遠って、オレと会話するたびにため息ついてるような気がする。

幸せが逃げるぞ？

「え、えっと……リリ？ こちらの男性は？」

「あ、えっと、さつきまで迷子になってた天野剣士さん……ですよね？」

「うん。初めましてジン君。つい先ほどの娘に保護されました天野剣士です。よろしくな」

「え？ あ、はい……」

ジン君が何かを疑うような目をしてオレを見る。

あ、ジン君はまだオレがどんな立場か言ってなかったな。

「ちなみに黒ウサギからこの世界に呼び出された人の一人だからそんなに警戒しなくてもいいよ」

「あ、そうなんですか。僕はコミュニティーのリーダーをしています
ジン＝ラッセルです」

ペこりと頭を下げるジン君。さすがリーダー。礼儀正しい。

「では、天野さん。私は失礼しますね」

「あ、うん気を付けてね」

そう言っリリちゃんの頭を撫でる。リリちゃんは気持ちよさそうに目を細めて、頭から手を放すと少し残念そうにしながら「では」と言っ台車を押して町のほうへと消えて行っった。

「剣士君、あなた馴染みすぎじゃないかしら……」

「そうか？ 普通だろ」

「……………はあ」

久遠は本当に幸せを手放すのが好きだなあ……そんなんじや彼氏なんてできない「何かしら？」いえ、なんでもナイデスヨ？

「天野」

春日部がオレの前に立って名前を呼ぶ。にしても本当にその猫とべったりだな春日部は。

「何だ？」

「冒険、楽しかった？」

「もちろん」

「そう。よかったね」

春日部が薄く笑う。何だ、笑うことできるじゃん。

「あの、何処かの店に行きませんか？ 段取りは黒ウサギに任せていたので……よかったらお好きな店を選んでください」

ジン君のこの言葉でオレたちは手近にあった『六本傷』の旗を掲げている店に入った。

「いらつしやいませー。御注文はどうしますか？」

それぞれ頼むものが決まったので店員を呼ぶと、猫耳をはやした店員が笑顔で出てきた。

にしても今日は獣耳との遭遇率が高いなあ……。

「えつと、紅茶二つと緑茶に……剣士君は何にするの？」

久遠がメニューを開いてオレに聞く。そういえばオレだけ決めてなかったな。

「じゃ、水」

「……………本当にそれでいいの？」

「久遠、水を侮ってはいけないんだぜ？」

実際、水だけで一か月は過ごせた時期があったからな。

「……………水を一つ。あと軽食にこれとこれに……」

「にゃー（ネコマンマを）！」

「はいはい。ティーセット三つと水とネコマンマですね」

「「え？」」

春日部以外の三人が「ん？」と首を傾げる。まあ、注文内容と面子考えればネコマンマは誰が注文したかわかるけど……。

すると春日部は驚いたような顔をして猫耳店員に聞いた。

「三毛猫の言葉、わかるの？」

「そりやわかりますよー私は猫族なんですから。お歳の割に随分と綺麗な毛並みの旦那さんですし、ここはちよつぴりサービスさせてもらいますよー」

「にや、にやうにやーにやー（ねーちゃんも可愛い猫耳に鉤尻尾やな。今度機会があったら甘ガミしに行くわ）」

「やだもーお客さんお上手なんだから」

「箱庭つてすごいね。私以外にも三毛猫の言葉がわかる人がいたよ」

三毛猫を抱き抱えて春日部が言う。というか君も解るんですね。

「ちよ、ちよつと待つて。あなたもしかして猫と会話できるの!？」

久遠も驚いた。そりやそうか人間は普通は会話できないからな。

「もしかして猫意外にも意思疎通は可能ですか？」

ジン君が聞く。というかできるよね? 何かそんな気がする。

「うん。生きているなら誰とでも話是可以る」

やっぱりね（笑）

「じゃあそこに飛び交う野鳥とも会話が？」

「うん、きつと出来る? ええと、鳥で試したことがあるのは雀や鷺や

不如帰ぐらいだけどペンギンがいたからきつと大丈夫」

「ペンギンツ!？」

あ、何か少し春日部のギフトが羨ましくなってきた。

「う、うん。水族館で知り合った。他にもイルカ達とも友達」

……………水族館つて何だろう。

「会話の幅が凄いですね。でも、全ての種と会話が可能なら心強いギフトですね。この箱庭において幻獣との言葉の壁と言うのはとても大きいですから」

「そうなんだ」

「一部の猫族や黒ウサギのような神仏の眷属として言語中枢を与えられていれば意思疎通は可能ですけど、幻獣達はそれそのものが独立した種の一つです。同一種か相応のギフトがなければ意思疎通は難しいと言うのが一般です。箱庭の創始者の眷属に当たる黒ウサギでも全ての種とコミュニケーションをとることはできないはずです」

「つまり、春日部のギフトは素敵ギフトってわけか」

「素敵って……まあそうね。春日部さんには素敵な力があるのね。羨ましいわ」

久遠が羨ましそうに呟くのに、褒められた春日部は困ったように頭を掻いている。

「久遠さんは……」

「飛鳥でいいわ。よろしくね春日部さん」

「う、うん。飛鳥はどんな力を持っているの？」

「私？ 私力は……まあ、酷いものよ」

「おや？ 誰かと思えば東区画の最底辺コミュニティ、”名無しの権兵衛”のリーダー、ジン君じゃないですか。今日はオモリ役の黒ウサギは一緒じゃないんですか？」

春日部と久遠がそんな会話をしていると二メートル超えてそうな大柄な体つきをしてピチピチのタキシードを着た男に声を掛けられた。

……見た瞬間吹き出しそうになったのは秘密である。

「僕等のコミュニティはノーネームです。”フォレス・ガロ”のガルドIIガスパー」

ジン君はガルドと呼んだ男をにらみつける。が、男はその視線を気にせずにオレたちのテーブルの空席に腰を下ろした。……一人で二人分くらい場所とってるな。

「黙れ、この名無しめ。聞けば新しい人員を呼び寄せたらしいじゃないか。コミュニティの誇りである名と旗印を奪われてよくも未練がましくコミュニティを存続させるなどできたものだ。そう思わないかい？ お嬢様方に、紳士様」

「失礼ですけど、同席を求めるならばまず氏名を名乗った後に一言添

えるのが礼儀ではないかしら?」

おおう。このお嬢様は本当に初対面の人に高圧的だな。初対面の人には愛想よくと親に習わなかったのか? 因みにオレは学んでない。

「おつと失礼。私は箱庭上層に陣取るコミュニティ六百六十六の獣の傘下である

「烏合の衆の」コミュニティのリーダーをしている……ってマテやゴラア!! 誰が烏合の衆だ小僧オオ!」

「ぶふっ!」

烏合の衆のコミュニティリーダーで、少し笑ってしまった。

あと、久藤さん。そんな風にきつつい視線を送られると心が持たないのでやめてください。

「これは失礼しました。実はこちらのジン君が喋りたがらない箱庭のことについて教えて差し上げようかと」

ガルドはジン君を睨みつけた後、すぐに冷静になって話を再開した。

「ガルド! それ以上口にしたら」

「口を慎めや小僧。過去の栄華に縋る亡霊風情が。自分のコミュニティがどういう状況におかれてんのか理解できてんのかい?」

「ハイ、ちよつとストップ」

二人を久遠が言葉が遮った。……いつから久藤は司会進行役になつたんだ?

「ねえ、ジン君。ガルドさんが指摘しているジン君のコミュニティが置かれている状況というものを説明していただける?」

おいおい、久遠。お前はどっちの味方だよ? ほら、ジン君が睨まれて黙ってるじゃないか。……だからといってこつちを睨むのもやめてもらえませんか? つか、さつきからオレ喋ってないよね? 何でわかるの?」

「貴方は自分のことをコミュニティのリーダーと名乗ったわ。なら黒ウサギと同様に、新たな同士として呼び出した私たちにコミュニティとはどういうものかを説明する義務があるはずよ。違つかしら?」

「いや、そんなのその場のノリでい「何か言った？」何でもないですよ嬢様」

……箱庭に来てから一日も経ってないのにもう上下関係ができた。その光景を見ていたガルドが急に口を挟んできた。

「レディに紳士様、貴方達の言うとおりだ。コミュニティの長として新たな同士に箱庭の世界のルールを教えるのは当然の義務。しかし、先ほども言ったように、彼はそれをしたがらないでしょう。よろしければフォレス・ガロのリーダーであるこの私がコミュニティの重要性和小僧ではなくジンⅡラツセル率いるノーネームの

コミュニティを客観的に説明させていただきますが」

久遠は一度ジン君を見るがジン君は俯いて黙り込んだままだった。

「頼みたくないけどお願いするわ」

凄く嫌々した表情で言う久遠。だから、聞かなくても良かったのに……。

じゃ、オレは猫と遊んでるか。

「にゃー（小僧、ワシと話でもするか）？」

「そうだね、話が長くなりそうだから話そうぜ」

「にゃにゃー（なんや、あんたもワシの言葉がわかるんか）」

「ハハッ！ ただの勘だ」

「……にゃ、にゃにゃー（……あんた、面白いやつちやなー）」

「逆廻程じゃねーよ」

「……………天野、凄い」

03話 喧嘩売りました

「単刀直入に言います。もしよろしければ、黒ウサギ共々、私のコミュニケーションに入りませんか？」

「へ？」

猫と話してるうちに話が佳境に入っていたらしい。

まあ、オレは話聞いてなかったから春日部と久遠の二人だろうな。

「な、何を言い出すんですガルドーガスパー!?」

「黙れや、ジンーラッセル」

机を叩いて激昂したジン君がガルドに文句を言おうとするが、ガルドの剣幕に押されて言葉の続きが出てこない。

子供相手に大人げないなあ……。

そもそもテメエが名と旗印を新しく改めていけば最低限の人材は残っていたはずだろうが。それを貴様の我が儘で追い込んでおきながら、どの顔で異世界から人材を呼び出した」

「そ……それは」

ジン君が言いよどむ。どうも誇りと仲間を天秤にかけて誇りが勝ったって感じだな。

「何も知らない相手なら騙しとおせるとでも思ったのか？ その結果黒ウサギと同じ苦労を背負わせるってんなら……こつちも箱庭の住人として通さなきゃならねえ仁義があるぜ」

ジン君が僅かに怯んだ。その様子にガルドは鼻を鳴らすと話を再開した。

「……で、どうですか？ 返事はすぐには言いません。コミュニケーションに属さずとも貴方達には箱庭で三十日の自由が約束されています。一度、自分達を呼び出したコミュニケーションと私達 フォレス・ガロ」のコミュニケーションを視察し、十分に検討してから——」

「結構よ。だってジン君のコミュニケーションで私は間に合っているもの」

「は？」

あ、フラれた。

断られたガルドと俯いていたジン君は思わず声を上げていた。

誘いをばつさりと切り捨てられ、ガルドもジン君も飛鳥の顔をうかがうが、久遠は何事もなかったように紅茶を飲み干すと、春日部に笑顔で話しかける。

「春日部さんは今の話をどう思う？」

「別に、どっちでも。私はこの世界に友達を作りにきただけだもの」

あれ？ こっちの世界に来た理由が意外と軽い……。

「あら意外。じゃあ私が友達一号に立候補していいかしら？ 私達って正反対だけど、意外に仲良くやっていけそうな気がするの」

久遠は自分の髪を触りながら春日部に聞く……自分で言いながら恥ずかしくなるなよ。

「うん。飛鳥は今までの人たちと違う気がする」

春日部はそれを快く承諾した。よかった、よかった。

「にや、にやー（よかったな、お嬢……お嬢に友達ができて、ワシも涙が出るほど嬉しいわ）」

「良かったな、三毛猫」

「にやうにや（せやな……）」

晴れて友達になった春日部と久遠。それを感慨深げな目で見るオレたち。これがいわゆるハッピーエンドってやつか……。

「理由を聞かせてもらっても……」

ガルドがこのいい雰囲気の水を差す。ちつ、空気が読めない奴だな……。

「私、久遠飛鳥は——裕福だった家も、約束された将来も、おおよそ人が望みうる人生の全てを支払って、この箱庭に来たのよ。それを小さな小さな一地域を支配しているだけの組織の末端として迎え入れてやる、などと慇懃無礼に言われて魅力的に感じるとでも思ったのかしら。」

……本物のお嬢様だったとは。

「で？ 剣士君はどうするの？」

「え？ オレも？」

まさかの展開だ……。

「……また話を聞いてなかったのかしら」

「いや、話は聞いてたぞ」

三毛猫の話は……な。

「そう……で、どうするのかしら？」

久遠が半眼でこちらを睨みながら、ガルドとジン君は期待した眼差しを向けながらオレの顔を見る。(因みに春日部は無表情のままだった)

ま、答えなんて最初から一つなんだけどな。

「オレは”ノーネーム”に入る約束してるから聞く意味はないだろ」
約束を破るわけにはいかないもんな。

「……………は？」

この場にいる全員が「何言っただこいつ」みたいな顔をしている。
……何故だ？

「どうしたんだよ。話は決まったじゃないか」

一向に話が進みそうにないので会話を促してみる。その言葉に、久遠がいち早く現実に戻ってきた。

「剣士君、”約束”とはどういうことなの？ 私たちはこの場で初めてジン君たちのコミュニケーションの話をしてたはずよ？」

久遠の言葉にジン君と春日部が首を縦に振っている。……説明しないとダメか。

「じゃあ久遠、今から説明するがツツコミは話が終わった後な」

「わかってるわよ」

「それじゃ、ガルドさんもお聞きください。剣士の冒険く迷子の森散策」

「迷子になるくらいなら行かなければいいのに」

ツツコミは後からと言ってたのに……

□ ■ □ ■ □

「……………迷った」

春日部に別れを告げてからはや数分、オレは森の中を彷徨っていた。

当てもなく森を移動していたのが仇となり現在進行形で迷子という存在になっていた。

「まさかこのまま遭難して飢え死に……はないか。しばらくすれば黒ウサギが搜索するだろうし」

それを抜かしたとしてもオレは飲まず食わずで二週間はいけるけどな。

「でもなあ……あれ、残り二日位になると喋れない位きついんだよなあ……」

正直あまりやりたくない。つまりこれは黒ウサギが来なかった場合の最終手段になるわけだ。

……ぶつくさ言ってる場合じゃないか。

「とりあえず人を探してみよう。そこから町か村にでも案内してもらえばいいし」

やることは決まった。後は会えることを祈って行動するだけだ。

自分を信じて明日を信じて頑張るか！

「せーの……どんっ！」

そしてオレはその場から思い切り駆けだした。

「……オレは何てバカなんだ」

あれから数分、木に両手をつけて先ほどの自分の行動を悔やんでいた。

何故、悔やんでいるかって？ そんなの………元来た道も忘れたからに決まってるだろ！

でもそう長く落ち込んでられないか……。

復活まで、3、2、1……

「よお、兄ちゃん」

カウント終了と同時に肩に手を置かれた。……あれ？ 似たようなことがついさつき会ったような……ま、いいか。

とりあえず、肩に手を置いた奴の顔でも見るか。

「持つてる金全部置いてけや」

まさか、ガラの悪い男どもに囲まれていたとは思わなかったよ。

つか、金持っていないし。ここは誤魔化すとするか。

「すいません、此処の近くに町とかがありますか？」

なるべく警戒心も敵意も見せず、へらへらと笑ういつもの顔で尋ねる。

「町？ んなもん、此処からあの方角にまつすぐ進めばあるだろうが」

「あ、そうなんですか。ありがとうございます。では」

「おう。気をつけろよ——じゃねだろ、ゴラ！」

ちっ！ 後ちよつとだったのに……。

「いいから、金全部置いてけつてんだよ！」

ボスと思われる男の怒声で周りの男どもが一斉に武器を構える。おお、怖い怖い。

「金つて言われても、持ってないから無理だ」

「なら、身ぐるみ全部置いてけや」

いきなり服全部脱げつて……もしかして変態？

「嫌ですよ。変態の手籠めにされたくないですから」

「んなこたしねーよ！ いいから金目のモン全部置いてけ！」

「だが、断る！」

「このガキ……ッ！」

おやおや、目の前の変態(笑)が顔を真っ赤にして怒ってる。ハハハ、見てるだけで面白いな。

と、まあ、おふざけも体外にしてそろそろ真面目に取り合つてやるか。

「なあ、おっさんたち。オレとギフトゲームをしないか？」

「あ？ ギフトゲームだと？」

「そうだ。おっさんたちが勝てばオレは身ぐるみ全部置いてく。オレが勝つたら見逃す……どうだ？ 悪い条件じゃないだろ？」

「何だと……」

やはり、まだ釣れないか……後一押しだな。

「そっちは複数人、こっちは一人なんだ。条件がいいのはそっちだろ？」

「てめえ……俺たちをなめてんのか？」

お、頭に血が上ってきたな……あと少し……。

「もしかして……負けるのが怖いのか？」

「ツ！ 上等じゃねえか……」
かかった。

「では、ギアスロールを確認してください」

わざと仰々しく振る舞い、相手の集中を乱す。

そして、オレはギアスロールに必要な事項を書き込んでいく。

『ギフトゲーム名： 集団リンチ』

プレイヤー一覧：天野剣士

盗賊

クリア条件：相手を死亡以外で戦闘不能にする

敗北条件：死亡以外で戦闘不能になる

宣誓 ” 盗賊 ” 印』

ま、この勝負は相手がよほどでない限り負けないけどね。

「それじゃ、始めるか」

「『ウオオオオオ!!』」

むさい男が一齐に寄ってくる凶……気持ち悪いな。

じゃ、時間かけるのももったいないし、一気に終わらせるか。

そういつて、パチンツと指を鳴らす。すると盗賊の頭に顔サイズの岩が落ちてきた。

「ガ……ハッ……」

うめき声を漏らして全員倒れる。やっぱりね、オレが勝った。

「じゃあね、おっさんたち。道教えてくれてありがとう」

それだけ言い残してオレはおっさんが言った方角へ走り出した。

「……迷った」

まさかの迷子リターンズ。

だが、今度は場所が違う。今度はおっさんから教えてもらった町（建物）の中だった。

「もしかしたら、オレは方向音痴なのか？」

だが、オレはここで大切なことを思い出す。

「そういえば、目的地決めてなかったから迷子じゃないじゃん」
なら、迷子リターンズじゃないな。

「そうとわかれば恐れるものは何もないな」
あるとすれば、黒ウサギたちの捜索がないことだな。

「……先に黒ウサギたちの情報を聞き出すか」

そう思つて、辺りを見回す。すると、奥から子供たちが桶を持って歩いているのが見えた。

「……………聞くついでに助けるか。」

オレは、子供たちに小走りで駆け寄つた。

「おーい君たちー」

オレの呼びかけに子供たちが驚いたような顔をしてこちらを見る。どうかこの子供たちも獣耳が……。

「なんででしょうか？」

子供たちの中で一番年上に見える狐耳をした娘が応えた。が、その眼には少しばかり警戒心があつた。まあ、初対面だからしょうがないか。

「えつと、聞きたいことがあるんだけど……いいかな？」

できるだけ優しい声音で敵意を和らげる。実際敵じゃないし。

「えつと……何が聞きたいんですか？」

少し首を傾げながら聞き返してくる。どうやら話は聞いてくれるみたいだな。

「ここら辺にウサミミ生やして、なんかエロいかっこうしてるお姉さん知らない？」

ちなみにこれも嘘じゃない。ただ、黒ウサギの特徴を絞つたらこうなつただけだ。

「あ、黒ウサギのお姉ちゃんのことですか」

「うん。そうだよ」

どうやらあれだけで伝わるらしい。

「……………子供たちにもそう思われてるってことか。」

「もしかして、黒ウサギのお姉ちゃんが呼びに行った新しい人ですか？」

少し目をキラキラさせてこちらを見る。よく見ると後ろの子供たちもキラキラと興奮したような目で見ていた。

「うん。だけど、ちよつとはぐれちゃって……何処にいるか知らないかな?」

「うーん……黒ウサギのお姉ちゃんの場合は知らないけど外でジン君が待つてると思っています」

「ジン君?」

もしかしてここに入る前にちらりと見えたあの少年のことだろうか。

「はい。私たちのコミュニティのリーダーでなんです。黒ウサギのお姉ちゃんは私たちをお世話してくれてるんです」

「へえー」

黒ウサギ、実は人望が厚いのか……。

「うんしょ……」

後ろの女の子が桶を持ち直す。そういえば重そうにしてるな……どれ、情報をくれたお礼に手伝ってやるか。

「ごめんな、そんな重いもの持たせたまんまで」

「い、いえー! 慣れてるので大丈夫です!」

「そうは言ってもな……よし、じゃあ、これに乗せるといいよ」

そう言つてオレは足元に荷物を運ぶための台車を出す。

「え? あれ?」

子供たちが今まで見当たらなかった台車があるのを見て、目を白黒していた。

まあ、無理もないか。本当に何もなかったんだから
《……………》

「ほら、これにその桶を置いて運ぶといいよ」

「え? でも……」

「いいから、いいから。これはオレがコミュニティの仲間になった証としてくれるかな?」

「え? じゃあ、入ってくれるんですか!」

二つの尻尾を嬉しそうに振りながら訪ねてくる狐ちゃん(仮)……

全力で振ってる尻尾が可愛いな。

「ああ、約束するさ」

狐ちゃん（仮）の頭に手を乗せて優しく撫でながら言う。

「あ、ありがとうございますー！」

□ ■ □ ■ □

「——というわけなんだ」

「で、その後すぐ私たちが入ってきたと……」

「正解」

「……頭痛くなってきた」

どうやら、久遠はオレと話すときと幸せが逃げるか頭痛が起こるらしい……難儀な体質だな。

「あ、あの、皆様……」

「黙りなさい」

何かを言いかけたガルドの口が勢いよくガチンツと閉じられた。よかつたな、舌は噛んでないみたいだぞ。

「貴方からはまだまだ聞き出さなければいけないことがあるのだもの。貴方はそこに座って私たちの質問に答え続けなさい」

久遠の言葉にガルドは椅子に罎を入れる勢いで座る。

……さつきから様子がおかしいな。久遠の作業か？

「ガルドⅡガスパー……？」

ジン君は突然のことに口を挟めずに、ガルドは完全にパニックに陥っていた。

「お、お客さん！ 当店で揉め事は控えて」

ガルドの様子に驚いた猫耳の店員が急いで駆け寄る。

「ちようどいいわ。猫耳の店員さんも第三者として話を聞いてくれなにかしら。たぶん、面白い話が聞けると思うわ」

面白い話……ねえ……

「ねえジン君。コミュニティの旗印を賭けるギフトゲームなんてそんなに頻繁に行われるものなのかしら？」

「い、いえ。そんなことはありません。旗印を賭ける事はコミュニティの存続を賭ける事ですだからかなりのレアケースです」

「そうよね。それを強制できるからこそ魔王は恐れられる。だってら、なぜあなたはそんな勝負を相手に強制できたのかしら?」

「ほ、方法は様々だ。一番簡単なのは、相手のコミュニティの女子供を攫って脅迫すること。コレに動じない相手は後回しにして、徐々に他のコミュニティを取り込んだ後、ゲームに乗らざるを得ない状況に圧迫していった」

「なるほど。けど、そんな方法じゃ、組織への忠誠なんて望めないわね。どうやって従順に働かせているのかしら?」

「各コミュニティから、数人ずつ子供を人質に取ってある」

人質……ずいぶん腐ったことしてるんだな。

ピクリと久遠の片眉が動き、コミュニティに無関心な春日部でさえ不快そうに目を細める。

「それで、その子供たちは何処に幽閉されているの?」

「もう殺した」

その瞬間、オレはガルドを殴りたい衝動に駆られたが何とか抑えこむ。

「始めてガキ共を連れてきた日、泣き声が頭に來て思わず殺した。それ以降は自重しようと思っていたが、父が恋しい母が愛しいと泣くのでやっぱりイライラして殺した。それ以降、連れてきたガキは全部まとめてその日のうちに始末することにした。けど身内のコミュニティの仲間を殺せば組織に亀裂が入る。始末したガキの遺体は証拠が残らないように腹心の部下が食

「黙れ」

ガチン! と先ほど以上の勢いでガルドの口が閉じられた。

「素晴らしいわ。ここまで絵に描いたような外道とはそうそう出会えなくてよ。さすがは人外魔郷の箱庭の世界といったところかしら……ねえジン君?」

久遠に冷ややかな視線と凄みを増した声を向けられ、ジンは慌てて否定する。

「彼のような悪党は箱庭でもそうそういません」

むしろたくさんいた方がおかしい。

「そう？ それは残念。それよりジン君。箱庭も法を犯せば裁くようだが、この件は裁けるのかしら？」

「難しいです。吸収したコミュニティから人質を取ったり、身内の仲間を殺すのはもちろん違法ですが……裁かれるまでに彼が箱庭の外に逃げ出してしまえば、それまでです」

「そう。なら仕方がないわ」

パチンと久遠が指を鳴らす。それが合図だったのか、ガルドを縛り付けていた力は霧散し、自由が戻ったガルドはテーブルを砕いて立ち上がった。

「……………この小娘ガアアアア!!」

雄叫びとともにガルドの姿は虎の姿へ変わった。

「テメエ、どういうつもりか知らねえが……俺の上に誰が居るかわかってんだろうなあ!? 箱庭第六六六外門を守る魔王が俺の後見人だぞ!! 俺に喧嘩を売るってことはその魔王にも喧嘩を売るってことだ! その意味が——」

「黙りなさい。私の話はまだ終わってないわ」

またガルドは勢いよく黙る。だが、ガルドは丸太のように太くなった腕を振り上げて久遠に襲い掛かった。

……………そんなことさせないけどな。

「ッ!」

ガルドが動きを止める。いや、正確に言えば何かに引っ張られるように止まった。

何故なら、彼の腕が地面と鎖で繋がっているからだ。

「……………これは剣士君がやったのかしら？」

「ハハッ、どうだろうね」

何もしていないかのように肩をすくめて言う。

「それにしても好都合ね。ジン君の目標である”打倒魔王”に一歩近づけるなんて……そうでしょ、ジン君？」

久遠の言葉にジンは大きく息を呑んだ。魔王の名が出たときは恐

怖に負けそうになったが、目標を久遠に問われて我に返る。

「……はい。僕達の最終目標は、魔王を倒して僕らの誇りと仲間達を取り戻すこと。いまさらそんな脅しには屈しません」

「そういうこと。つまり貴方には破滅以外のどんな道も残されていないのよ」

「く……くそ……っ！」

ガルドは悔しそうに拳を下ろす。それと同時に鎖が霧散して消え去る。

「だけどね。私は貴方のコミュニティが瓦解する程度の事では満足できさないの。貴方のような外道はずたぼろになって己の罪を後悔しながら罰せられるべきよ」

このお嬢様はきつとSなのだろう。じゃなかったらここまでえげつないことは言わない。

「そこで皆に提案なのだけれど」

久遠の言葉に頷いていたジンや店員達は、顔を見合わせて首を傾げる。

久遠はガルドに視線を向け、不敵な笑みを浮かべて言った。

「私たちとギフトゲームをしましょう。貴方の”フォレス・ガロ”存続と”ノーネーム”の誇りと魂を賭けて、ね」

本当にこの人は恐いな……。

04話 ” サウザンドアイズ” に行こう

「な、なんであの短時間に”フォレス・ガロ”のリーダーと接触してしかも喧嘩を売る状況になったのですか!?”「しかもゲームの日取りは明日!?”「それも敵のテリトリー内で戦うなんて!?”「準備している時間もお金ありません!?”「一体どういうつもりがあつての事です!?”「聞いているのですか三人とも!!?”

「”ムシヤクシヤしてやった。今は反省しています!?”

「オレは悪くない。久遠がそそのかした」

「黙らっしやい!!!」

オレ達の所に戻ってくるなり黒ウサギはキレ始めた。すぐ切れるなんて……カルシウムが足りないんじゃないの?」

「別にいいじゃねえか。見境なく選んで喧嘩売ったわけじゃないんだから許してやれよ」

逆廻がニヤニヤしながら止めに入った。何だ、生きてたのか。案外丈夫なんだな。

「い、十六夜さんは面白ければ良いと思ってるかもしれませんが、このゲームで得られるものは自己満足だけなんですよ?この”契約書類”〈ギアスロール〉を見てください」

そう言つて逆廻に契約書類を見せる。

この際だから何度でもいうがオレの名前が書いてあつてもそれは久遠がほぼ強制的に記入しただけであつてオレは悪くない。どちらかと言うと非戦派だからな。

「はあく……仕方ない人たちです。まあいいです。腹立たしいのは黒ウサギも同じですし。”フォレス・ガロ”程度なら十六夜さんが一人いれば楽勝でしょう……つて剣士さんはいつの間に戻ってきてたんですか?」

「ジン君達が門くぐったところで合流した」

「つか何言つてんだよ。俺は参加しねえよ?」

「当たり前よ。貴方なんて参加させないわ」

黒ウサギ、ドンマイ。

「だ、駄目ですよ！ 御二人はコミュニティの仲間なんですからちゃんと協力しないと……」

「そう言う事じゃねえよ黒ウサギ。いいか？ この喧嘩は、コイツラが売った、そしてヤツラが買った。なのに俺が手を出すのは無粋だつていつてるんだよ」

「あら分かってるじゃない。もちろん貴方もね」

「お前ら絶対集団行動苦手だろ」

「剣士君は黙ってて」

「……」

「このお嬢様怖い……」。

「ヤハハ。安心しろ、頼まれても参加しねえから」

「もう好きにしてください……」

明らかに疲弊した様子の黒ウサギが肩を落としながら呟いた。この時オレは思った。『なんて困らせがいのあるウサギだろう』と。

横に置いてあった水樹の苗を抱きかかえながら黒ウサギはコホンと咳払いをした。

「そろそろ行きましようか？ 本当は皆さんを歓迎するために素敵なお店を予約して色々セツティングしていたのですけれども……不慮の事故続きで今日はお流れとなってしまうました。また後日、きちんとした歓迎を」

「いいわよ、無理しなくて。私達のコミュニティってそれはもう崖っぷちなんでしょう？」

「まあ、崖っぷちじゃなくても歓迎なんていらないけどな」

「おいおいノリ悪いな」

「ハハッ、歓迎ならあの外道だけで十分だ」

「ヤハハ！ そりゃ言ってるな」

その前にも盗賊と言う名の雑魚に歓迎されたしな。

「も、申し訳ございません。みなさんを騙すのは気が引けたのですが……黒ウサギ達も必死だったのです……」

「もういいわ。私は組織の水準なんてどうでもよかったもの。春日部さんはどう？」

「私も怒ってない。そもそもコミュニティがどうの、というのは別に
どうでも……あ、けど」

「どうぞ気兼ねなく聞いてください。僕らにできる事なら最低限の用意はさせてもらいます」

ジン君がそう言うのと、思い出したかのように春日部が言う。

「そ、そんな大それた物じゃないよ。ただ私は……毎日三食御風呂付の寢床があればいいな、と思っただけだから」

その言葉を聞いた瞬間、ジン君が固まった。

……まさか水源も危ないのか？ もしそうならオレは二週間
で何とか川の近くに住まないといけなくなってしまう！

「それなら大丈夫です！ 十六夜さんがこんな大きな水樹の苗を手に入れてくれましたから！ これで水を買う必要も無くなりますし、水路も復活させる事も出来ます♪」

黒ウサギが嬉々とした顔で水樹を持ちながら口をはさむ。これに安心したのか、特に女性陣の顔が明るくなった。いや、本当によかったよ。これで食べ物が無くても一か月は生きていられる。

つか、水樹って何？ 見た事もないぞあんなの……話の流れ的に普通の植物ではないらしいけど……何かのギフトみたいなもんか？

「ジン坊ちゃんは先にお帰りください。ギフトゲームが明日なら」サウザウンドアイズ”に皆さんのギフト鑑定をお願いしないと。この水樹の事もありますし」

”サウザウンドアイズ”？ コミュニティの名前か？

”サウザウンドアイズ”……直訳すると『千の目』か。

何だろう、そのコミュニティにオレは行かない方がいいような気がする……。

「YES。サウザウンドアイズは特殊な”瞳”を持つ者達の群体コミュニティ。箱庭の東西南北・上層下層の全てに精通する超巨大商業コミュニティです。幸いこの近くに支店がありますし」

あ、そこに行ったらダメだ。確実に面倒なことになる。少なくともオレの『もう一つのギフト』がある限りは……。

「ギフトの鑑定というのは？」

「勿論、ギフトの秘めた力や起源などを鑑定する事です。自分の力の正しい形を把握していた方が、引き出せる力はより大きくなります。皆さんもご自分の力の出処は気になるでしょう?」

黒ウサギに対し三人は複雑そうな微妙そうな顔で返した。因みにオレはへらへら顔のまま冷や汗がだらだらと流れていた。

しかし、反対する声は無く五人と猫一匹は”サウザウンドアイズ”に向かって歩き出したのだった。……………嫌な予感が杞憂で終わればいいのに…………。

05話 和装ロリに出会いました 前編

”サウザンドアイズ”へ向かう途中の道でオレ達四人は滅多に見られないほど満開の桜を見上げていた。因みにジン君は一足早くコミュニティに帰って行った。

「桜の木……ではないわよね？ 花卉の形が違うし、真夏になっても咲き続けているはずがないもの」

「いや、まだ初夏になったばかりだぞ。気合の入った桜が残っていてもおかしくないだろ」

「……？ 今は秋だったと思うけど」

「春日部こそ何言ってるんだ？ 今は春のはずだぞ」

「……………」

何故だ……何故春日部はそんな可愛そう物を見る目でオレを見るんだ！

そんなことを言い合っているオレ達に黒ウサギは笑いながら説明をする。

「皆さんはそれぞれ違う世界から召喚されているのです。元いた時間軸以外にも歴史や文化、生態系など所々違う箇所があるはずですよ」

「へえ？ パラレルワールドってやつか？」

「近いですね。正しくは立体交差並行世界論というものなのですけども……今からコレの説明を始めますと一日二日では説明しきれないので、またの機会ということに」

なんか難しそうな話をし始めてしまった。唯一解ったことと言えればオレ達が違う世界の住人だということぐらいだな。

曖昧に話を濁して振り返る黒ウサギ。どうやら目的の店に着いたらしい。その商店の旗には青い生地に互いが向かい合う二人の女神像が記されているが多分あれが”サウザンドアイズ”の旗なのだろう。

「よし。帰るか」

クルツ（オレが方向転換する音）

「させない」

ガツ（春日部がオレの左肩を掴む音）

「……………」

「諦めなさい剣士君」

久遠の一言で全てを諦めることにした。

「…………へイ、ミス春日部。なぜオレの肩をまだ掴んでいるんだい？」

「放したらまた逃げ出すから」

「オーケー。理由は解った。なら何故オレの肩に指が食い込む位の勢いで掴んでるんだ？」

「放したらまた逃げ出すから」

「…………今日はいい天気ですね」

「放したらまた逃げ出すから」

「RPGの村人かよ!？」

あ、この世界に来て初めてツッコミした気がする。

そして店の前では、看板を下げる割烹着の女性店員の姿に黒ウサギは慌ててストップをかけようと手を伸ばす。

「まっ——」

「待った無しです御客様。うちは時間外営業はやっていません」

厳しいなこの店員。この容赦のなさはまるで久遠のようだ。

「なんて商売つきの無い店なのかしら」

「ま、全くです！ 閉店時間の五分前に客を締め出すなんて！」

「文句があるならどうぞ他所へ。あなた方は今後一切の出入りを禁じます。出禁です」

「そうだぞ、五分前行動は団体行動の基本だからな」

「出禁!? これだけで出禁とか御客様舐めすぎでございますよ！ それに剣士さんはどうしてそちらの味方をするのですか!？」

「行かずに済むのならオレは喜んで敵になろう！」

あ、なんかオレかつこいいことと言ったな。

「天野？」 グググツ（オレの肩をさらに強く掴む音）

「店員さん、話し合いをしようじゃないか」

「調子のいい人ね」

左肩が潰されそうなのに敵も味方も関係ないからな。うん。

「まあ、”箱庭の貴族”であるウサギのお客様を無下にするのは失礼ですね。中で入店許可を伺いますので、コミュニティの名前をよろしいでしょうか？」

「……………」

一転して黙り込んだ黒ウサギだが、逆廻が何の躊躇いもなく名乗った。

「俺達は”ノーネーム”ってコミュニティなんだが」

「ほほう。ではどこの”ノーネーム”様でしょう。よかつたら旗印を確認させていただいてもよろしいでしょうか？」

あ、この店員オレ達”ノーネーム”だから入店させない気だな。何となく雰囲気でわかる。

黒ウサギは心の底から悔しそうな顔をして、小声で呟いた。

「その……………あの……………私たちに、旗はありま——」

その瞬間、目の前を白い何かが通り過ぎて行った。

「いいいいやほおおおお！久しぶりだ黒ウサギイイイイ！」

「きやあ—————……………！」

そして遠くなる黒ウサギの悲鳴と共にその白い何かは水路に落ちていった。

それを、オレ達は目を丸くし、店員は頭を抱えていた。

「……………おい店員。この店にはドッキリサービスがあるのか？ なら俺も別バージョンで是非」

「ありません」

「なんなら有料でも」

「やりません」

「店員さんバージョンは？」

「ありません！」

怒られた……………。

「し、白夜叉様!? どうして貴女がこんな下層に!？」

「そろそろ黒ウサギが来る予感がしておったからに決まっておるだろに！ フフ、フホフホホ！ やっぱりウサギは触り心地が違うのう！ ほれ、ここが良いかここが良いか！」

セクハラ親父のごとく黒ウサギの体を触りまくる白髪少女。その顔は満面の笑みで幸せを強く主張していた。

「し、白夜叉様！　ちよ、ちよっと離れてください！」

白夜叉と呼ばれた少女……いや、幼女？　は無理やり引き剥がされ、頭を掴み店に向かって投げつけた。

「ナイススロー」

縦回転でこっちに来る少女は、そのまま逆廻の方に飛んでいき――

「天野！　シュートッ！」

「ゴバァ！」

――オレに向かって蹴られた。

それを見たオレは……。

「任せろ！」

春日部の手を振りほどいてゴールキーパーよろしく正面から受け止めた。

「逆廻……ナイスシュート」

「お前こそナイスセーブだぜ」

そしてオレと逆廻は一緒にワールドカップを目指す約束を――

「お、おんし！　初対面の美少女をボールみたいに蹴るとは何様だ！」
せずに白髪幼女に逆廻が怒られていた。

「十六夜様だぜ。以後よろしく和装ロリ」

が、特に悪びれた様子もなく言う。こいつ少し礼儀とか謝罪の心を習ったほうがいいんじゃないだろうか？

「で？　あなたはいつまで抱きしめてるつもりかしら？」

「え？　ああ、そういえば忘れてた……」

因みに白髪幼女は正面からオレと抱き合う形になっており顔だけは逆廻の方に向けている。

「すいませんね、忘れてて」

「いや、おんしの腕の中は気持ちよかったですのでかまわんぞ」

特に怒った様子もなく、オレの腕から離れる白髪幼女。そして、春日部がオレの袖を少し引つ張る。

「天野はロリコン？」

「？ 何だそれ」

聞いたことがない言葉だ。

「あなた……知らないの？」

久遠が驚いたような顔をしながら言う。もしかして皆知ってる言葉なの？

「知らないけど……もしかして知ってないとやばいこと？」

「そういうことはないけれど……」

久遠が何かを言いにくそうに顔を伏せる。その代わりに逆廻が笑い笑顔で答えた。

「ロリコンってのは年の離れた幼女を恋愛対象や性的対象として見る奴のことだ」

「春日部！ オレはロリコンじゃない！」

不本意極まりない。

「貴女はこの店の人？」

久遠が話を変えるために白髪幼女に話しかける。

「おお、そうだと。この”サウザンドアイズ”の幹部様で白夜叉様だよご令嬢。仕事の依頼ならおんしのその年齢のわりに発育がいい胸をワンタッチ生揉みで引き受けるぞ」

この幼女は変態なのだろうか？

「オーナー。それでは売り上げが伸びません。ボスが怒ります」

どこまでも冷たい人だなあ……同じ割烹着ならリリちゃんの方がまだ愛想がよかったな。

「つと。それよりも」

オレは手になるべく柔らかい素材のタオルを出して、白髪幼女の頭に乗せた。

「む。なんじや？」

「ヤっさん濡れたままだからよく拭かないとだめだろ」

そう言いながらオレはヤっさんの頭を軽く拭いていく。

「ほう……おんし中々優しいのお」

「ハハッ。それはどうも、ヤっさん」

「ところでその”ヤっさん”と言うのは私のことか？」

”白夜叉”って長いからね」

「人の名前に文句を言うか……まあよかろう」

そう言いながらもオレに頭を拭かれ続けるヤっさん。こうしてみると本当に幼女に見えるけどこの人は本当に此処の幹部なのだろうか？

「やっぱり天野はロリコ——」

「いや、違うから」

「というよりそのタオルは何処から出したのかしら……」

人の親切心をなんと心得ているんだ。

「うう……まさか私まで濡れる事になるなんて」

ずぶ濡れの黒ウサギが現れた。

「黒ウサギにはタオルは出さないのかしら？」

「最初に湖に放り出した恨みがあるから断る」

「それもそうね」

ヤっさんは店先で黒ウサギ達を見回してにやりと笑った。

「ふふん。お前達が黒ウサギの新しい同士か。異世界の人間が私の元に来たという事は……遂に黒ウサギが私のペットに」

「なりません！ どういう起承転結があってそんなことになるんですか！」

ウサ耳を逆立てて黒ウサギが怒る。あんまり怖くないけど。

「まあ、冗談はさておき話があるのじやろ。話があるなら店内で聞こう」

さっきのエロ親父紛いの光景を見た後じゃ何処まで本気かわからないが、ヤっさんは笑って店へ招く。

「よろしいのですか？ 彼らは旗も持たない”ノーネーム”のはず。規定では」

”ノーネーム”だとわかっていながら名を尋ねる、性悪店員に対する侘びだ。身元は私が保証するし、ボスに睨まれても私が責任を取る。いいから入れてやれ」

少し拗ねるような顔をする店員。まあ、店員にしてみればルールを守っただけなのだから気を悪くするのは仕方がない事か。

店員の睨みを受けながらヤっさん以下四名が入っていく。

「……あなたは入らないのですか？」

「できることなら帰りたい」

「天野、行くよ」

「結局こうなるけどね……」

「……ゆっくりして行ってください」

こうしてオレは春日部に襟首を引きずられながら入店した。

それにしても最後の店員さんの顔、少し笑ってたような……ま、いつか。

「生憎と店は閉めてしまったのでな。私の私室で勘弁してくれ」

オレ達を通されたのは白夜叉の私室だった。

和風の部屋作りで香のような物が焚かれており、風と共にオレ達の鼻をくすぐる。

個室と言うにはやや広い和室の上座に腰を下ろしたヤっさんは、大きく背伸びをしてからオレ達に向き直った。

「もう一度自己紹介しておこうかの。私は四桁の外門、三三四五外門に本拠を構える”サウザンドアイズ”幹部の白夜叉だ。この黒ウサギとは少々縁があつてな。コミュニティが崩壊してからもちよくちよく手を貸してやっている器の大きな美少女と認識しておいてくれ」

「はいはい、お世話になっております本当に」

うわ、凄い投げやりな反応だ……。

その隣で春日部が小首を傾げて問う。

「その外門、って何？」

「箱庭の階層を示す外壁にある門ですよ。数字が若いほど都市の中心に近く、同時に強力な力を持つ者達が住んでいるのです。箱庭の都市は上層から下層まで七つの支配層に分かれており、それに伴ってそれぞれを区切る門には数字が与えられています。ちなみに、白夜叉様がおっしゃった三三四五外門などの四桁の外門ともなれば、名のある修羅神仏が割拠する人外魔境と言っても過言ではありません」

黒ウサギは紙に上空から見た箱庭の略図を描いてオレ達に見せた。それを見た春日部が感想を言う。

「……超巨大タマネギ？」

「いえ、超巨大バームクーヘンではないかしら？」

「そうだな。どちらかといえばバームクーヘンだ」

三人がそれぞれの意見を口に出す。が、オレは三人に聞かなければならないことができた。

「バームクーヘンって何？」

「……………」

場の空気が凍りついた。もしかしたら世間的には一般的なものだったかもしれない……。

「剣士君、喫茶店に入ってからずっと思ってたけど……あなたどんな生活してきたの？」

「もしかして家がすごく貧しかったとか？」

「それでも仲のいい奴とかから話位は聞いたことがあるはずだろ」

何か逆廻まで心配(？)してきたのが逆につらい……。

「おんしらやめてやれ。本気で泣きそうだぞ……」

ヤっさんの静止もありオレの生活の謎については聞かない方向になった。ヤっさん、マジ感謝です……。

「おんしらはうまいこと例えるが、私はバームクーヘンに一票だ。その例えなら今いる七術の外門はバームクーヘンの一番皮の薄い部分にあたるな。更に説明するなら、東西南北の四つの区切りの東側にあたり、外門のすぐ外は”世界の果て”と向かい合う場所になる。あそこはコミュニケーションに属してはいないものの、強力なギフトを持ったものが住んでおるぞ——その水樹の持ち主などな」

白夜又は薄く笑って黒ウサギの持つ水樹の苗に視線を向ける。ヤっさんが指すのは逆廻が叩きのめした蛇神のことだろう。

「して、一体誰が、どのようなゲームで勝ったのだ？ 知恵比べか？ 勇気を試したのか？」

「いえいえ。この水樹は十六夜さんがここに来る前に、蛇神様を素手で叩きのめしてきたのですよ」

逆廻よ、お前は素手で神を倒したのか……お前も相当な『規格外』だな……。

「なんと!? クリアではなく直接的に倒したとはな!? ではその童は神格持ちの神童か?」

「いえ、黒ウサギはそう思えません。神格なら一目見れば分かるはずですよ」

「む、それもそうか。しかし神格を倒すには同じ神格を持つか、互いの種族によほど崩れたパワーバランスがある時だけのはず。種族の力でいうなら蛇と人ではドングリの背比べだぞ」

つまり逆廻がいれば一対一の戦いで負けることはほとんどないってことか。

「白夜叉様はあの蛇神様とお知り合いだったのですか?」

「知り合いも何も、あれに神格を与えたのはこの私だぞ。もう何百年も前の話だがの」

小さな（というか限りなく無に近い）胸を張り、カカと豪快にヤツさんが笑う。

「へえ? じゃあオマエはあのヘビより強いのか?」

「ふふん、当然だ。私は東側の”階層支配者”だぞ。この東側の四桁以下にあるコミュニティでは並ぶ者がいない、最強の主権者なのだから」

あ、この流れはヤツさんに喧嘩売る流れだ。あーあ。巻き込まれずに帰って寝たいな……。

「そう……ふふ。ではつまり、貴女のゲームをクリア出来れば、私達のコミュニティは東側で最強のコミュニティという事になるのかしら?」

「無論、そうなるのう」

「そりゃ景気のいい話だ。探す手間が省けた」

たぶんそれは好戦派のお前らだけであって、非戦派のオレにとって景気の悪い話だろう。

第一勝てるわけがない。逆廻の軽いとはいえ蹴りを喰らってもピンピンしてるヤツさんは冗談抜きで久遠や春日部、それに逆廻も勝て

ないだろ……。

ま、お前らだったら……な。

「抜け目ない童達だ。依頼しておきながら、私にギフトゲームで挑むと？」

「え？ちよ、ちよつと御三人様!?!」

「よいよ黒ウサギ。私も遊び相手には常に飢えている。だが、おんしは私に挑まないのか？」

そう言つてオレを見る。

正直参加したくない。だけど春日部がこつちを『参加するよね?』みたいな顔で見てるから断りにくい……。

だがそこで諦めるオレじゃない！ スキル発動！ ”言霊使いへこ とばマスター〜”!

「勝ちの見える戦いなんて面白くないからね。オレは参加しないよ」

どうだ！ 嘘を言わず参加したくない意思を告げるテクニク!

我ながら素晴らしい言い訳だ。

「へえ、逃げるのかチキン野郎」

……今の言葉カチンツとききたな。

「逆廻、お前は勘違いをしてないか？」

「……どういことだ」

逆廻が目を細めて威嚇するようにオレを見る。が、そんなのは今のオレには何の脅しにもならない。

「オレの勝ちがわかつてる勝負なんて面白くもなんともないってことだ」

「な……っ!?!」

「ほう……」

黒ウサギが絶句し、ヤっさんが興味深そうにこちらを見る。他の三人は面白いものを見たという顔をしていた。

そして勝てると言い切ったオレは正気に戻って激しく後悔していた。

「ヤハハハハ！ ホントに面白いな、お前は！」

逆廻が声を上げて笑う。畜生、挑発に乗せられた……ッ！

「では、楽しみにしているとするかの」

できれば忘れてください。

「そうそう、ゲームの前に確認しておく事がある」

「なんだ？」

「ヤっさんは着物の裾から”サウザンドアイズ”の旗印——向かい合う双女神の紋が入ったカードを取り出し、表情を壮絶な笑みに変えて言った。

「おんしらが望むのは”挑戦”か——もしくは、”決闘”か？」

その瞬間、オレ達の視界が爆発的に変化し、脳裏を様々な情景が過ぎた。

黄金色の穂波が揺れる草原、白い地平線を覗く丘、森林の湖畔。

その果てでオレ達が投げ出されたのは、白い雪原と湖畔——そして、水平に太陽が廻る世界だった。

06話 和装ロリに出会いました 後編

突然だけど、北極や南極って氷だらけのイメージがあるけど実は北極に比べて南極はそうでもないんだよ！

ということでききなり謎の場所に飛ばされました。しかも若干寒い。

「今一度名乗り直し、問おうかの。私は”白き夜の魔王”——太陽と白夜の星霊・白夜叉。おんしらが望むのは、試練への”挑戦”か？それとも対等な”決闘”か？」

「水平に廻る太陽……そうか、白夜と夜叉。あの水平廻る太陽やこの土地はお前を表現しているってことか」

いつの間にかイベントが進行していた!? まあ、いつも流すんですけど。

「如何にも。この白夜の湖畔と永遠に沈まぬ太陽。これこそ私がもつゲーム盤の一つだ」

「これだけ莫大な土地が、ただのゲーム盤……!？」

「如何にも。して、おんしらの返答は？」 「挑戦”であるならば、手慰み程度に遊んでやる。——だがしかし”決闘”を望むなら話は別。魔王として、命と誇りの限り闘おうではないか」

え、マジで？ ”挑戦”を選べばヤっさんと戦わなくて済むの？

「因みにこの小僧は強制で私と決闘じゃ。楽しみにしとるからの」 「戦わなくていい。そう思ってた時期がオレにもありましたよ。とどうかヤっさんオレに容赦なくね？」

「天野」

「どうした、春日部？」

「ドンマイ」

何か励まされた。これはあれだな、オレがフルボッコにされると思ってる顔だな。

「降参だ、白夜叉」

逆廻が諦めたような声を出す。意外だな、逆廻が諦めるなんて。意地でも決闘するもんだと思ってた。

「ふむ？ それは決闘ではなく、試練を受けるといふ事かの？」

「ああ。これだけのゲーム盤を用意できるんだからな。あんたには資格がある。——いいぜ。今回は黙って試されてやるよ、魔王様」

「……………」

もつと素直にものを言うように親から言われなかつたのか！ ちなみにオレはない！

一頻り笑ったヤっさんは笑いをかみ殺して残りの二人にも問いかけた。

「く、くく……………して、他の童達も同じか？」

「……………ええ。私も、試されてあげてもいいわ」

「右に同じ」

「こいつらの悪いところは全員が全員プライドがダイヤモンド並みに高いところだと思います」

「おいおい、俺のプライドはダイヤモンド並みに脆くはないぜ」

「逆廻は少し黙ってようか」

ていうかダイヤモンドって脆かつたんだ。初めて知った。

「も、もう！ お互いにもう少し相手を選んでください！」

一連の流れをヒヤヒヤしながら見ていた黒ウサギは、ホッと胸をなでおろしていた。黒ウサギ、その動作はまだ早いと思うぜ？ なんせコイツ等だからな。

「いいじゃねえか。大事になる前に止めたんだし。ほら、今回は空気呼んで止めただろ」

「黙らっしやい！ そもそも、”階層支配者”に喧嘩を売る新人と、新人に売られた喧嘩を買う”階層支配者”なんて、冗談にしても寒すぎます！ それに白夜叉様が魔王だったのは、もう何千年も前の話じゃないですか!!」

「え、そうなの？」

「何？ じゃあ元・魔王様ってことか？」

「はてさて、どうだったかな？」

ケラケラと悪戯っぽく笑うヤっさんに、ガクリと肩を落とすオレ以外の四人。

その時、彼方に見える山脈から甲高い叫び声が聞こえた。獣とも、野鳥とも思えるその叫び声に逸早く反応したのは、春日部だった。

「何、今の鳴き声。初めて聞いた」

「ふむ……あやつか。おんしら三人を試すには打って付けかもしれない」

「いい加減その試すものの中にオレも入れてくれませんか？」

「却下じゃ」

そんな理不尽な……。

湖畔を挟んだ向こう岸にある山脈に、チヨイチヨイと手招きをするヤっさん。一体何を呼び出す気なんだ……。

すると何ということでしょう。体調五メートルはあろうかという巨大な獣が翼を広げて空を滑空し、風の如くオレ達の所に現れたではありませんか。

……何これ、化け物？

「グリフォン……うそ、本物!?!」

「フン、如何にも。あやつこそ鳥の王にして獣の王。”力”知恵”勇氣”の全てを備えたギフトゲームを代表する獣だ」

何その正義のヒーローの鏡みたいな生物。なんか格好よく見えてきた。

ヤっさんが手招きすると、グリフォンは彼女の元に降り立ち、深く頭を下げて礼を示した。

「肝心の試練だがの。おんしら三人とこのグリフォンで”力”知恵”勇氣”の何れかを比べ合い、背に跨って湖畔を舞うことが出来ればクリア、という事にしようか」

すると虚空から”主催者権限”にのみ許された(であろう)輝く羊皮紙が現れる。

ヤっさんは白い指を奔らせて羊皮紙に記述する。

オレ達が覗き込んだ羊皮紙にはこう書かれていた。

『ギフトゲーム名：”鷲獅子の手綱”

・プレイヤー一覧 逆廻 十六夜

久遠 飛鳥

春日部 耀

・クリア条件　グリフォンの背に跨り、湖畔を舞う。
・クリア方法　”力” 知恵 勇氣 の何れかでグリフォンに認められる。

・敗北条件　降参か、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

宣誓　上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

” サウザンドアイズ ” 印

……………やっぱりオレが入ってなかった。

「私がやる」

読み終わるや否やピシッ！ と指先まで綺麗に挙手したのは春日部だった。瞳はグリフォンを羨望の眼差しで見つめている。動物だけじゃなくて幻獣も守備範囲ですか…………。

「にや…………にや、にやー（お、お嬢…………大丈夫か？なんや獅子の旦那より遥かに怖そうやしデカイけど）」

「大丈夫、問題ない」

春日部の瞳は真っ直ぐにグリフォンに向いている。ホント、動物のことになったら目の色が変わるんですね。わかるほど一緒にいたことないけど。

隣で呆れたように苦笑いを漏らす逆廻と久遠。

「OK、先手は譲ってやる。失敗するなよ」

「気を付けてね、春日部さん」

「うん、頑張る」

二人は春日部に言葉をかけ送り出す。その顔はまるで戦地に向かう兵士を見送るかのような…………とかではなく、明らかに面白がっていた。

まったく、こいつらは…………。

「春日部、ちよつといいか？」

「なに？」

「ヤっさん、ギフトが関係してなきや物の貸し借りはありか？」

「そうじゃな、かまわんぞ」

「ありがとう」

とりあえずオレはブレザーを脱いで春日部に差し出す。

「何をするかわからんが、とりあえずそれ着とけ」

「……ありがとう。それじゃあ行ってくる」

春日部は頷いてブレザーを手に取りグリフォンに駆け寄った。

とりあえず頑張れと心の中で言っとくか。

春日部がグリフォンに駆け寄るが、グリフォンは大きく翼を広げてその場を離れた。たぶん戦いの時、ヤっさんを巻き込まないようにする為だろうな。

春日部をを威嚇するように翼を広げ、巨大な瞳をぎらつかせるグリフォンを、追いかけるように春日部は走り寄っていった。

残り数メートルほどの距離で足を止め、まじまじとグリフォンを観察している。

驚と獅子。猛禽類の王……ってところか？ 流石に動物と心を交わしてきた春日部でも、それはあくまで地球上の生物の話。"世界の果て"で黒ウサギや十六夜が出会ったと言った、大蛇とかの生態系を遥かに逸脱した、幻獣と呼び称されるものと相對するのは、これが初めての経験だろうなあ。

「え、えーと。初めまして、春日部耀です」
「!?」

春日部がグリフォンに慎重に話しかけた。

ビクンツ!! とグリフォンの肢体が跳ねた。瞳から警戒心が薄れ、グリフォンからは僅かに戸惑いの色が浮かぶ。大丈夫ですよー、その子は確かに少しおかしいかもしれないけど面白い子ですよー。

「ほう……あの娘、グリフォンと言葉を交わすか」

ヤっさんは感心したように扇を広げた。

「でも、ま。春日部のギフトが幻獣にも有効である証だな」

これで春日部はこの箱庭で意思疎通のできない生物が存在しないことが分かった。マジですごいな……。

春日部は大きく息を吸い、一息に言った。

「私を貴方の背に乗せ……誇りをかけて勝負しませんか？」

「……グルル!? (……何!?)」

いきなり何言っちゃってんどううね、この子は。相手は一応すつごい生物なんだけどな。たぶん気高い(と思われる)グリフォンにとつて、『誇りを賭ける』とは、最も効果的な挑発だよな。

春日部は返事を待たず、続ける。

「貴方が飛んできたあの山脈。あそこを白夜の地平から時計回りに大きく迂回し、この湖畔を終着点と定めます。貴方は強靱な翼と四肢で空を駆け、湖畔までに私を振るい落とせば勝ち。私が背に乗っていられたら私の勝ち。……どうかな？」

春日部は小首を傾げる。

確かに、その条件なら”力”と”勇氣”の両方を試すことができるな。危険だけど。

「グルルル……? (娘よ。お前は私に”誇りを賭ける”と持ちかけた。お前の述べるとおり、娘一人振るい落とせないならば、私の名誉は失墜するだろう。——だがな娘。誇りの対価に、お前は何を賭す?)」

「命を賭けます」

即答だった。それはもう、一秒も経たないうちに。

「だ、駄目です!」

「か、春日部さん!? 本気なの!?!」

あまりに突飛な返答に黒ウサギと久遠から驚きが上がってるし。

「貴方は誇りを賭ける。私は命を賭ける。もし転落して生きていても、私は貴方の晩御飯になります。……それじゃ駄目かな?」

「…… (……ふむ)」

春日部の提案にますます慌てる久遠と黒ウサギ。それを逆廻とヤっさんが制する。

「双方、下がらんか。これはあの娘から切り出した試練だぞ」

「ああ、無粋な事はやめておけ」

「そんな問題ではございません!! 同士にこんな分の悪いゲームをさ

せるわけには——」

「大丈夫だよ」

春日部が振り向きながら久遠と黒ウサギに頷く。その瞳には何の気負いもなく、むしろ勝算ありと思わせるようなものだった。

……まったく。

「そんなこと言われても……天野さんも何か言ってくださいよ」

「そうだな……春日部」

「何？ 天野」

「後でリリちゃんたちと遊ぼうぜ」

「……うん」

「天野さん!？」

「おっと、もちろん黒ウサギたちも参加だぜ？」

「そうなんですか？ よかったで——ってそんなことを言いたいんじゃないありません!!」

何が不満だというのだ。

「グルル……（乗るがいい、若き勇者よ。鷲獅子の疾走に耐えられるか、その身で試してみよ）」

黒ウサギの謎の不満を聞いていると、春日部は頷き、手綱を握って背に乗りこんでいた。

鞍が無いためやや不安定になっているけど、春日部はしっかりと手綱を握り締めて獅子の胴体に跨っていた。

鷲獅子の強靱で滑らかな肢体を擦りつつ、満足そうに囁く。

「始める前に一言だけ。……私、貴方の背中に跨るのが夢の一つだったんだ」

「グル『——そうか』」

グリフォンは苦笑してこそばゆいとばかりに翼を三度羽ばたかせた。

そしてグリフォンは前傾姿勢を取るや否や、大地を踏み抜くようにして薄命の空に飛び出した。

「きゃあ!？」

衝撃で吹き付けられた風圧に女子二人が短い悲鳴を上げていた。

逆廻はどことなく面白そうにそれを見ていた。

「おー速い速い」

山脈へ遠ざかっていく姿を発見できたが、グリフォンの翼が大きく広がり固定されていることに驚いた。……羽、いるのか？

同じことに春日部は逸早く気が着付いたようで、強烈な圧力に苦しみながらも、感嘆の声を抑えられずに漏らした。

え？ 何で聞こえるかって？ ……秘密だけだな!!

「凄い……! 貴方は、空を踏みしめて走っている!!!」

鷲獅子の巨体を支えるのは翼ではなく、旋風を操るギフト。

グリフォンの翼は彼らの生態系が、通常の進化系統樹から逸脱した種であることの証なのか？

「グルルル——（娘よ。もうすぐ山脈に差し掛かるが……本当に良いのか？ この速度で山脈に向かえば——）」

「うん。氷点下の風が更に冷たくなって、体感温度はマイナス数十度ってところかな」

森林を越え、山脈を跨ぐ前に、グリフォンは少し速度を緩めた。

低い気温の中を疾風の如く駆けるグリフォンの背に跨れば、衝撃と温度差の二つの壁が牙を剥き、人間に耐えられるものではない。

たぶんこれはグリフォンの良心から出た最後通牒。

春日部の真っ直ぐな姿勢に思うところあつての言葉だろうな。

だけど、その心配を春日部は微かな笑顔と挑発で返した。

「だけど、大丈夫って言ったから。それにこれも着てるし……」

上から着ているブレザーをギュッと掴んで言う。……少し恥ずかしいな。

「それよりいいの？ 貴方こそ本気で来ないと。本当に私が勝つよ？」

手袋越しに強く手綱を握り締める春日部。本当に挑発が好きだね、君たちは。

「グルル、グルアアー！（よかろう。後悔するなよ娘!）」

グリフォンも挑発に応じるし。

今度は翼も用いて旋風を操る。つて、うわ凄いわ速くなってるし。

遙か彼方にあつたはずの山頂が瞬く間に近づき、羽ばたく衝撃で割れる氷河が春日部には見えてるんだろうな。

恐らく衝撃は人間の身体など一瞬で拉げさせてしまうほどだが、春日部は歯を食いしばって耐えていた。

これだけの圧力、冷氣。これらに耐えている春日部の耐久力は少女を逸脱しているはずだ。

グリフォンは背中から聞こえる僅かな吐息に、驚嘆とも困惑ともいえる感情が湧き始め、苦笑を洩らしている。

手加減無用と悟るや否や、グリフォンは頭から急降下、さらに旋回を交えて春日部を振るいかける。

「……本気だな」

鞍が無い獅子の背中では縋れるような無駄は無く、掴まるものは手綱だけになり、春日部の下半身は空中に投げ出されるように泳いでいた。

「っ……!!」

流石にもう軽口は叩けない。

春日部は必死に手綱を握り、グリフォンは必死に振り落とそうと旋回を繰り返す。

「春日部さん!!」

久遠と黒ウサギが春日部を応援するため叫ぶ。

グリフォンは地平ギリギリまで急降下して大地と水平になるように振り回す。

それが最後の山場だったのだろう、山脈からの冷風も途絶え、残るは純粹な距離のみ。

「なあ、逆廻」

「なんだ？」

「これが終わったからお前も遊ぶか？」

「ヤハハ！ いいね、俺も混ぜろよ」

勢いもそのままに、湖畔の中心まで疾走したグリフォン。

春日部の勝利が決定し、久遠と黒ウサギが喜んだ瞬間——春日部耀の手から手綱が外れ、春日部の小さな体は慣性のまま打ち上げられ

た。

「!? (何!?)」

「春日部さん!?!」

安堵を漏らす暇も称賛をかける暇もなく、春日部の身体が打ち上げられ、グリフォンと久遠は息を呑んだ。

助けに行こうとした黒ウサギの手を逆廻が掴む。

「は、離し——」

「待て! まだ終わって——」

すると春日部の身体が突然動きを変えふわっと、春日部の身体が翻った。

慣性を殺すような緩慢な動きはやがて彼女の落下速度を衰えさせ、遂には湖畔に触れることなく飛翔したのだ。

「……なっ」

その場にいた全員が絶句した。

先ほどまでそんな素振りを見せなかった春日部が、湖畔の上で風を纏って浮いているのだ。

ふわふわと泳ぐように不慣れな飛翔を見せる春日部に、呆れたように笑う逆廻が近づいた。

「やっぱりな。お前のギフトって、他の生き物の特性を手に入れる類だったんだな」

軽薄な笑みに、むっとしたような声音で春日部が返す。

「……違う。これは友達になった証。けど、いつから知ってたの?」

「ただの推測。お前黒ウサギと出会った時に”風上に立たれたら分かる”とか言ってたろ。そんな芸当は人間にはできない。だから春日部のギフトは他種とコミュニケーションをとるわけじゃなく、他種のギフトを何らかの形で手に入れたんじゃないか……と推察したんだが、それだけじゃなさそうだな。あの速度で耐えられる生物は地球上にいないだろうし?」

興味津々な逆廻の視線をフイッと避ける。その先にはちようどオレが立っていたので必然的に目が合う。

「春日部」

オレはヘラヘラした笑みを浮かべる。

「楽しかったか？」

春日部は驚いた顔をした後、すぐに微笑んで返す。

「うん。楽しかった」

「それはよかった。……だがな、春日部」

一度言葉を区切って春日部の頭に手を置く。

「もう二度と命を簡単に捨てるようなこと言うなよ？」

「っ!?!／／／」

春日部の顔が少し赤くなった。どうした？

「あなたねえ……」

近くでは久遠が呆れていた。何故だ、オレは今凄く真面目なこと言ったのに。

そんなことを思っていると傍に三毛猫が駆け寄った。

「ニャー！（お嬢！怪我はないか!?!）」

「う、うん、大丈夫。天野、上着ありがとう」

「どういたしまして」

春日部からブレザーを返してもらう。うわ、冷たっ!!

冷たいブレザーをどうするか悩んでいると、グリフォンが近寄ってきた。

「グルルルル（見事。お前が得たギフトは、私に勝利した証として使って欲しい）」

「うん。大事にする」

……このままでも寒いし、着とくか。

07話 居残りで決闘しました

見渡す限り白一色の極寒の大地にオレとこの大地みたいに白い髪をした魔王は互いに睨み合って立っていた。

——と言えば少しは格好よく聞こえるかもしれないけど実際は黒ウサギ達は春日部のギフトゲームが終了して”ギフトカード”（お中元でもお歳暮でもお年玉でもないやつ）を貰って先に帰ってしまい、前々から言われていたヤっさんとの決闘を終わらせるために居残りを強要させられたのだ。……帰りてえなあ……。

「ふむ、して勝負方法はどうする？ 勝利条件はおんしが決めてよいぞ」

ヤっさんが腕を組んで問いかける。そんなのは決めなくていいですからオレを帰してください。ついでに言うとお面倒くさい。

「あー、じゃあ一発勝負ということで先に相手に一撃食らわせてら勝ちということぞ」

「ふむ……。おんし早く終わらせようと思っておるな？」

「ソナナコトハゴザイマセン」

「本当だよ？ 別にそんな理由で一発勝負にしたわけじゃないよ？」

「まあよい。少し待っておれ」

そう言うときヤっさんは手元に出したギアスロールにサラサラと何か書き始めた。

「ふふふ、実力の差を思い知らせてくれるわ（ボソツ）」

ヤっさんから漏れた不吉な言葉に悪寒を感じて背中に嫌な汗が流れ落ちる。……ヤっさんの書いてるギアスロールが不吉なものに見えるでしょうがない。

「ほれ、確認してみろ」

そう言っつてヤっさんからギアスロールを手渡される。

『ギフトゲーム名：“一撃必殺”』

プレイヤー一覧：天野剣士

クリア条件：相手の体に一撃攻撃を与える

敗北条件：相手から体に一撃攻撃を与えられる

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

”サウザンドアイズ”印』

……………このゲーム名にヤっさんの悪意を感じる。

「どうだ？ 中々良いゲーム名だと思わんか？」

「ヤっさんはオレを殺す気？」

「そんなことはない。ただ久しぶりにあのような事を言われたのでな、少しイラツとしただけだ」

薄い笑いを浮かべながらヤっさんが言う。恐らくヤっさんの言う少しは普通の人の数倍の意味合いだろう。出なければいつの間にか出している槍の素振りなどしないはずだ。

……………どうしよう、ヤっさんが怒ってる。

ここでオレが取れる選択肢は三つ、ヤっさんと戦うか土下座して見逃してもらうか自分から負けに行くか……。とりあえず三つ目はないな、オレだつて負けるのは嫌だし何よりそうしたらヤっさんにばれる。二つ目は準備と覚悟はもうできているのだがヤっさんが許してくれるかどうかだな。

となると消去法で選択肢一になるわけだが……………あれ？ 結局戦うことしかできないの？

「……………仕方ない、さっさと終わらせよう」

ため息を吐きながらヤっさんの方に向き直る。

「ほう、やつと戦う気になったのか」

素振りをやめて不敵な笑みを浮かべてオレを見る。やめて、そんな期待したような目を向けないで！

「別に、帰っていいなら帰るけど？」

「たわけ、あの小僧たちより面白そうな暇つぶしを手放すのはもったいないだろう？」

「せめてもうちよつと良い言い方はないのかよ……………」

駄目だ、また戦う気が失せていく……………っ！

「なあ、ヤっさんこの勝負ヤっさんには暇つぶしっていうメリットが

あるけどオレに何かメリットがある？」

「メリットか……。そうだな、あるとすれば何もしなくていい楽な世界に行けることだな」

それは一撃で殺すということなのか？

「じよ、冗談だからそんな顔をするな……。私に勝ったらおんしにもギフトカードをやろう」

「ギフトカード……。わかったその条件でやろう」

別段ギフトカードが欲しいというわけではないのだが、少しギフトカードがどこまでを”ギフト”として判断するのか気になったのだ。オレの”あれ”はもしかしたらギフトじゃないかもしれないからな……。

「それでは始めるとするかの」

槍を両手で持ち構えを取るヤっさん。殺気こそ出してはいないがその構えにまったく隙はなかった。

「お手柔らかにお願いします」

オレは拳を構えてすぐ動けるように踵を少し浮かす。

「断るっ！」

「っ!？」

ヤっさんの声が聞こえたと思った次の瞬間には目の前にヤっさんがいた。つか早すぎでしょ！

「ふっ！」

勢いよく突き出される槍を体を捻って避ける。しかし完全には避けきれしておらずブレザーが少し切れていた。

「ほう、言うだけのことはあるな」

「そりやどうも」

というか今の避けなかったらお腹直撃コースだったよね？ マジで殺りにきてんの？

「次は本気で殺ろうか」

マジだった……。。

「せいっ！」

突き出したままだった槍を横に薙ぐ。それを伏せてかわし、地面に

ついた手を軸に体を回してヤっさんの足を蹴る。

「おっ！」

バランスを崩したヤっさんに追い打ちをかけるように顎に掌底を放つが、体の重心を少し横にずらして掌底を回避する。

そのまま受け身を取ってオレと距離を開けるとゆっくりと立ち上がる。その顔は本当に嬉しそうで、今を楽しんでいるような顔だった。

「ヤっさんずいぶん嬉しそうだね？」

「おんしが中々強いからな、楽しいのだ」

「……さいで」

本当にこの世界にいる人たち（逆廻を筆頭とした）は戦闘狂ばかりなのか？

「ほれ、ポーっとしてると死ぬ……ぞっ！」

「くっ！」

またヤっさんが槍を突き出して突撃をする。しかし今度はただの突きではなくそれを連続で繰り返すので槍をかわすのが難しい。

「ほれほれ！」

嬉々として槍を連続で突くヤっさんに対してオレは当たらないように槍をかわすのに必死で苦笑しかできなかった。

「……にやろ」

槍を突き出して引く時にできる僅かな隙を狙って槍の柄を拳で横に弾く。その隙に体勢を整えようとするが、それを許さないかのようにはヤっさんの蹴りが眼前に迫る。

それを腕をクロスして防ぐが、小柄な体格の割に結構な重さの蹴りだったので衝撃に踏ん張りきれずに体が後ろに吹き飛んだ。

受け身を取って体勢を立て直すですがすぐにヤっさんの槍が襲ってきて横に飛んでその槍をかわす。

そのままヤっさんに拳を放つが左手で受け止められた。

「ははは、やっぱ強いな」

「くっつ、おんしやっぱりなめてたな？ ギフトも使わずに勝てるわけ無かろうに」

「え？」

「ん？」

衝撃の事実思わず声を出して驚いてしまう。まさか――

「ギフト使ってよかったの？」

ヤっさんが槍使ってるからギフトは使っちゃだめなのかと思った。「まさかおんしはギフトも使わず私に一撃喰らわせようと思ってたのか？」

呆れた目でヤっさんが見てくる。いや、ここはフェアな勝負んいしようと思っただよ。え？ 武器対素手の時点でフェアじゃないって？ 気にすんな！

「てことは何だ？ ギフト使ってもいいの？」

「さつきからそう言っておろうに……」

「だってそんなことしたらヤっさんもう負けたようなもんだよ？ それでもいいの？」

「元魔王だぞ？ むしろつり合いが取れてフェアというものではないか」

ふんと胸を張って左手で掴んでた拳を放してくれた。敵の拳を放すとか余裕ありありですか。後々後悔しますよ？

「そうですか。なら……はい、オレの勝ち」

「痛っ!？」

ピコツつという高い音を立ててヤっさんの頭をオレの手にした”

ピコピコハンマーで”叩く。

「はい、オレの勝ち」

「不意打ちとは卑怯な……っ!？」

そこでやつとヤっさんは今の自分の状態に気が付く。

「これだけじゃ避けられると思っただから先手を打たせてもらったよ」

今のヤっさんは、両腕に手枷が二つ、両足に足かせが二つずつはめられておりそれが全て鎖と地面で固定されている状態だ。ヤっさんのフルパワーなら外せないこともないだろうが反射で体を動かすにはいささか力が足りない。

「お、おんしこれはいったい……」

ヤっさんがまだ少し動揺しながら聞いてくる。それに対してオレはいつもの調子で答える。

「何って、ヤっさんがギフトを使っただけって言ったじゃん」

「ぎ、ギフトだと!?!」

さらに驚いたような声を出す。まったく、これ位で驚くとは元魔王の名が泣くぞ?

「そ、オレのギフト。能力としては空間に物質を生み出すところかな」

「物質の……生成……」

「そんなに驚くことはないだろ? 箱庭じゃ聞いたことくらいあるだろ」

「神格レベルでならな。しかしこれは……」

しげしげと両腕の手枷を見るヤっさん。そんなに珍しいのか?

「これは本当にお前が作ったのか?」

何を言い出すかと思えばそんな当たり前の疑問だった。

「何言ってるの? ギフトじゃなきゃこんなの瞬時に出せないよ」

「いや、確かにそうだが……」

じゃらじゃらと音を立てて手枷を観察するように眺める。あ、外すの忘れてた。

「ヤっさん動かないでね」

そう言って注意を促した後にはオレはヤっさんの手枷の間に紙を作って手枷を真つ二つにして外す。

「物質を押し退けて新しい物質を作ったのか……」

自由になった両腕をグルグルと回しながら呟く。ヤっさんの反応からするとオレが今やっていることは結構珍しいようだ。

「しかし……ここまで完璧な物質を作るなど……しかも座標を指定してなど聞いたことがないぞ」

「えっと、お取り込み中悪いんだけどオレにも説明してくれない?」

このままだとオレの存在を忘れてエンドレスに呟きが続きそうだったので強制終了させる。だけど説明してほしかったのは本当だしいか。

ヤっさんは「そうか」とオレの方に向き直り説明を開始した。

「おんしのギフトは神格、又はそれに準ずる者が使えるようなモノだ。しかし、おんしのように座標を指定しての使用はもちろん、”ギフト”で作ったものが完璧な人工物になるなど今まで聞いたことがない」

「センサー、最後何言ってるのかよくわかりませーん」

「ふざけておるといつか殴るぞ」

「心の底からごめんなさい」

目が本気だった。

「まあ良い。解りやすく言うのだな、ギフトを使って無から有を生み出すのは私にもできるがそれは断じて完璧ではない。どんなに頑張ってもギフトを使って作ったという何かが残るのだ」

そう言つてヤっさんは足元にいまだに置かれている手枷の残骸を手に取る。

「しかし、本来なら役目を終えて残ったギフトの力で消滅するであろうこれがいまだに残っておるのは完璧な人工物でこの枷のどこにもギフトの力がのこっていないから。私はこんなギフト今まで見たこともない」

「成程な……」

つまりオレのギフトは結構なレア物というわけか。少ししか理解できなかったけど。

「おお、そういうえばゲームに勝った”恩恵”を渡すのを忘れておった。ほれ、受け取れ」

そう言つてヤっさんが柏手を打つと先に帰った逆廻達が貰ったのと同様の光り輝く一枚のカードが現れた。

だが、オレの手にしたカードは逆廻達のようなお洒落な色彩ではなく、ただ純粹に黒かった。悪意はないんだらうけど仲間外れ感が凄すぎる。

その漆黒のカードに天野剣士・ギフトネーム”創造者へクリエイト””解析眼へかいせきがん”と記されていた。

否、それ”だけ”しか記されていないかった。

「……………ヤっさん、ギフトってどんなものが”恩恵へギフト”にな

るんだ?」

「む? それはそのカードに表示されるモノという意味で良いか?」

オレが無言で頷くとヤっさんは腕を組んで説明を始めた。

「あの小僧達にも説明したが、その”ラプラスの紙片”に刻まれているのはおんしらの魂と繋がりがある”恩恵”の名称だ。つまりはマジックのような小手先を使って起こすものは絶対に記されない」

「そう……」

魂と繋がりのある恩恵……なら、ここに表示されていない”あれ”

は”恩恵”ではないということか。ま、あれが”恩恵”だとは思いたくないしな。

「他にはあの娘の”生命の目録へゲノム・ツリー”のような物もあるが、それも色々条件が必要でな。だからそこら辺にあるだけの石を”ギフト”とは言えない」

「つまりその条件をクリアすれば石もギフトになれると」

「殆どないが、まあそういうことだ」

そう言つてヤっさんは肩をすくめて薄く笑った。

でもま、これでオレのギフトの謎が一つ解けた。さらに深まった謎もあるけれど……。

「説明ありがとうヤっさん」

「なに、気にするな。良い暇潰しを見つけて私も満足だからの」

これから箱庭で生活していけるか心配になってきた。

「それはそうと、オレのギフトなんだけど多分そんなに珍しいモノでもないと思うぜ」

「どういうことだ?」

オレはヤっさんに自分のギフトカードを渡す。それを受け取ったヤっさんの顔が急に険しくなる。

「”創造者”と……”解析眼”? おんし二つもギフトを所持しておったのか?」

「いや、天然ものは”創造者”ただだぜ」

「ならこの”解析眼”というのは……」

「この目のことだ」

ヤっさんが驚愕した顔でオレを見る。ちなみにオレもヤっさんの驚いた顔を見て驚いている。

「それはギフトなのか……？」

「おう。この目は力を使わなければただの眼球なんだけど、能力としては見たものの構造から原子の組み合わせ、その他全部の情報を見ることが出来る。しかも記憶まで可能だ」

「そ、それは本当か!? しかしそんなギフトは聞いたことないぞ……」

「そりゃ、自作だし」

「自分で作った……だと……？」

あれ? ヤっさんが動かなくなつた。くそっ! 動け、動けよ!!

……ま、そう念じてても動かないわけですが。

「おーい、ヤっさん?」

肩を揺らして声をかけるとやっとヤっさんが復活した。

「お、おおスマン。少し思考の海に沈んでいた」

「オレのギフトってそんなに凄いモノなのか?」

「凄いに決まっつとるだろ戯けが」

純粋な疑問を聞いただけに怒られたよ……。泣いてなんか

いよ? だって男の子だもん!

「さっきの説明では省略したが、ギフトを創るには”恩恵”やそれなりの意味が必要になる。例えば水樹の苗でいうなら媒体になる”霊格の高い霊樹”に”水神の恩恵”の組み合わせで出来る」

「ほうほう」

「だが、おんしはここに来る前にはもう既にその目を作っていた。箱庭で作ったかおんしが博識ならまだ話はわかるが元の世界で新しいギフトを作り出すなど……」

「簡潔にまとめると?」

「おんしのギフトは”恩恵”を作り出すことができるということだ」

「わあ、そいつはスゲーなー(棒読み)」

ブチッ

あれ? なんか今聞こえてはならない音が聞こえたような……。

ヤっさんを見るといつの間にかファイティングポーズをとつてい

た。

「歯を食いしばれ。一発で楽にしてやろう」

そこからオレの記憶は無い。次に目覚めた時にはヤっさんの部屋で仰向けに倒れていて、右頬がかなり腫れていて凄く痛かった。

□ ■ □ ■ □

白夜又は目の前で仰向けに倒れている男を見下ろしながら考え事をしていた。

(この小僧のギフト……無から完全な有を生み出すだけではなく恩恵さえも生み出すというのか?)

出会ってから倒れている今でもヘラヘラと笑っているこの男は何度見てもそんな大それた力を持っているようには見えない。

(こやつ之力……神格にでもなるつもりか?)

神格でもないただの人間が持つにはあまりにも『規格外』なギフト。それに加えて物体の全てを解析できるギフト。それはまるで神が生物を生み出すために用意した力に思えてくる。

白夜又はそんな突飛で誰かが聞いたら下らないと一蹴されてしまうようなことを考え、頭を思いっきり振ってそれを脳内から追い出す。

「考えすぎかの……」

そう呟いて白夜又はこの巨大なゲーム盤を後にした。

08話 ノーネームに着きました

目が覚めたオレの頭のそばに手紙が一通置いてあった。辺りを見回してもヤっさんの部屋には誰も居らず、差出人を確認するためにその手紙を開いた。

『黒ウサギには悪いと思うが、私はおんしとおんしのギフトが気に入った。良かったら“サウザンドアイズ”に入ってくれんかの？もし入ってくれるのなら手厚い歓迎をしよう。』

．．．
白夜叉』

「ヤっさん」

ヤっさんからのサプライズに胸を打たれたオレはヤっさんの手紙を

「シュート！」

クシャつと丸めて投げ捨てた。

「何をしとるんだおんしは！」

「あ、ヤっさん」

居たのか。

襖を思いつきり開けて登場したヤっさんは何故か怒っていた。

「まあまあ、落ち着こうぜヤっさん」

「原因の小僧が何を言うか」

「なんだと」

オレが原因だって？ 駄目だ思い当たる節が一つもない。

「人の勧誘をあんな形で断られれば誰だって怒るわ」

「あ、あれドツキリとかじゃやないんだ」

「おんしは私をなんだと思っておる」

「よう、元魔王」

「幼女と言いきりそうになったのは秘密だ。」

「ヤっさんの無言の圧力が怖い。どれくらい怖いかと言うと久遠に

逆廻の性格足した位恐い。え、解りにくいって？ 生憎これ以上の表現は思いつかないよ（笑）

「マジですみませんでした」

「何故だろう、ヤっさんから何処かのお嬢様と同じモノを感じるよ

「ハア、まあ良い。次からは気を付けてくれ」

「心に刻んでおきます」

こうしてオレは何を怒られたのか解らぬまま謎の約束をさせられた。

ヤっさんは満足そうに頷くと数歩オレに歩み寄り腰を下ろした。

「それで先程話なのだが」

「幼女って言いそうになったこと？」

「その話は後で詳しく聞かすが、その前のことだ」

地雷を自ら踏み抜くとは思わなかった。

「無理を言っておるのは重々承知しておる、それでもおんしにこころ、”
サウザンドアイズ”に入ってほしい」

そう言うときヤっさんはオレに頭を下げた。

オレだつてこの行為の意味が解らないほど馬鹿ではない。元とは言え魔王が、それも一つのコミュニティの長が頭を下げる時、それは本気の時だ。

上に立つ人間は例えどんな時でも安易に頭を下げるべきではない。今まで見てきた連中も、どんなにゲスイ奴でも頭をほいほい下げる奴は居なかつた。

「ヤっさん」

だからここでふざけてはいけない。真面目にそして自分の気持ち偽らず答えるのが頭を下げたヤっさんに対する礼儀だ。

「ゴメン、オレは”サウザンドアイズ”には入らない」

「……理由を聞いても良いか？」

食い下がるヤっさん。半睨みなので少し怖いが気にしないようにする。

「約束をしたからね、”ノーネーム”に入るって。だからオレは”サウザンドアイズ”には入らない」

”契約書類”に書かれたことを破ってはいけないように、誰かとの”約束”も破ってはいけない。それはオレが昔から決めている絶対的なルールの一つで、オレを『人間』にしてくれた”アイツ”との約束。

「……そうか」

暫くの沈黙の後、ヤっさんがふつと小さく笑う。

「本当に残念だよ、黒ウサギのほかに良い暇潰しができたと思うたのに」

「断って良かったと心から思うよ」

さつきまでのシリアスな雰囲気返してくれ。

ヤっさんはオレを見ながらカカカと笑っている。しかしその笑いは何処か残念がっている様にも見えた。

……ま、ちよつとだけなら良いか。

「ヤっさん、オレは”サウザンドアイズ”には入らない。だけど……」
一度言葉を区切って、ゆつくりとヤっさんに言い聞かせるように言葉が続ける。

「暇な時は呼べば良い。そうすれば何時でも暇潰しの相手になってあげるからさ」

オレは自由だからな、と言葉の最後に付け加える。なるべく微笑んでみたのだがきつとオレの顔は何時ものようにヘラヘラと笑っているだろう。どうしても格好付かないのがオレだからな。

ヤっさんは暫し呆然とした後、声を上げて笑い出した。……微妙に傷つく。

「その時は棺を用意しておけよ、小僧」

「マジっすか……」

呼ばれた時は遺書でも書いておこう。

心の中であんなことを言うんじゃないかと激しく後悔しながらヤっさんの部屋を後にする。

「……」

意地の悪い店員さんが現れた。

「今、随分失礼なことを考えましたね？」

心を読まれていた。久遠といい店員さんといいいこの箱庭では人の心を読むのが当たり前なの？

「はあ……まあ良いです。今回は何もしないでおきます」

それは遠回しに次やったら容赦しないという宣言なのだろうか。

オレが脳内で『箱庭で逆らってはいけない人リスト』を作成していると、店員さんはおもむろに着物の袖口から一枚の紙を取り出した。

「何それ果たし状？」

「そう思いたいならそれでも良いですが」

「冗談ですすみマセン」

冗談が通じない人って大抵恐いよね。店員さんとか店員さんとか、後店員さんとか。

「貴方のコミュニケーションの本拠までの地図です。どうも貴方は置いて行かれたようなので念のためにどうぞ」

「店員さん……」

なんて良い人なんだろう！ 久遠と同じ扱いをしていて御免なさい、今度からは親しみを籠めて『テンちゃん』と呼ぼう。

「ありがとう、テンちゃん！」

「気持ち悪いです。二度とその名前で呼ばないでください」

本気で嫌がられた。きっとオレはこの時の汚物を見るようなテンちゃんの目を忘れないだろう。

「と、とりあえずありがとう。また来るよ」

そう言つてオレは店の前から立ち去った。

「……次来るときは閉店ギリギリで来ないでくださいね」

「……了解です」

やっぱり何だかんだ言いながらもテンちゃんは良い人だな。後で逆廻達に教えてやろう。

そう思いながらオレは空が明るいうちに黒ウサギ達の下に辿り着けることを祈りながらテンちゃんに貰った地図を開いた。



「天野はまだ帰って来てないの?」

耀が十六夜とジンにそう問いかけたのは、もう太陽も沈んで辺りが夜の闇に包まれた頃だった。

「ああ、姿どころか気配すら感じてないぜ」

十六夜はソファに座ったまま大袈裟に肩を竦めた。その正面に座るジンは行儀良く座ったまま疲れ切った顔をしている。

正直、今日は色々有り過ぎたのだ。特に十六夜の今後の作戦のことや明日のガルドとのギフトゲームのことで頭は破裂寸前になっているので疲労が心身を蝕み今すぐにでも倒れそうだ。

しかし彼も一コミュニティのリーダー。今はコミュニティの……しかもこの世界に招いたばかりの仲間が未だに帰って来ていない状況で一人倒れるわけにもいかず、どうにか意識を保っている状態だ。「先程白夜叉様の所に確認に行つて来たのですが剣士さんは何時間も前に店を出たとのことでした……」

しゅんと俯く黒ウサギ。恐らく十六夜達がギフトカードを貰った嬉しさについ剣士を置いて来てしまったことを悔いているのだろう。「この近辺を探してみたいけれど剣士君どころか人影一つ無かつたわ」

飛鳥がそう言うのと全員唸りながら考え込む。

「……おい黒ウサギ」

十六夜が鋭い目つきで黒ウサギを見る。それに若干怯えつつも「な、なんでしよう」と返事をする。

十六夜は間を開けて、確認するようにゆっくりと黒ウサギに問いかけた。

「アイツは此処の場所知つてんのか?」

「……………あ」

黒ウサギから冷や汗がだらだらと流れ落ちる。それを見た十六夜、飛鳥、耀の三人は深くため息を吐いて三人同時に口を開いた。

「「黒ウサギめ」」

「うう……今回は反論できないのデス……」

更にしゅんとなる黒ウサギ。それを見ていたジンは苦笑していた。暫く部屋の中を沈黙が支配する。十六夜は退屈そうに、飛鳥は少し苛立って、黒ウサギとジン、そして耀は心配そうに剣士の到着を待っている。

「あれ？ この音……何だろう」

耀が不意にそう呟いた。十六夜達も耳を澄ましてみると、微かにチリンチリンという高い音が聞こえてきた。

「これは……自転車のベルか？」

十六夜が呟くとその音が止んだ。

五人は先の襲撃未遂のこともあり少し警戒を強めた。

「ちよつと見てくる」

耀はそう言って扉の方へ向かいドアノブに手を掛けようとした瞬間、扉が独りでに開いた。

「ただいま」

ソコには擦り傷を作ってボロボロの格好をした剣士が立っていた。



オレが部屋に入ると春日部達が集まっていた。

……何、この状況？ オレ以外の皆が一つの部屋に集まっている

……まさか！

「オレが居ない間に皆で遊んでいた……!?」

「違う」

春日部に即刻否定されてしまった。なんだ、遊んでなかったのか。

「まったく何処に行ってたんですか?! 皆さん心配してたんですよ！」

黒ウサギがウサミミを逆立てて怒っている。本当は黒ウサギ達が置いて行ったことが原因なんだけどあえて黙っておこう。

「それで、結局何処に行ってたんだよ。話を聞く限りでは此処から”サウザンドアイズ” までには居なかつたらしいじゃないか」

逆廻がソファにもたれ掛りながら聞いてくる。うん、コイツは微塵も心配してないな。寧ろ心配してたら怖い。

「話せば長くなるが……聞くか？」

「良いから早く話しなさい」

何か相当機嫌悪いですね、久遠さん。

まあ？ 話せと言われたら話さないわけにはいかない訳だから、機嫌の悪い久遠を放置して話すことにした。

「迷子になってました（テヘツ）」

「知ってたから早く続き話して」

春日部さんも若干機嫌が悪いようだ。

「実は“サウザンドアイズ”を出る時に地図を貰ったんだけどそれがどうも地域の人向けのヤツらしくてさ、箱庭の右も左も解らないオレは此処と反対方向に進んでいたわけだ」

「ちよ、ちよつと待つて下さい！ 地図って誰から頂いたんですか？ 白夜又様は渡している風ではなかったんですが……」

話の途中で黒ウサギが割り込んできた。全く、早く話せば良いのかどっちなんだよ。

「店の前にいた店員さんだよ」

「………え？」

「マジかよ……」

場の空気が凍った。

「て、店員さんってあのウサギ達を門前払いしようとした方ですか？」

「うん。その店員」

四人があり得ないものを見る目になった。そんなに驚くことか？

「えつと、続けてもいいか？」

「え、ええ、お願いするわ」

何故久遠はこんなにも動揺しているのだ。

「そしてオレはずつと歩いていくうちに気付いたんだ。近くの人に聞けばいいとー」

「普通は最初に思いつくことだがな」

「正直自分も間抜けだと思ったよ……」

それに気付いたのは日が沈みかけた時とは言わない。

「それで日が沈み始めたので急ぐために自転車を作ったんだが……い
かんせん初めてだから上手く乗れなくて時間だけが過ぎていった
……」

「自転車を作った？ それはどういうことだ」

逆廻が目を細めて問いかける。そういや逆廻の前ではギフトを
使ってなかったな。

「そこのお嬢様の視線が怖いから詳細を省くが、自転車はオレのギフ
トで作った」

それだけ言うと逆廻は「ふーん」と言ってからオレから視線を外し
た。後で詳細を説明しないといけないパターンだな。

「話を戻すけど、何度やっても自転車に乗れないオレは絶望したよ。
オレは自転車には乗れないのかって……」

「今更だけど歩いて来た方が早かったんじゃないかしら」

「そんな時……アイツがオレの前に現れたんだよ」

「アイツって……」フォレス・ガロ”のメンバーですか!？」

ジン君が焦った様子で尋ねる。他の人達も神妙な面持ちで見守る
中、オレは静かに言葉を続けた。

「そう、アイツに………マイクに出会ったんだ！」

「………誰？」

ジン君、黒ウサギ、久遠がさっきまでの表情から一変して結構間抜
けな表情になった。

笑いが込み上げてきたが笑うとお嬢様に怒られることが目に見え
ているので何とか堪えて話を続ける。

「マイクは見知らぬオレに手を差し伸べてくれたんだ。自転車の後ろ
を支えて補助に徹してくれた……」

その時のことが鮮明に脳内に映し出される。

「夕闇に染まる街の中で何度失敗しても手を差し伸べてくれて、諦め
かけてきた時は殴ってオレに諦めることの惨めさを教えてくれた
……。そのかいあって日が沈みきった時に自転車に乗れるように
なったんだ」

その時のマイクの笑顔をきつとオレは忘れることはないだろう。

マイクとの思い出に浸っていると久遠がどうしようもないモノを見る目でこっちを見ているのに気付いた。

「……どうかしたか？」

「結局貴方はどうやって此処に辿り着いたのよ」

「マイクに道を聞いて自転車で廃墟街で少し迷子になりつつ辿り着きました」

「……………はあ」

何か久しぶりに久遠のため息を聞いた気がする。全然嬉しくないけどさ。

「この……………お馬鹿様!!」

「何でっ!？」

スパ——ンという音と共に頭に激痛がはしる。このハリセンの威力……………パワーが上がってやがる!

顔を上げると、怒りのためか髪の色が緋色に変わった黒ウサギがハリセンを片手に立っていた。

「あんなに皆さん心配したというのに何をしてたんですか貴方は!!」

「いや、だからマイクと——」

「黙らっしやい!!」

おお、黒ウサギさんが本気で怒っておられる……………。

「そっだよ” 剣士”」

黒ウサギに説教されていると春日部が背後から声を掛けてきた。

……………何故か名前呼びで。いや、良いんだけどさ。

一体どういう心境の変化なのか考えていると、オレの近くに来て真直ぐとオレの目を見ながら言葉を紡ぐ。

「本当に心配したんだから、ちゃんと反省してね」

「あ、はい」

優しく諭す様に語りかける春日部に何も言えず、口が勝手に了解していた。

それからは色々であった。久遠と黒ウサギに説教+駄目だしをされたり逆廻にオレのギフトのことを聞かれたり、春日部からは特に何

もなかったがリリちゃんと感動的な再会をした時にどこか不機嫌そうにしていたのは何故だろうか？

何はともあれ、箱庭に来てからの初めての夜が更けていった。

——明日のガルドとのギフトゲームのことを思い出したのは翌朝のことだった。

09話 例の外道と戦いました 前篇

暖かな朝日が射し込み瞼の裏の黒い世界を白に変える。

「うーん……」

その変化と共にオレは目を覚まし……その三秒後に寝た。

あ、何かいつもと違って寝床がふわふわしてて気持ちいい。これなら何時までだって寝続けられるな。

「おやすみ……」

そう小さく呟くとオレは再び意識をシャットアウトした。

「剣士、起きて」

しかしそれは聞き慣れない声と共に強制終了させられた。

布団という大事な睡眠の友を盗られ渋々起きたオレの前には、ショートカットの少女がオレの戦友（布団）と思わしき物を手に立っていた。

「……………誰だっけ？」

「どちら様？」

「怒って良いかな？」

何故貴女は手刀を構えているのですか？

「よし落ち着こう。安易に人は傷付けるべきではない」

もしかして知り合いかな？ ……うーん狐耳が生えた割烹着が似合う子しか思い出せない。

「えいっ」

「何故に!？」

時間切れになったのか脳天に少女がチョップする。超痛い。ただでど目が覚めたよ……。

「……………おはよう、春日部」

「おはよう、剣士」

満足そうに頷く春日部。まったく、名前を少し忘れただけで脳天チョップは勘弁してほしいよ。

「朝ごはんが出来てるから早く来た方がよいよ」

「あー了解了解……」

「じゃないと私が剣士の分も食べるから」

「三十秒で支度を済ませよう」

恐らく春日部は本気でオレの分の朝食も食べるだろう。しかも罪悪感さえも抱かずにむしゃむしゃと……それだけは絶対阻止せねば!!

割りとは本気で危機感を感じたオレは急いでベッドから飛び起きて近くにかけていたブレザーを羽織って部屋を出た。

「っ！ 準備が早かったね」

「二日の大事なエネルギーを奪われたらたまらんからな」

「……そう」

それだけ言い残すと春日部はその場から駆け出した………全力で。

「あ、ちよっ!？」

「いただきます」

走りながら確実にオレの朝食を奪う事にしたのか手を合わせてる!?

「させるか!」

少し遅れてオレも走り出す。春日部との距離は五メートル程度だ、絶対追い付いてやる！ 朝食のために!!

「オレは………無力だ……」

朝食の並べてあったであろう広間にオレは四つん這いになって自分の無力さを嘆いていた。

「ご馳走さま」

春日部が綺麗に平らげた皿を見ながら手を合わせている。

「………愁傷様」

久遠が哀れみの視線をオレに向ける。やめろよ、泣いちやうだろ？ 結果から言えば、オレの朝食は春日部の胃の中に納まることとなった。

何故そんな事になってしまったの。オレが春日部に追い付けなかったからではない、寧ろ数秒もかからず春日部に追い越すことがで

きた。

だがオレはそれが春日部の罾だということに気が付かなかった。そもそもオレはこの本拠の間取りを知らない。だから何処に向かえばいいのか解らずただ直進していた。

暫くして春日部が来ないことを疑問に思ったオレが振り向くと、そこには春日部の姿はなく誰もいない空間が広がっていた。そこでオレは遅ればせながら春日部に嵌められたことに気が付くのだった。

そのあとは急いで引き返してひと部屋ひと部屋確認して回り、やつと辿り着いた時には丁度春日部が最後の一口を食べる瞬間で今に至るわけだ。

あの時の悲しみと絶望感はランキング上位に入るくらい凄かった……。

「剣士」

悲しむオレの側に春日部が座り込み、優しい口調で声を掛けてきたので顔を上げる。流石に悪かったと思っただのか？

「美味しかったよ」

「——っ！——っ!!」

悲しみは、声にはならなかった。

「か、春日部さん？ 流石にやりすぎじゃ……」

久遠が流石にやり過ぎと判断したのか理由を問いかける。それに春日部はその場から少し頬を膨らませて拗ねたような顔をした。

「だって剣士が……」

「剣士君が？」

「どちら様？ って……」

「……………はあ」

手のひら返して久遠がオレに非難の視線を向ける。そこでオレは気付いた、この場に味方が居なくなっただけのこと。

「寝起きだったから仕方ないだろ!？」

精一杯弁解をするが久遠からは非難なので、春日部からは怒った目で睨まれたままでオレが罪人であるような雰囲気は消せない。

一応言っておくがオレはどちらかというと被害者だ！

「あの〜……」

弁解を続けていると背後からいい臭いと共に可愛らしい声が聞こえてきた。

振り向くとそこには料理を乗せたお盆を持ったリリちゃんが立っていた。

「リリちゃんどうしたの？　もしかして止めをさしにきた？」

もしそうならばオレはこの先誰も信用できなくなりそうだ。

「ち、違いますよー！」

二本の尻尾をパタパタと振って慌てて否定するリリちゃん。何だろう、心の傷が癒されていく……。

「え、えっと、剣士様はさつき耀様に朝食を盗られたようでしたので少ないですが代わりををご用意しました」

そう言ってリリちゃんは手に持っていたお盆をテーブルに置く。よろよろと近づいて見るとそこには小さいながらも綺麗な形をしたおにぎりと沢庵、美味しそうな湯気を発している味噌汁が置かれていた。

「リリちゃん……」

「ご、ごめんなさい！　やっぱり少ないで——」

「ありがとうっ!!」

「ひゃわっ!?!」

天使が……天使がここにいる！

「あ、ああああああああの、剣士様!?!」

「ちよ、ちよつと貴方は何してるのよ!?!」

久遠とマイエンジェルリリちゃんが何故か凄く動揺してる。

「何って、お礼を言ってるだけだが?」

「抱き締めたままだがな」

「え?」

ホントだいつの間にかマイエンジェルを抱き締めてたよ。

「あー、ごめんねリリちゃん。凄く嬉しくって……」

「い、いえ！　大丈夫です!」

何が大丈夫なのか凄く気になる。それと顔を真っ赤にして両手と

二本の尻尾をブンブン振る姿が凄く可愛い。

「えっと、それじゃあこれは食べていいのかな？」

「あ、はい。少ないかもしれませんがどうぞ！」

「ありがとうございます。それじゃあ、いただきます」

まずはおにぎりを……うん、絶妙な塩加減で美味しいな。

「……………はっ！ 意識が飛んでた」

「頭が痛いわ…………」

味噌汁は…………おお、出汁がきいてて美味しい！

「本当にありがとうリリちゃん。これで一日頑張れるよ」

「いえ、私こそ剣士様のお役に立てたのなら嬉しいですよ」

上機嫌な笑みを浮かべるリリちゃん。ああ、守りたい、この笑顔。

「この調子で今日のギフトゲームも頑張ってください」

「……………ああ」

スツカリワスレテタ。

「今日のギフトゲーム、心配になってきたわ…………」

久遠が頭を押さえている。体調不良なら部屋で休んでた方がいい

ぞ。

「ま、大丈夫だろ」

そう言っただけはおにぎりの最後の一口を口にほうりこんだ。

□ ■ □ ■ □

「帰っても良いですか？」

” フォレス・ガロ ” の本拠に着いた開口一番のオレの台詞。

「ダメよ」

予想どおり久遠に切り捨てられたよ。あーあ、帰りたい。帰ってリリちゃん達と遊びたい。

「何だよ、緊張でもしてんのか？」

逆廻がからかうように笑う。いや、緊張はしてないんだけどさ…………。

視線を逆廻から目の前の本拠に向ける。そこは” ノーネーム ” の

廃墟街とは別の意味で人が住んでるのか疑いたくなる位木々が生い茂っていた。

「……………。ジャングル？」

「虎の住むコミュニティだしな。おかしくはないだろ」

「いや、虎以外のやつも居るだろ」

多分だけど。

「剣士さんの言う通りです。」フォレス・ガロ”のコミュニティ本拠は普通の居住区だったはず……………それにこの木々はまさか」

ジン君が木々に手を伸ばして何かを確認する。……………ちなみに”解析眼”で軽く調べたらこの木は普通の木じゃなかった。

まるで生き物かのように脈を打ち、よくは解らないが胎動のようなものも見てとれた。本当今までの常識とか関係ないな、箱庭つてこころは。

「やっぱり————”鬼化”してる？ いや、まさか」

「ジン君。ここに”契約書類”が貼ってあるわよ」

久遠の目線の先には確かに羊皮紙が門柱に貼られていて今回のギフトゲームの内容が記されていた。

『ギフトゲーム名：”ハンティング”』

・プレイヤー一覧：天野 剣士

春日部 耀

久遠 飛鳥

ジン＆ラッセル

・クリア条件：ホストの本拠内に潜むガルド＆ガスパーの討伐。
・クリア方法：ホスト側が指定した特定の武器でのみ討伐可能。指定武器以外は”契約”によってガルド＆ガスパーを傷つける事は不可能。

・敗北条件：降参か、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなつた場合。

・指定武器：ゲームテリトリーにて配置。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、”ノーネーム”はギフトゲームに参加します。

”フオレス・ガロ”印』

……………あのバカ野郎っ！

「ガルドの身をクリア条件に……………指定武器で打倒!」

「こ、これはまずいですー!」

ジン君と黒ウサギが悲鳴にも似た声を上げる。

……………この時「何故?」と聞けなかったのはオレがそれ以上にこのゲームの危険性、いや、このゲームの異常性を理解できたからだろうか。

「このゲームはそんなに危険なの?」

「いえ、ゲームそのものは単純です。問題なのはこのルールです。このルールでは飛鳥さんのギフトで彼を操る事も、耀さんと剣士さんのギフトで傷つける事も出来ない事になります……………」

そこなのか? このギフトゲームで問題なのは本当にそこなのか?
?

「……………どういうこと?」

「”恩恵”ではなく”契約”によってその身を守っているのです。これでは神格でも手が出せません! 彼は自分の命をクリア条件に組み込む事で、御三人の力を克服したのです!」

違うだろ。問題なのはオレ達の力を克服したことじゃないだろ。

「すいません、僕の落ち度でした。初めに”契約書類”を作った時にルールもその場で決めておけばよかったのに……………」

確かに今回はそれをしなかったからこんなルールができてしまった。だけどジン君、君が謝るべきなのはオレ達じゃないだろ…………!

「敵は命がけで五分に持ち込んだってことか。観客にしてみれば面白くていいけどな」

……………面白くていい”、だと?」

「…………面白くないね、こんなの」

「剣士、どうしたの?」

オレの呟きが聞こえていたのか春日部が怪訝な顔をして声を掛けてくる。流石春日部だな、五感が鋭いなおい。

「別に、なんでもないよ」

「本当に？」

「体調が優れないのなら休んでもいいのよ？　寧ろ色んな意味で心配だからそうして頂戴」

最後の一言がなかったら久遠に感動してたところなんだけどな。

でも、こんなところで悩んでも仕方ないな。何とかガルドと話を付けてみよう。そして”誰も死なずにすむ”ゲームをやり直せばいい。

「ああ、本当に何ともない。寧ろ何ともないから今すぐ帰りたい」

「そう、ならゲームを始めましょう」

いや、無視ですか。オレの帰りたい発言は華麗にスルーですか。

「……………」

「どうされましたか？　十六夜さん」

「いや、何でもない。ちよつと気になることがあっただけだ」

こつちを見ながら言っても説得力皆無ですよー、逆廻さーん。

「それはそうと、さっさと終わらせてくれよお嬢様」

「気軽に言ってくれるわね……条件はかなり厳しいわよ。指定武器が何かも書かれていないし、このまま戦えば厳しいかもしれない」

「厳しい表情で”契約書類”を覗き込む久遠」

なあ、久遠。お前のその眼差しはガルドIIガスパーを殺すことに対しての後悔なのか？　それともこのゲームを挑んだことに対しての責任なのか？

「だ、大丈夫ですよ！　”契約書類”には『指定』武器としっかり書いてあります！　つまり最低でも何らかのヒントがなければなりません。もしヒントが提示されなければ、ルール違反で”フォレス・ガロ”の敗北は決定！この黒ウサギがいる限り、反則はさせませんとも！」

「大丈夫。黒ウサギもこう言ってるし、私も頑張る」

「…………ええ、そうね。むしろあの外道のプライドを粉碎するためには、コレぐらいのハンデが必要かもしれないわ」

手を握って励ましあう女子三人。おーおー、三人とも仲がよろしいことで。その近くでは逆廻とジン君が何か話してるし……。あれ？

もしかしてオレ今一人ぼっち？

——こうしてこのゲームはそれぞれ思惑を持って始まった。



オレ達四人が門を潜ると閉まった門に木々が絡みつき退路を塞いだ。あーあ、これでこのゲームをどうにかするまで出られなくなつた。

「それにしても薄気味悪いところだな、ここは」

光さえも遮断してしまう程の密度で葉が生い茂ってるし、道はこの木の根っこでもはや原型とどめてないし……正直本当に気味が悪い。

「それには剣士君に同意だわ。こんな薄気味悪いところ初めてよ」

「それに光さえも遮断してるので何処からガルドが襲ってくるかわからない分、余計に恐ろしいです……」

若干緊張気味の久遠とジン君。そんな二人にさつきから鼻をクンクンとしていた春日部が助言する。

「大丈夫。近くには誰もいない。匂いで分かる」

「あら、犬にもお友達が？」

「うん。二十四ぐらい」

何故その数の人間の友達がないのか、甚だ疑問である。

「詳しい位置は分かりますか？」

「それは分からない。でも風下にいるのに匂いが無いのだから、何処かの家に潜んでる可能性は高いと思う」

民家か……この状況じゃ探しにくいよな。

「ではまず外から探しましょう」

久遠の提案に頷く二人。確かに戦力を分断せず、危険を最小限に抑えるのはいい作戦だ。

だけど相手はあのガルドだ。どんな汚い手を使ってくるか分からない以上一か所に固まって一網打尽……になるかは別として一気に襲われる可能性があるというのも捨てきれない。

「隊長、提案があるのですが」

「却下よ」

「実は——つて、まだ何も言っていないじゃん」

「ごめんなさい。でも貴方の提案はいまいち不安だわ」

「理由を聞こうか」

「貴方の今までの行動が答えだと思うけれど」

否定……できない……っ！

久遠に論破されて悔しがつっていると、久遠はやれやれといった様子で肩を竦めた。

「わかったわよ。それで？　どんな素敵な提案をしてくれるのかしら」

「より迅速に敵を捕捉するために二手に分かれることを提案します！」

オレの提案に久遠は手を口元に添え、しばし考え込んだ後に「そうですね」と言っつて顔を上げた。

「剣士君の言うことも一理あると思うわ。そうなると組み分けは……」

「私と剣士は別々の方がいいよね」

「そうですね。耀さんと剣士さんが主戦力ですから二人が一緒だと僕たちが危険になると思います」

そうそう、主戦力のオレと春日部を別々に——つて、え？

「いやいやいやいや、ちょっと待つてくれよ」

「あら、何か不満でもあるのかしら？」

いや、不満も何もそれ以前の問題なんだが……。

「何でオレが主戦力としてカウントされてるんだよ」

「白夜叉の所で自分は強い宣言してたじゃない」

「確かにしたけど……。オレ基本スペックは普通の人間と同じだぞ？」

「嘘」

否定が早いですね、春日部さん！

だけど実際オレは逆廻や春日部とかと違って身体能力はずば抜けて高いわけでもなく、ヤっさんの時もほとんど反射神経をフルに使っ

て戦っていたようなものだ。だからギフトが通じないとなってる今は主戦力どころか足手まといだ。

しかし、この二人の目がオレの言葉を全然信じてない事を明確に語ってるしなあ……どうすればいいんだよ。

「あの……」

上手い説得の仕方を考えているとジン君が遠慮がちに声を掛けてきた。何？ オレを助けてくれるの？

「剣士さんの言うことが本当ならば飛鳥さんと剣士さん、僕と耀さんに分けたらどうでしょうか？」

考えられる中で一番最悪なカードを提示してきた……だと。

いや、確かにその分け方は戦力的に最善かもしれないよ？ 実際この中で一番強いのは春日部だし、ガルドに使えなくても足止めとかならオレはできるし理に適ってる。

だけどな、ジン君。オレが久遠と組むともれなく説教がついてくるんだよ？ そんなのオレが逃げ出さないわけ無いじゃないか！

「そうね、戦力的には妥当な分け方ね。いざとなったらジン君は春日部さんが連れて逃げればいいし……」

へい、ミス久遠、君はそれでいいのかい？ 幸せ逃げ出しコースで満足なのか？

「うん。私もそれでいいと思う」

春日部、お前もか。お前もオレに久遠の説教をくらえと言うのか！
くつ、やはりここは本人が言うしかないようだな！

「オレは反対だ」

「……何故かしら？」

おお、久遠の目が凄く怖い。だけどオレは負けない、オレの心の安寧のために！

「だって久遠怖いもん」

「剣士君、ちよつとそこになおりなさい」

「すいませんでした」

やはりオレは久遠には逆らえない運命なのか……っ！

こうしてオレ達は二手に分かれて搜索することになった。ペア？

もちろん久遠様とだよ。

「……」

「いや、それにしても家があんなになってるだなんて恐ろしいなあ」

「……」

「ガルドって実は強いのかもかもしれないな。気を引き締めていこうぜ」

「……」

「あ、あのく久遠さん？」

「……」

「………気まずい！」

さつきから久遠が何も喋ってくれないよ！ オレのせいだってことは分かってるんだけど正直息苦しい！

あーあ、こんなことになるなら言わなきゃよかったよ。久遠さん、マジすいませんでした。なので何か喋ってください。

「………はあ。そんなに気にするんだったら最初から言わなければいいのよ」

「久遠！」

やっと久遠が話しかけてくれた！

「まったく。そもそも貴方がおかしなことをしなければ私だって怒らないわよ」

「あ、はい。おっしやる通りでございます」

話しかけてくれたかと思えば説教だったか……。まあいいや、これでさつきのことが水に流せるのなら甘んじて受け入れよう。

「それにしてもここは広いわね。探すのも一苦労だわ」

「え？ ああ、うん。そうだな」

まさかもう説教が終わるは思ってたから変な声が出てしまったよ。

腰に手を当ててため息を吐く久遠は口では疲れたと言っているがその目は何が起こるか分からないこのゲームを楽しんでいるように見えた。

「なあ、久遠」

だからオレは聞きたくなかった、

「このゲームは久遠にとって楽しいか？」

このゲームの異常性をこのお嬢様が理解しているのかを……。

「ええ、楽しいわ。こんなの元の世界じゃできないもの」

「……そうか」

そうだよな、オレ達がやってるのはあくまで「ギフトゲーム」という競技みたいなものなんだ。楽しまなくちゃ意味がないんだよな。

………たとえそれが誰かの命を奪うゲームだとしても。

「ところで剣士君、貴方は何処にガルドがいるか心当たりないかしら？」

ウキウキしているのが伝わってくる。本当に純粹にこのゲームを楽しんでいるんだな、久遠。

「さあ？ あそこの屋敷の中にでもいるんじゃない？」

止めるのは酷かもしれない。楽しんでるならそれでいいじゃないか。心の中でガルドを殺すことを容認する声が聞こえる。

「屋敷……そうね、行ってみましょう」

「へいへい」

どうしたらいいのか考えがまとまらないままオレは久遠に連れられて屋敷へと歩いて行った。

10話 例の外道と戦いました 後編

世の中どうしようもない事ってあるよね。

例えば時が過ぎていくのは止めようがないし、蛙に世界が狂ってるなんて言っても蛙は世界を変えられない。

なのに人間はそれに抗おうとする。どうしようもない事に立ち向かって変えてみせようとする。それがオレには理解できなかった。

だけど——オレだって抗いたい時もある。

「あ、春日部とジン君だ」

「剣士と飛鳥……どうして此処に？」

屋敷の前に行くところとちょうど逆方向から二人が来ているところだった。

……ジン君が少し疲れた顔をしているのは気のせいだろうか？

「どうして……此処だけ調べてなかったからな。ガルドがいるかと思って」

「いるよ、影が見えただけだけど目で確認できた」

「やいで」

やっぱり春日部のギフトは便利だな。動物にすら友達いなかったオレにはあっても意味がないけど……。

「鷹のお友達もいるのね。けど春日部さんが突然異世界に呼び出されて、友達はみんな悲しんでるんじゃない？」

「そ、それを言われると……少し辛い」

しかし春日部と久遠の雑談はさほど興味無いがジン君が疲れてるのが気になるな……おおかた春日部の問題見つぷりに振り回されたとかだと思いがな。ご愁傷様、ジン君。

「その坊やや、何をそんなに疲れておるのだ？」

「……剣士さんのせいですよ」

「何故!？」

それはどんな責任転嫁ですか。

「剣士さんが久遠さんと喧嘩してたので耀さん、ずっと御二人が喧嘩していないか心配してたんですよ……全部僕に聞いてくるんです

が」

「ご迷惑おかけしました」

確かにそれはオレのせいだな。

「だけどジン君、オレと久遠じゃ喧嘩なんて起きないから大丈夫だぜ」
「? どうしてですか?」

頭にクエスチョンマークを浮かべて首を傾げるジン君。まあ、ジン君は良い子だから喧嘩なんて経験ないかもしれないけど喧嘩にはある条件が必要なんだぜ?

疑問顔のジン君にオレは自慢気に言っただけだ。

「喧嘩っていうのは対等の相手との間で起こるもんなんだぜ!」

「……………あ、はい」

何故か哀れみの視線を向けられてしまった。いや、確かに久遠とは喧嘩というより一方的に何か言われるだけなんだけどさ…………。

「ジン君、剣士君、そろそろ行きましょう」

「はい」

「ういーっす」

久遠を先頭に春日部、ジン君、オレの順番で屋敷に入っていく。

「うっわ、これは凄いな…………」

屋敷の中までも植物が入り込んでおり、扉はおろか窓や外装や装飾品までもがツタに呑み込まれていた。

「ガルドは二階に居た。一階は大丈夫」

春日部の言葉に少し警戒心が緩む。しかしここで完全に気を抜いてはいけない、もし抜いたら久遠に怒られる!

「それにしてもこの奇妙な森の舞台は…………本当に彼が作ったものなの?」

「…………分かりません。”主催者”側の人間はガルドだけに縛られています、舞台を作るのは代理を頼めますから」

「代理を頼むにしても、罠の一つも無かったわよ?」

「きつと心優しい業者さんがやってくれたんだろ。わあ、なんて良い人たちなんだー(棒読み)」

「黙りなさい」

ひと睨み。いやー久遠には本当に敵わないな。足が震えてきたよ。これが武者震いってやつかな？

「森は虎のテリトリー。有利な舞台を用意したのは奇襲のため……でもなかった。それが理由なら本拠に隠れる意味がない。ううん、そもそも本拠を破壊する必要なんてない」

……春日部の言ったことが一番の疑問だよな。あの自分大好きっぽいガルドがこんな馬鹿でかい屋敷を建てたのは自己顕示のはず。それならこんな無残な姿にする意味がない。これじゃまるで理性が欠けているとしか思えない……。

「もしそうならヤバイな……」

オレのゲームの目的はガルドと話し合って安全なゲームに切り替えることだ。だけど正しい判断ができない状態ならばそれができなくなり、結果的にこのゲームを勝つか負けるかしなければならなくなる。久遠と春日部は間違いなくクリアするだろうからガルドが死ぬことに……。

「剣士」

思考の海に沈みかかっていると春日部が声を掛けてきた。

「どうしたの？」

「いや、ちよつと考え事をして……」

「そんな嘘は良いから、早く武器を探しに行こう」

嘘だと言いますか。そんなにオレは考えごとをしないようなバカに見えますか。

「はいはい、今行きますよ……」

春日部のせいで若干下がったテンションのまま春日部達の後を追って散策を始めた。

「無いな。それはもう見事に」

一階にはそれらしき物は見当たらなかった。ヒントもなかったし。あーあ働き損だよ、瓦礫とかほとんどオレが掘り返して探したのにさ。

「そうなる二階に上がることになるわね……。ジン君、貴方は此処で待ってなさい」

久遠の言葉にジン君は驚いた顔をする。まあ遠回しに戦力外通告されたらそんな顔になるわな。

「ど、どうしてですか？ 僕だってギフトを持っています。足手まといには」

「そうじゃないわ。上で何が起こるか分からないからよ。だから二手に分かれて、私達はゲームクリアのヒントを探してくる。貴方はこの退路を守って欲しいの」

うん、実に理に適った回答だね。だけどそれならジン君の他にもう一人残していくべきなんじゃないかな？

「飛鳥、それならもう一人残ってた方が良いんじゃないかな？ その方がジン君も安全だし」

考えたことを殆どそのまま春日部に言われた。箱庭つてやつぱり他の人の思考が読めるのが当たり前なのか？ オレは読めないのに……。

「そうね……。剣士君」

「ん？」

「ジャンケン、ポン」

「え？ は？」

パー（久遠） グー（オレ）

「それじゃ居残りよろしくね♪」

汚い！ お嬢様なのにやってることが汚いぞ！

オレの心の叫びは久遠には届かず、春日部と久遠は二階へを姿を消した。

「……………はあ」

久遠ではないがため息が漏れてしまう。あのお嬢様め、いつか仕返ししてやる…………っ！

「まったく、あのお嬢様は本当に恐ろしいよ」

「あはは…………」

愚痴をこぼすと隣でジン君が苦笑している。そういえばジン君に聞きたいことがあったや。

「ねえジン君。君はこの木のことを知ってるんじゃないの？」

「っ!？」

ビクツと体が飛び跳ねるジン君。やっぱり、予想どうりだ。

「この屋敷に入る前からジン君はこの木のこと……:というよりもこの木に起きてる現象について少なからず心当たりがある。そうだよね?」

オレの言葉に黙って俯いてしまうジン君。だけどその行為は肯定と取るには十分だった。

「よかつたら話してくれないか? ジン君が知ってることを」

「それは……」

若干ためらいながらもジン君が話そうとする。

「……………G E E E E Y A A A A A a a a a a !!!」

しかしそれは凶暴な叫び声によってかき消された。

「春日部!・ 久遠!」

叫んでジン君を置いてその場から駆け出す。

もしあれがガルドのものだったらオレが思う中で最悪のパターンになる。そうあつて欲しくないという思いと、二人が無事であつて欲しいという思いを抱きながら今も聞こえる凶暴な叫び声の方へと急ぐ。

「G E E E Y A A A A a a a a a !!!」

「ははっ……嘘だろ……?」

目の前に広がる光景について足を止めてしまう。

そこには紅い瞳を光らせる虎の怪物が叫びながら春日部と対峙していた。

「鬼、しかも吸血種!・ やっぱり彼女が」

遅れて様子を見に来たジン君が驚愕の表情を浮かべる。問わなくともジン君の表情を見れば目の前に居るのが何なのか分かる。

目の前にいる怪物はかつてガルドIIガスパーだったものだ。

「つべこべ言わずに逃げるわよ!」

久遠がジン君の襟を掴んで階段から飛び降りる。しかしガルドは目ざとく二人を見つけると後を追うように部屋から飛び出そうとする。

「させるかよ！」

背後に天井まで届く壁を作り出しガルドの行く手を阻む。

「GEEYAAAa a a!？」

その壁に勢いよくぶつかったガルドは叫びながらその場に転がりこむ。

しかし、その行動は最悪のシナリオの幕開けでもあった。

「ヤバイな……」

ガルドから理性を感じない。言語からもそうだが、戦闘能力が高そうに見えたガルドがほんの一秒前に出現した壁にぶつかるはずがない。なのにぶつかった。しかも勢いを殺す動作も前足を壁につくなどの動作の欠片も見せずに。

「理性の欠片もない……」

本能に赴くまま行動している。つまり話し合いが通じないということだ。

「剣士ー！」

白銀の十字剣を持った春日部が駆け寄る。恐らく今春日部が持っているのが”契約書類”に書かれていた指定武器なのだろう。

「剣士、私が倒すから安全なところに逃げて」

「はっ！」

すでに剣先をガルドに向けている春日部。その背中には手助け不要と書かれているようにも見えた。

………どういつもこいつも本当にふぎけるなよ。終いにはキレてリリちゃん尻尾をもふもふするぞ。

「春日部、オレはサポートに回る」

「いらぬ。剣士は早くにげ——」

「い・や・だー！」

「……へ？」

この緊迫した場面で随分と間の抜けた返事だな、春日部。

「あのな、春日部。コイツを一人で倒せると思ったら大間違いだぞ」

「え？　へ？」

未だに困惑している春日部を気にせず言葉を続ける。

「確かに春日部は強いかもしれない。ガルドなんか相手にならないくらいにな。だが、それは相手がまともだった場合だけだ」

「……………どういうこと？」

自分の力を否定されたからか不機嫌そうにオレを睨みつける。

「理性さえあれば相手は自分より格上の相手には恐怖する、ガルドみたいな奴は恐怖で力が出せないのが相手の強さと勘違いするような奴だっただろうな」

あの世界でオレを殺そうとした奴等もそうだった。圧倒的な力の前にそいつ等はただ恐怖し、逃げ出すことしかできなかった。

……………嫌なことを思い出したな。

思い出すだけで吐き気すら覚える記憶を頭から振り払い言葉を紡ぐ。

「だが理性のなくなつたまともじゃない奴等は違う。いくら傷つこうとも死にかけようとも向かってくる。本能でしか行動できないからいくら相手が強くても関係ない、それこそ本能的に危険を感じるまで何度も何度もだ」

脳裏に浮かぶのはオレに恐怖し、正気をうしなつた奴等の奇声にも似た声で笑う地獄絵図。

春日部も何か頭に思い浮かんだのか若干顔を青ざめさせて震えている。

「今のガルドは今春日部が想像しているような状態だ。……………そんな奴に春日部は一人で勝てるのか？」

「っ！」

ビクンと軽く跳ねる。そしてオレに向けていた視線をガルドに向ける。

今の春日部にガルドがどう映っているのかはオレには分からない。多くの人質を殺してきた外道に見えるのか、それとも理性を失つた獣に見えるのか…………。

だがオレ的には後者であつた方が都合が良い。もし、ここで春日部がガルドを危険と判断し一度後退することを選べばその分ガルドを助ける算段を立てることができる。

「私は……………戦う」

しかし春日部が口にした言葉はオレの望んでいないものだった。まあ、それがコイツ等らしいよな。

「そうか……………」

ならオレはガルドを殺さず、春日部を殺させず上手く立ち回らなければな。

「G、GEEYAAAaaaaa!!」

ガルドが巨体を起こしてこちらを紅い瞳で睨みながら吠える。

「剣士はさがつ——」

「らないよ。オレはこの手の届く範囲全てを守るつもりだからね」

「……………なら邪魔にならないようにしてて」

剣を構えてガルドに突撃する春日部。まったく、人を頼るのが下手だなあ。

オレは身の丈ほどの頑丈な鉄の棒を作り、春日部に続く。

「ふっ—」

春日部が剣を横に薙いでガルドを牽制する。それは後ろに跳んでかわされたがオレは体勢を整えられる前に懐へ入り込み思いつき顎を殴りつける。

「GE……………YAAAaa……………」

軽い脳震盪を起こしたガルドは僅かにふらふらとするがそこは流石と言うべきかすぐに持ち直す。

「剣士—」

「了解!」

今度は顎ではなく左目を叩き一時的に視界を奪う。その隙に春日部が左からガルドの後ろに回り込み左後足を切りつける。

「GEEYAAAaaaaaa!?!」

切り付けられた瞬間ガルドはさつきとは別種の叫び声をあげて暴れだす。

「くっ……………!」

めちやくちやに前足、尻尾、体を暴れさせるガルドの攻撃をギリギリのところかわす。どうしたんだよ、一体……………!

前足が床を壊し、尻尾が装飾品を薙倒し、巨体がオレ達の接近を拒むように暴れる。しかしその行動にオレ達を殺そうという攻撃が無く、ただ暴れているという印象がある。

「春日部、一旦後退を——」

「嫌だ」

オレの言葉に被せるように短く言い放つと再びガルドに向かって突撃する。

右へ左へと流石と言えるような身のこなしであの無茶苦茶な攻撃を掻い潜る春日部。時折剣で受け止めようとするがガルドが触れる前に軌道を変えて床を砕く。

「っ!？」

「春日部!」

そんな攻防が続き後一步でガルドの懐に入り込めそうになったのだがガルドが砕いた床に引っかかり春日部がバランスを崩す。

「! GEEYAAAAaaaaa!!」

それを好機と見たのか、ガルドはその鋭い爪をもった前足を振り上げた。

「っの野郎!」

春日部を守るためにガルドとの間に壁を作る。

「かはっ……!」

しかしガルドの攻撃は壁を壊すだけでは勢いが死なず、そのまま春日部を壁まで吹き飛ばした。

「春日部!？」

「がっ……はっ……!」

壁にぶつかつたためか春日部は息もまともにできずに倒れこむ。

「GEEYAAAAa!」

ガルドがそんなことお構いなしに春日部にもう一撃入れるために再び前足を振り上げる。

「させるかよ!」

振り上げた足を鎖を作つて天井に繋ぐ。しかし今のガルドにとっては気休めにしかならないだろう。

オレは春日部を急いで抱き上げその場から全力で駆け出す。そしてその一秒ごとにバキツという鈍い音と共にガルドの爪がさつきまで春日部が倒れてた場所に突き刺さる。

「あ、危なかった……」

正直基本スペックが凡人のオレがあの一瞬で助かるとは思わなかった……。

「はっ、くっ……!」

「おい、無理すんな」

未だにうまく息継ぎができていない春日部がオレの肩を支えにして立ち上がろうとする。しかしすぐに咽て膝から崩れ落ちる。

ヤバイ。もしかしたら気管がいかれたか？ それとも肋骨が肺に刺さったのか？

苦しそうな春日部を見てそんなことが頭の中を支配する。

「剣士……離し、て。邪魔、だから」

そんな状態でもまだ春日部の闘志は消えておらず、弱々しい力でオレを突き放そうとする。が、もちろんその位の力で突き放されるオレではない。

「ったく、何意地になってんだ——よっ!」

「っ!」

オレは強引に春日部をお姫様抱っこをして向かいの壁に向かって走り出す。

「け、剣士降ろして。私はまだ戦えるから!」

春日部がオレの腕の中で暴れだす。いい感じの裏拳が何発かオレの胸を強打するが堪えて走る。まあ、ここまで元気になったからそんなに心配する必要はなさそうだな。

「G E E Y A A a a a!!」

後ろからガルドが追いかけてくるのが振り向かずとも音でわかる。……ホント、こんな怪物にどう話をつければいいんだよ。

「春日部、暫く黙ってるよ。じゃないと舌噛むぞ」

「えっ? ほっ!」

疑問顔でこつちを見る春日部を無視してもうほぼ目の前に迫って

いる壁に”創造者”を使い壁の中に縦横三本ずつ巨大な紙を横にした状態で作り出し壁に亀裂を作る。

「G E E Y A A A a a a a!!」

「っ！ 剣士、後ろ！」

春日部が叫ぶ。それを合図にオレは体の向きを百八十度回転させる。

「溢れる」

眼前に迫るガルド。それから離れるように後ろに全力で跳ぶ。

「パッション！」

背中が壁に激突する。が少しの衝撃が体にくるがそれはすぐに浮遊感へと変わる。

何故か、それはさつき亀裂を入れておいた場所に突っ込んだからだ。

だが、オレは此処で大切なことを忘れていた。

「ふぐっ!?!」

着地したオレの両足にかなりの負荷が襲う。

オレが忘れていたこと、それは此処が二階だということだ。

「け、剣士。大丈夫？」

オレの腕の中で春日部が心配してくるが、その目は明らかに哀れなものを見るそれだ。本人は心配しているつもりなんだろうけど表情が（というより目だが）噛み合っていないぞ。

「ちよ、ちよつとどうしたの!?!」

「御二人とも無事ですか!?!」

「久遠……ジン君……」

何故ここに？ とは聞かない。というよりいきなり屋敷の壁がぶっ壊れれば何事かと思うわな。普通。

久遠が屋敷の壁を気にしているうちに気付かれたら何言われるのかわからないので春日部を降ろす。本人は複雑そうな顔をしていたが気にしない。

「この壁……ガルドがやったの？」

久遠は凄く真剣な顔をしてオレ達に問いかける。それにオレは首

を横に振って否定する。それを見た久遠は「そう……」と言って残念そうな顔をする。

……恐らく久遠はガルドが強くなっていることを望んでいるのだろう。このゲーム中久遠を見るたびに思う、純粹さは時に残酷だということを……。

春日部もそうなのかはわからないがしきりに一人で戦いたがっていたところを見ると協力プレイが嫌いというわけではなく、強敵を自分で倒したいという気持ちがあつたのだろう。

だがその結果がこれだ。春日部は一瞬だったがガルドに殺されかけた。春日部より弱い久遠はなお危険だ。それにもこの二人がガルドに勝つ方法を持っているとしてもそれはガルドを殺すことになる。

………オレはどうすればいいんだ。

二人はこのゲームをクリアしたがつている。しかしそれは二人を危険にさらすことになるし、ガルドが死ぬことにもなる。

なら最初考えたように話し合うか？ いや、あの理性を失った怪物と会話が成り立つとは到底思えない。

まさに八方塞だな……。どっちなかしか助けることができない。両方という選択肢が存在しない。

「ふう……」

誰かを殺すということはたとえそれが正義という名の下にあったとしても罪悪感が生まれるものだ。だから日本では死刑する際にその負担を軽減させるために三人で殺す。

しかしこの二人はそんなこと気にせず一人でもガルドを倒すだろう。そうなれば罪悪感をいつ感じるかはわからないが、気付いた時には一人で背負うことになる。そんなのコイツ等に背負わせるわけにはいかない。

なら——オレがガルドを殺す。

「三人ともちよつとそこに集まってくれない？」

「……どうしてかしらっ？」

久遠が半眼で睨む。怖くないと言えば嘘になるが、それでもいつも

のヘラヘラとした笑いを崩さないようにする。

「そんなに警戒しなくても大丈夫だって」

「貴方じゃなかったら警戒なんてしないわよ」

信用度ゼロということですか。

「飛鳥、とりあえず集まってみよう。もしかしたら何か理由があるかもしれないし」

「……はあ。わかったわよ」

春日部の説得に渋々といった様子で三人が一か所に固まる。

「それで、これにどんな意味があるんですか？」

ジン君の問い掛けにオレはさらにへらつと笑い、右手をかざす。

「ごめんな」

「え？ けん——」

春日部の言葉は三人を囲むように出現した壁によって阻まれた。

「ちよ、剣士君!」

久遠が壁の中で叫ぶ。いきなりのごとで驚くだろうけど今は我慢してくれ。

「それじゃ、ゲーム終了まで待っててね」

「な!! 剣士君どういうつもりよ」

久遠の姿は見えない。だけどきつと凄く怖い顔をしてオレを睨みながら壁を叩いているだろう。

「剣士、指定武器はこっちにあるんだよ。どうやって勝つつもり？」

春日部の冷静な——だけれども少し怒気を帯びた——声が聞こえる。

確かにこのゲームのクリア条件は指定武器での打倒で、その武器は今春日部の手の内にある。本当ならばクリアするなど不可能だ。だけれど——

「そんなの作ってみせるよ」

そうやってオレは春日部達に背を向けて屋敷へと歩く。その時後ろから何か言われていたが上手く聞き取れなかった。



二階へと続く階段の一番上、そこにはオレが作った壁がまだ破壊されずに残っていた。

この屋敷の外壁の一部をそのまま使ったようなものなので、この壁だけ周囲の雰囲気から少し浮いている。

「この壁の向こうにはガルドがいるんだよな……」

一応覚悟はして来たつもりだったつもりだったがけど、やっぱりまだ躊躇いが残るな。

相手がいくら外道だとしても生きている命を殺めるという行為は躊躇ってしまう。『あの日』の光景がフラッシュバックするからつてもあるけど、純粹に殺したくないからだ。

それに相手は少なからず言葉を交わした奴だ。今は人型ではなくなってしまったとしても言葉を交わしたという事実がオレのなかで枷になっている。

「でも何とかしないとあの三人が危ないからな……」

ジン君はともかく春日部と久遠の二人は確実に戦うだろう。もしそうなれば二人に大きな危険が迫ることになる。それだけは絶対に避けなければならぬ。

「……………よし。行くか」

まだ心に躊躇いが残るがそれを抑え込んで覚悟を決める。

オレは、ガルドを倒す。

壁を過ぎて部屋をのぞいてみるとガルドは部屋の中をうろうろと動き回っていた。

まずは話しかけて会話ができるか確認してみるか。

「よお、ガルド。元気だったか?」

「GEEYAAAAaaa!!」

「そうかそうか、元気だったか。元気なのはいいことだ」

「GEEYAAAAaaa!」

「ハハハ」

会話が成り立たない。というよりも使ってる言語が違う。

交渉作戦失敗。これが失敗となるともう倒すしか選択肢がないん

だけどな……。

動かないオレをガルドが警戒するように、そしていつでも飛びかかれるように姿勢を低くしている。

「なあ、ガルド。お前はこのルールに逃げを作ったのか？」

語りかけるが反応は帰ってこない。

「負けたら箱庭の法に裁かれる。それが怖くてオレ達に殺されることでそれから逃げたのか？」

「GEEYAAAAaaa!!」

痺れを切らしたのか体全身を使ってオレに跳びかかってくる。

……………それが答えなのか？

ガルドがオレの所に着くまですぐ時間があつたような気がする。

実際は数瞬なのだがその間はオレにとっては凄く長く感じられた。

「……………さようなら。そしてごめん」

ガルドの体から数十本の白銀の十字剣が生える。

「GEE……………YAAAA……………」

ガルドの攻撃がオレに届くことはなく、その巨体は目の前で崩れ落ちた。

11話 外道に誓いました

暗闇が支配する部屋で機材の明かりだけが淡く光を放っていた。目の前は良く見えない。自分が今どこに立っているのかもよく解らない。

ポタポタと水が落ちる音がした。

直ぐ近くだ。何処だろう？ 水を止めないと……。

一步踏み出す。ビチャツという音がしたので二歩目を踏み出さずに止まる。

下を見る。黒くて良く見えない。

しゃがんでその液体に触れてみる。ヌルツとした。

何だろう？ そう思つて触れた手を顔の前に持つていく。

薄明りに照らし出されたそれは赤黒い色をしていて鉄くさかった。

あたりを見回してみる。この液体が漏れ出しているところを探そうと思つた。

「ひっ……い！」

だが、それは地獄絵図を示す道標でしかなかった。

薄明りで照らされた室内をよく見ると何かが重なつて山を形成していた。液体もそこから流れている。

何か、という表現でごまかせるものではない。

死体の山だった。

死体が重なり合つて山を形成し、そこから赤黒い液体——恐らくは血液だろう——が大量に流れていた。

「あ……ああ……」

あまりに残酷な光景に思わず顔を両手で覆う。頬がヌルツと液体で染まる。

「ああ……ああああああああああああ!!」

そして思い出す。これを作ったのは自分だと。



目の前に倒れている虎の怪物——ガルドⅡガスパーを見る。
全身から白銀の十字剣が生えているように突き刺さり血が流れ出している。

「……」

何だろうな、この気持ち。

仕方なかった。こうしないと三人が危険だった。だけど殺す必要があったのか？　もしかしたらガルドを助けられる方法があったんじゃないか？

心の中でそんな声が何度も何度も響く。

三人を守れたという達成感と、ガルドを助けられなかったという後悔が渦巻く。

「あー……。重いな、これは……」

自分で背負うと決めたこの罪は覚悟しても重く心にのしかかる。

「剣士ー」

後ろから慌てた様子で声を掛けられる。春日部だ。

後ろからはジン君、久遠、そしてゲームが終了したから入れるようになったからか黒ウサギと逆廻が続いて部屋に入ってくる。

予想道理といえなさそうなのだが、久遠と春日部は不機嫌そうにしている。ちよつと意外だったのは久遠が不機嫌そうにしているだけだということだろうか。

「皆さんおそろいでどうしたんですか？」

「貴方がゲームをクリアしたんじゃない。功劳者を祝いに来てあげたのよ」

腰に手を当てて少し威張ったように久遠が告げる。その行動に思わず唾然としてしまう。何故って？　そんなの久遠のことだから抜け駆けしたことにも文句でも言うかと思っただけだよ。

「おいおいお嬢様、随分と驚かれてるみたいだがどうすんだよ」

「そこまで驚くことかしら？」

「まあ、今までの飛鳥と剣士のことを思い出すと無理もないと思うけど」

「そこまで酷かったかしら……」

何も言わず三人のやり取りを見つめる。そして思った。これで良かった、と。

三人がわいわいと当事者そっちのけで『久遠飛鳥の剣士への態度反省会』が開かれている最中、黒ウサギが春日部の手元を見て「おや？」と首を傾げる。

「耀さん。今耀さんが持っているのは何ですか？」

「これ？ 一応指定武具みたいなんだけど……」

春日部がそういうと黒ウサギはさらに首を傾げた。

「ではガルドを倒したのは耀さん？」

「ううん。剣士だよ」

「??」

さらに首を傾げる黒ウサギ。頑張れ、あとちよつとで百八十度だぞ！

「しかし指定武具は春日部さんが持っていたのでしよう？ なら剣士さんがガルドを倒すことは不可能なのでは？」

黒ウサギの疑問は当然のことだな。もし春日部が指定武具を持った状態でオレがガルドを倒したとなると”契約書類”に書かれていたことが破られたことになる。

だが実際オレはガルドを倒した。指定武具を春日部が持ったままだ、不思議に思わない方がおかしい。

「てえことだ。この駄ウサギのために説明してやってくれ」

逆廻が自分は分かっているからという体をして言う。本当ならここでお前も解っていないだろと言うべきなんだろうが言わない。だって逆廻は頭の回転早いから本当にわかってそうだしな。

「しようがない、駄ウサギのために説明してやるか」

「御二人とも駄ウサギと言い過ぎです！」

実際駄ウサギじゃん。

真実を告げられ憤慨している黒ウサギを放置して説明をすることにした。

「まず、そこに転がってる剣だが……オレが”解析眼”を使って得た情報をもとに”創造者”で作ったものだ。だから春日部が持っている

るのとまったく同じものになっている」

「……確かに傷の入り方とかまで瓜二つだな」

「それで何故オレがガルドを倒せたか。それは、誤認”を利用してんだ」

逆廻以外の四人は頭にクエスチョンマークを浮かべている。対照的に逆廻は「へえ……」と理解したようだ。……ほんとにコイツ頭の回転早すぎだろ。

「すみません、もう少し分かりやすくお願いします」

ジン君が申し訳なさそうに言う。良いんだよジン君。あんな説明で理解できるのはそこにいる頭脳派バトルジャンキー位だから。

「そうだな……。例えば全てがまったく同じ二枚の絵があるとするだろ？ そのうちの片方を言い当てるゲームをするとする。でも二枚の絵はすべてが一緒だからどっちかを言い当てるなんて無理だ。確率は二分の一、そこを利用したんだ」

「つまり指定武器をまちがえるようにさせたってことですか？」

「うーん……大体そんな感じだけど少し違う」

「つまり天野が言いたいのは二枚の同じ絵を選ぶ時に一瞬でもこつちが本物だと思う時があるだろ？ 今回のゲームで言うと同じ剣を何本も作ることによって箱庭の中枢に一瞬でも”これが本物”と誤認させることによつて攻撃できるようにした……まあこんなもんか？」

逆廻の説明に四人がまた驚愕の表情を浮かべてオレを見る。

「あなたは本当に剣士？」

まさか存在を疑われるとは思わなかったよ。

でも、正直逆廻が言ったことで全てあつてる。だけど正直これは賭けだったし、なにより無茶苦茶のゴリ押しなので次は使えないだろう。

「ま、確かにあの天野がここまで考えられるなんて疑いたくなるが残念ながらコイツは天野だ」

「お前らオレをバカにしすぎだろ」

オレだって中学校卒業程度の頭脳はあるんだぞ。高校生だけぞ。

「そういえば」

ヤハハと笑ってる逆廻が急に笑いを止めてオレの耳元に口を近づけ囁くように言った。

「このゲームは、面白かったか？」

「……………いや。全然」

だろうな、と言つて顔を放す逆廻。その目はオレの考えてることを全て見透かしてる様に見えた。

「お前が今回のことをどういう風にとらえてるかは分からねえ。だがな、結局は裁かれる運命にあつたんだ。そんなに重く受け止めなくてもいいんだぜ」

そしてヤハハと笑う逆廻。……………まったく、コイツは本当に頭が良いな。

確かに逆廻の言う通り、オレは今回のことを少々重く受け止めている。これはあくまでもゲームだ。敵キャラを倒したという認識の方がこの箱庭では常識的かもしれない。その方が気が楽だし、苦労なんてしなくて済む。だけど――

「悪いな。その考えはオレにはできない」

『あの日』に知った命の儚さと重さ。だからオレは誰に何と言われようともこの考え方を変えないし、変えたくない。

ああ、そういえばやることがあつたけ……。日が暮れる前に終わらせとくか。

体を反転させて扉に向かう。しかし久遠に引き止められる。

「何処に行くつもりかしら？ 剣士君」

「……………」
「ノーネーム」だよ。早く帰ってリリちゃん達と遊ぶんだ」

オレの返しに久遠はため息を吐いて何かを言おうとする。しかしそれは逆廻に遮られてしまった。

「そんじや俺達はやることやって帰るとするか、御チビ」

「ちよ、ちよつと」

「え？ あ、はい」

……………ありがとな、逆廻。

心の中でお礼を言つてオレは部屋を出た。



「……十六夜君、どういうつもりかしら？」

剣士が出て行った後、ジンと共に“フォレス・ガロ”の解散令を出したり旗印の返還などをした後の帰り道、飛鳥が唐突に十六夜に問いかけた。

「主語がないと何のことかわからないぜ？ お嬢様」

肩を竦めてバカにしたように言う十六夜。それにさらに飛鳥は少しむっとする。

「さっきの剣士君のことよ。本来ならばあの場にはゲームをクリアした剣士君も居るべきではなっかたかしら？」

「あー、確かにその方がもっと拍が付いたかもしんねえな」

ガルドを倒したプレイヤーが“ジンⅡラツセルの率いるノーネーム”に所属しているとすれば“打倒魔王”を掲げるコミュニケーションとして名が売れるし、その数が多ければ多いほど“強いプレイヤーが複数いる”という認識が生まれ“打倒魔王”により速く近づける。

しかし十六夜は飛鳥の引き留めを邪魔し、剣士を一人で行かせた。それが飛鳥には疑問だった。

「二人の会話を聞いてたけど”裁かれる”とか”重く受け止めなくていい”ってどういうこと？」

「聞いてたのかよ。春日部の前じゃ内緒話もできねえな」

ヤハハと愉快に笑う十六夜。そして暫く笑った後、黒ウサギの方を向く。

「なあ黒ウサギ。さっきのゲームで形式上は天野はガルドを倒したってなってるがやっぱアイツは死んだのか？」

「ええ。恐らくガルドは死亡し、この箱庭にはもう居ないと思います。それこそ何か特別なギフトでもない限りは」

「つと、まあこういうことだ」

四人の頭にクエスチョンマークが浮かぶ。

「あのね十六夜君。さっきの剣士君もそうだったけどもつとわかりや

「すい説明はできないの?」

ジト目で飛鳥が十六夜を睨む。その隣では耀がうんうんと頷いている。

「分かりやすい説明も何も、今のが全てだぜ?」

「えっと、つまり剣士さんはガルドⅡガスパーを倒したことに何か思うことがあるということですか?」

ジンがそう言うのと十六夜は「よくできました」と大袈裟に言うと言明を始める。

「アイツはどうやらガルドを倒した……というより殺したことを悔やんでるらしくてな。優しい十六夜様が慰めてやったってことだ」

何故か威張って言う十六夜。それに飛鳥たちは未だに疑問顔だった。

「殺したって……何か大袈裟すぎじゃないかしら?」

「そうですね。この箱庭には命を落としかねないものや命を懸けたギフトゲームは多数存在しますからそこまで重く受け止める必要はありません」

飛鳥と黒ウサギが言うと、十六夜は「そうは言ったんだがな」と言つて肩を竦める。

「でももしかしたら剣士の過去に何かあったことが理由かもしれないし、これ以上の詮索はやめとこう」

耀の言葉に飛鳥と十六夜はそれぞれ頷く。

それぞれ違う世界から来た四人だが、誰が決めたわけでもないが四人の過去はそれぞれ詮索しないようにしている。それが四人のためでもあるし、何よりコミュニティのためでもある。

「そんじゃさっさと帰るとしますか」

「そうね」

「うん」

逆廻を先頭に三人が歩き出す。少し遅れて黒ウサギとジンがついてくる。

「黒ウサギ」

「何ですか? ジン坊ちゃん」

「良い人たちだね。十六夜さんたちは」

「YES♪招待して正解でした」

「あれ？ 剣士様は一緒じゃないんですか？」

”ノーネーム”に帰り着いた十六夜達を出迎えたリリの第一声がこれだった。

「剣士なら先に帰ったはずだけど」

「あ、はい。確かに一度帰ってきましたが”白い花を貰えるかな？”とおっしゃったので花を渡すとまた出て行かれました」

リリの説明を聞いた十六夜は「いや、流石にやりすぎだろ」と言つて頭を掻いた。

「白い花ですか……。どうしたんでしようね？」

しかし十六夜以外は剣士の目的に気付いておらず、顔を見合わせていた。

「剣士君のことだから昨日みたいに迷子になってる可能性もあるわね」

「でも一度此処まで戻ってきたなら迷子になってるとは思えないけど……」

「黒ウサギが探してきたほうが良いでしょうか？」

「あ、それなら私が行きます」

リリが言うと黒ウサギが驚いた顔をする。

「実は今日のお夕飯の材料で少し足りないものがあってちようど町まて出る場所だったんです。だからそのついでに剣士様を探していきます」

「でももう外は暗いですから黒ウサギが言った方が安全です」

「大丈夫だよ黒ウサギのお姉ちゃん。ただ買い出しに行くだけだから直ぐ帰ってくるし」

「でも流石に暗い道を子供一人で歩かせるわけには……」

リリを一人で行かせまいとする黒ウサギにジンが穏やかな口調で言う。

「良いんじゃないかな？ 黒ウサギ」

「で、ですがジン坊ちゃん！」

「今日は黒ウサギも審判を頑張って疲れてるみたいだし休むことが必要だよ。それにリリは年長組でも一番しっかりしてるからきつと大丈夫だよ」

ジンの言葉に「うう……」と唸りながら暫く黒ウサギが唸ると、意を決したようにリリを見る。

「分かりました。それじゃあお願いしますね」

「はい！ 行つてきますー！」

元気よく言うと、リリは二つの尻尾を振りながら屋敷を出て行った。

「じゃ、俺達は天野たちが帰ってくるまでゆっくり休ませてもらうか」

「うん。壁に叩きつけられたから背中痛いし、超疲れた」

「私も疲れたわ。主に剣士君のせいだけけど」

問題児三人もそれぞれ思い思いのことを始める。それを見た黒ウサギはチームワーク的なものを心配になった。

「えっと……うん、これだけあれば大丈夫かな」

買い物袋を覗き込みながら満足げに頷くリリ。

辺りが殆ど夜の闇に包まれた頃、もう一つの仕事を果たすべく歩き始める。

「剣士様どこにいったんだろう？」

テクテクと小さい歩幅で、それでも早足で歩く。剣士とは出会ってから日こそ浅いが大切なコミュニティの一員だ。帰りが遅ければ心配になる。

「”フォレス・ガロ”にいるかな？」

ふとそんなことを思い足を九十度反転させて再び歩き出す。

何故剣士が白い花を欲したのかりりは分からなかった。だから剣士を見つけたら聞いてみよう、そう思つて歩みをさらに速くする。

暫く歩くと町並から店が少なくなり、塀に囲まれた道が多くなってきた。

町明かりが少なくなってきたこの場所は薄暗く、リリは少し怖くなった。いくら年長組でしっかりしていると言われてもやはりまだ子供なのだ。知らない場所はまだ少しばかり怖いものがある。

「は、早く見つけなきゃ」

買った物袋をギュつと胸に抱えて歩く。尻尾はピンと上に向かって立っていた。

「け、剣士様ー。居ますかー」

震えた声で剣士を呼ぶ。しかし返事は返ってこず、ただ暗闇のなかに消えていくだけだった。

「うう……。見つからないよ……」

剣士が見つからない不安感と暗闇の中に一人にいるという孤独感でリリは段々と心細くなってきた。

もしかしてもう帰ってるのかな？ そう思い帰ろうとすると、暗闇が続く道の一か所だけ薄明りが灯っているのに気付く。それはよく見ると微かに揺れ動いていた。

何だろう。そう思っつてリリは恐る恐る灯りに近づく。心臓が緊張でドクンドクンと大きく、そしてゆっくりと鼓動する。

一歩、また一歩と灯りとの距離が縮まっていく。どうか剣士様でありますように、とリリは強く祈る。

そして曲がり角まで来ると一度止まり呼吸を整える。そして「よしっ」っと小さく呟いて一気に覗き込む。

「何してるの？」

「ひゃわっ!?!」

突然声を掛けられて驚いて尻餅をついてしまうリリ。

「大丈夫？」

「はい、大丈夫で——つて、剣士様!?!」

リリが顔を上げると右手にランプ、左手に紙袋を持った剣士が立っていた。

「あれ？ リリちゃんじゃん。どうしたの？ こんな所で」

紙袋を地面に置いて手を差し伸べる剣士。リリはその手を少々躊躇いながらとり、立ちあがる。

「えっと、お夕飯の買い出しをした後に剣士様の搜索をしました」

「あ、もう搜索がかかるような時間だったのか。……黒ウサギ怒った?」

「いえ。心配はしてましたがあんまり怒ってはなかったです」

「そうなんだ。……………ということはお嬢様あたりから何か言われるな(ボソツ)」

言葉の最後に剣士が何か言ったがリリには聞こえなかった。

「あ、そういうえば剣士様。お花はお役に立ちましたか？」

「うん。綺麗な花をありがとう。おかげで綺麗に仕上がりましたよ」

そう言っリリの頭を優しく撫でる。リリは一瞬ビククリするもすぐに嬉しそうに頬を緩ませる。

「お役に立って良かったです！　　そういうばあのお花は何に使われたんですか？」

剣士にあつたら聞こうと思っていた事を問いかけると「ああ……………うん」と若干言いにくそうにした後、リリの頭から手を放し足元に置いていた紙袋を手にする。

「もうすぐできるからリリちゃんもついておいで」

それだけ言うと剣士は歩き出してしまった。それを慌ててリリが追いかける。

「ど、何処に行くんですか？」

「……………ガルドのお墓だよ」

剣士に連れられてやってきたのは“フォレス・ガロ”の本拠の一角。そこには白い綺麗な石碑が一つ立っていた。

近づいてよく見るとリリが剣士に渡した白い花が添えてあり、石碑の中央には『ガルドⅡガスパー』と彫られていた。

「剣士様……………これは？」

「ガルドのお墓。即席だからあんまり華やかじゃないけどね」

ハハハと笑って石碑の前に座り込み紙袋の中からお酒を取り出し、花の隣に置く。

そして静かに手を合わせて合掌する。

「剣士様……………」

リリには今日剣士に何があったのかわからないし、考えも読めない。だけど、それでも石碑に合掌する剣士の背中には責任と後悔を背負ってるように見える。

「リリちゃん」

手を合わせたまま静かに剣士が口を開く。

「死んでもいい人間なんてこの世界……他の世界にもだけど居ないんだよ」

ゆつくりと静かに語る剣士。リリはそれを黙って聞いていた。

「でも生あるものは必ず死が訪れる。絶対抗えない自然の掟だね。だけど死んだらそのままにしておくのは可哀そうだ」

手を離し、箱庭の空を見上げる。

「死んだのが良い奴でも、外道な奴でも、ちゃんと見送ってやらないと淋しいよ」

立ち上がってリリの方を向く。その顔は何時ものヘラヘラとした笑みだったが、どことなく優しさが滲み出していた。

「このことを覚えておいてね」

ポンっとリリの頭に手を置く。

「は、はいー」

元氣よく返事をする。「よろしい！」と言って頭に置いてた手を放し、リリの目の前に差し出す。

「サウザンドアイズ」の寄ってから帰ろうか。ご飯は我慢してもらうことになるけど、ビックリして尻餅をついちゃうリリちゃんを一人で返すのは危ないしね」

「うう……それは忘れてください……」

若干顔を赤くしながら遠慮がちに剣士の手を握る。それに満足げに笑うと二人はガルドの墓の前から立ち去った。

「ガルド、オレはもう誰も殺さない。絶対に……な（ボソツ）」

小さく、しかし確かに心からの言葉で剣士は誓った。もう二度とあんな思いをしないように……。

□ ■ □ ■ □

「テンちゃんやつほー!」

「おや、貴方ですか。帰ってください」

さっそく追い返されそうになって涙でそう。泣かないけど。

「け、剣士様！ 元氣出してください！」

横で手を繋いでるラブリーエンジェルリリちゃんが励ましてくれる。ヤバイ、テンション、上がって、

「キタアアアアアアアアアアアアアア!!」

「近所迷惑になりますので奇声を上げないでください」

怒られた。というか蔑んだ目で睨まれた。

「はあ……それで？ 何かご用でしょうか？ 貴方のお仲間なら中に入っています」

「あれ、あいつ等来てんの？ なんで？」

素直にそう返すとテンちゃんが驚いた表情になった後、「ああ、だから居なかつたんですね」と一人で自己完結していた。

「ねえテンちゃん、何であいつ等来てるの？」

「御気になさらず。それで、オーナーにご用でしょうか？ 現在オー

ナーは取り込み中で少々待ってもらうことになりましたが」

「随分な対応だなおい。……まあいいや。待たせてもらうよ。それなりに大事な要件だし」

「そうですね。なら中でお待ちください。変態が店の前で小さい女の子していると店の評判が落ちかねないので」

遠まわしに見せかけて実はストレートで罵倒するスキルを持っているとは思わなかったよ。だがその程度ではオレの心を完全に折るまでには至らないな！

心の中で言っつて悲しくなってきた気持ちを振り払い、リリちゃんの手を引いて店の中に入る。

テンちゃんの後について行つてると一間だけ随分と賑やかな声が聞こえてきた。

『そうだぜお嬢様。この美脚は既に俺のものだ』

『そうですそうですこの脚はもう黙らっしやいッ!!』

『よかろう、ならば黒ウサギの脚を言い値で』

『売・り・ま・せ・ん！ あーもう、真面目なお話をしに来たのですからいい加減にして下さい！ 黒ウサギも本気で怒りますよ！』

……………黒ウサギ達かよ。

「変なお客さんも居るものですね。芸人ですかね？」

「貴方のコミュニケーションの仲間ですよ」

はいそうです。あそこでコントを繰り返してるのはオレのコミュニケーションの仲間です。すみません。

「良いかいリリちゃん。あんな人に育ったら駄目だからね？」

「あ、あははは……」

流石のリリちゃんでも苦笑するレベルとは……あいつ等反面教師やれるんじゃない？

「反面教師なら貴方が一番お似合いかと」

「心の中を読むんじゃないよ」

何でわかるんだろう。不思議でたまらない。

『あつはははははは！ え、何？ ”ノーネーム” っていう芸人コミュニケーションなの君ら。もしそうならまとめて”ペルセウス” に来ていってマジで。道楽には好きだけ金をかけるのが性分だからね。生涯面倒見るよ？ 勿論、その美脚は僕のベッドで毎晩好きだけ開かせてもらおうけど』

「ん？」

『何故箱庭に住む人は人の心を読めるのか』を考えていると聞きなれない男の声が聞こえてきた。

12話 一悶着ありました

「後はここをこうやって……つと。ほら」

「わあ！ スゴいです剣士様！」

「更にこうすれば……」

「あ、完成ですね！」

「貴方達は何をやってるんですか？」

いきなり襖が開いたかと思っただらテンちゃんが立っていた。

「お仕事ご苦労さん。逆廻達は何処に？」

「客間の方に案内しました。それよりさっきの質問に答えてください」

因みに説明しとくと、逆廻達は部屋が散らかってたのでテンちゃんの粋な計らいで部屋を移し、オレとリリちゃんはバレないように廊下の隅で待機している状態だ。もつとも逆廻とヤっさんにはバレてると思うけど。

「何って……ルービックキューブだけだ」

そういつて手に持っていたルービックキューブをテンちゃんに差し出す。それを受け取ったテンちゃんは観察するようにいろんな角度から見た後、難しい顔をして眉をよせた。

「……………どうするんですか、これは？」

「あ、テンちゃんも知らないんだ」

さっきまでリリちゃんに教えてたけど、箱庭にはないのかな？

一応言っておくがルービックキューブとは立方体でそれぞれ面が幾つかの四角に別れており、それぞれの色事に面を揃えていくパズルゲームで暇潰しには持ってこいのあれである。まあ、大体の奴は中々揃えられずに飽きるんだけど。

「という物なんだ。分かった？」

「だいたい理解できました。つまり立体パズルのようなものですね」

「うん。そういうこと」

「あれ？ 今、剣士様一言も喋ってないですよね？」

ホントだ。何で分かったんだらう？ マジで心のなか読まれて

る？　それならテンちゃんの悪口言えないじゃん。

「どうしましたか？（ジロツ）」

「いえ、何も……」

目付きが変わった。あ、もうテンちゃんの悪口言うのやーめよつと。

『いやだ』

テンちゃんの悪口を言わないと決めた瞬間明確な否定の声が聞こえてきた。声質からして男のものだが聞き慣れない声なので恐らくは先にこの店に来ていた男だろう。名前は確か……ルイジアナだけ？

「ねえ、テンちゃん。あの久遠より物分かりの悪そうないけすかないイケメンの名前って何だっけ？」

「け、剣士様？　笑顔で悪口を言うのはどうかと思いますよ？」

はっ！　いけないいけない、あんな我が儘そうなお坊ちゃんを見るとついイラツとしてしまう。え？　逆廻にはしないのかって？

まあそこは責任がとれるかどうかの違いだな。アイツはどうやってもとれそうにない。

「貴方は……先程も言いましたが、あそこに座っているチャラくてウザくて親のおかげで今の地位にいるだけの七光りのクズ野郎は”サウザンドアイズ”の傘下のコミュニティ、”ペルセウス”のリーダーのルイオス様です。それくらい一度で覚えてください」

「剣士様より凄い悪口言ってる!？」

どうやらテンちゃんもあのルイオスってのは嫌いらしいな。逆に好きって言う奴はかなり稀少だと思う。

『あ、貴方という人は………!』

『しっかし可哀想な奴だよなーアイツも。箱庭から売り払われるだけじゃなく、恥知らずな仲間の所為でギフトまでも魔王に譲り渡す事になっちゃったんだもの』

うん、言い方がなんかウザいな。自分が上の立場だと思ってるからだろうが一応お前の目の前に座ってる奴等はお前の数倍強いと思っ
ぜ？

「にしても、ルイオスが言ってる『アイツ』って誰のこと？　話の流

れから吸血鬼つてのだけは分かったんだけど……」

「多分ですけどレテイシア様のことだと思います」

「レテイシア？　誰それ？」

「私たち”ノーネーム”の仲間です。前に魔王に襲われたときに拐われたんですけど……」

「つまり現状では元・仲間って言い方が適切なわけだ」

「……」

おや、リリちゃんが俯いてしまった。まあ、あの”ノーネーム”の雰囲気からすると、というか仲間を全員取り戻す気満々な黒ウサギ達にとつては離れていても仲間なのだろう。元・仲間という言い方が気に入らないというのも頷ける。

しっかし、吸血鬼か……。そういえばジン君が”フォレス・ガロ”の本拠に生えてた異形な木を見て”鬼化”って言ってたけどそれと関係あるのか？

『取引をしよう。吸血鬼を”ノーネーム”に戻してやる。代わりに、僕は君が欲しい。君は生涯、僕に隷属するんだ』

『なっ、』

『一種の一目惚れって奴？　それに”箱庭の貴族”の箔も惜しいし』

「……へえ」

随分と面白い取引を持ちかけてくるじゃないか、このクズは。ここ最近クズとの遭遇率高いな、オレ。

『“黙りなさい”！』

久遠の言葉が響き、それと同時にルイオスの下顎が強制的に閉じられる。あれって舌出した状態だったら噛みきれそうだな。

「おっと、それより準備しないと」

中腰になっていつでも戸を開けられるようにしておく。

『貴方は不快だわ。そのまま”地に頭を伏せてなさい”！』

わお、久遠節全開ですね。ルイオスも徐々に頭を下げ始めてーん？　”徐々に”？

『おい、おんな。そんなのが、つうじるのは——格下だけだ！、馬鹿が!!』

久遠のギフトを打ち破ったルイオスがギフトカードを取り出し、光と共に鎌が現れる。そしてそのまま鎌を振り下ろそうとする。させないけどな！

「喧嘩両成敗！」

襖を勢いよく開き、バケツを水を撒くように振る。

「っ!?!」

バシヤツという水音をたてて頭から水を被る……久遠が。

「……」

髪からぽたぽたと雫が滴り落ち、怒りを限界まで堪えたらこんな顔になるんだあと感心するほど凄惨な形相をしていた。

「……………これはどういうことかしら?」

顔は笑顔に戻ったが額に青筋立ってますよ、久遠さん。

「ほら、昔から喧嘩両成敗って言葉があるでしょ? その七光りの坊っちゃんに喧嘩ふっかけた久遠に叱るべき制裁をくだしたままでだよ」

「貴方ねえ……」

ピクピクと口角が痙攣してるように動いてる。マジで面白いが顔にださないようにしないと怒られる。

「お、おい、お前! 何だこれは!」

ルイオスが鎌を振り上げた状態で固まっている——というより鎖で床と天井に固定されている状態で声を荒げる。

「何って……話聞いてた? 喧嘩したので仲裁したままでですよ。もっとも、貴方は肉体的に危害を加えようとしたから手荒な方法をとらせてもらったがな」

「先に手を出したのはその女だろ!」

「だから久遠はびしょ濡れになってるだろ? そんなことも分からないのかよ」

「っ! コイツ……ッ!」

ギリッとオレまで聞こえるくらいの歯ぎしりをしてオレを睨む。

そんな顔しても全然怖くないね。久遠のほうが百倍おそろ。「劍士君？」 すいません何でもないです。

「あの、劍士さん？　一つ宜しいでしょうか？」

若干遠慮ぎみに手をあげる黒ウサギ。

「何だよ黒ウサギ。今リリちゃんの教育上宜しくなさそうな奴の説教をしてるんだけど」

「何で此処にその子が居るのかも聞きたいところですが、もっと重要な事がありますのでそこから聞いても宜しいでしょうか？」

「しようがないなあ……。一つだけだぞ？」

「ありがとうございます。それではお伺いしますがさつき飛鳥さんに水を掛けたのは喧嘩を止めるためですよね？」

「そうだけど」

「なら——黒ウサギにまで水を掛けることは無いですよね?!」

髪とウサミミを逆立ててキレる黒ウサギ。その体は黒ウサギが言うように久遠程ではないが少しばかり濡れていた。

「ついノリでやりました」

「あ、そうなんですか。それならしようがなくないです！　このお馬鹿様!!」

ノリツッコミした流れで怒られた。まったく、黒ウサギは元気だなあ。

ま、水かけたのは事実だけどオレも本当にノリだけでぶっつけた訳じゃないけどね。

「なあ黒ウサギ、さつきの取引に応じるつもりならやめとけ。最期に泣きを見るのはお前自身になるぞ」

「ど、どういうことですか」

さつきまでの怒りは何処へ行ったのやら、急に険しい顔つきになる。

「あのさ、話聞いてたらやれ自己犠牲が生き甲斐だの仲間のためだの言ってるけど、そんなの無意味だからやめろよ」

「……黒ウサギは“月の兎”です。もしそれで誰かが助かるというならこの身を差し出すことだっついでいいと思います」

ああ、ダメだ。このウサギは何にも分かっちゃいない。仲間を助け出すために取引に応じる事が必ずしもいい話で終わるわけではないことに気付いてない。

「……………はあ」

「な、何ですか、そのため息は」

「いや、駄ウサギが一匹いるなどと思ってさ」

「だ、駄ウサギってなんですか！　黒ウサギは”月の兎”の生き方にならってー」

「自己犠牲ってか？　何それ超ウケないんだけど」

「な…………ツ!？」

狼狽して目を見開いてオレを見る。

「いいか黒ウサギ。お前がしようとしていることは自己犠牲でも何でもない。ただの自己満足だ」

ビクツと黒ウサギの体が跳ねる。

「自分が犠牲になれば仲間の吸血鬼は解放される。そうすればルイオスの言う”恥知らずな仲間”じゃなくなる。……………得られるモノはたったこれだけなんだぜ？」

「…………何が言いたいんですか」

「つまり、さ」

一度言葉を区切つて息を吐き、大きく吸い込んで出来る限り真面目そうな顔を作る。

「その後はどうすんだよ。コミュニティの財源は？　子供たちの明日の食料は？　それに仲間の吸血鬼はコミュニティ再建を聞いてギフト渡してまで来た人情の厚い奴なんだろ？　それなら解放された後にお前を助けにルイオスに喧嘩吹っ掛けるかもしれないだろ」

「ツ!!」

「誰も助かってないじゃんか」

その言葉を聞いた黒ウサギは黙って俯いてしまった。誰も助からない自己犠牲などただの自己満足に過ぎない。別に黒ウサギの自己犠牲精神を止める訳ではないが、其処のところは履き違えてほしくなかった。

「以上、天野剣士のお説教を終了する」

「……………は？」

黒ウサギ、久遠、ルイオスの三人が途端に間抜け——もとい気の抜けた顔になる。因みにさつきから喋ってない逆廻とヤっさんはとうとうと、ヤっさんは真剣な表情で聞いてたが逆廻はニヤニヤしてやがった。

「ヤっさん、ちよつと良いかな？」

「なんだい、今度は私に説教か？」

「違うよ。ちよつと頼みたいことがあるんだ」

「暇潰し一日で手を打とう」

「黒ウサギ一日着せ替えで」

「良からう。その依頼引き受けた」

「ありがと。それで頼みつてのは”フォレス・ガロ”本拠の一角に白い石碑みたいなものがあるから取り壊されないようにしてほしいんだけど」

「ふむ。それくらいなら簡単だな。手配しておこう」

「流石ヤっさん。助かるよ」

お互いに軽く笑いあうとオレはリリちゃん達の居る方へ歩き出すが、大切なことを思い出して首だけ黒ウサギ達の方へ向ける。

「ルイオスの手枷なんだけど外すの怠いから誰か外しといてね。それじゃ、サヨナラ七光りのお坊っちゃん」

それだけ言い残してリリちゃんの手を引いて店の出口へ向かう。

「あの、皆さんを待たなくていいんですか？」

「良いんだよ。どうせ最期に決断するのは黒ウサギなんだ、オレ達がアレコレ言っても無駄だし。それに……………」

「それに？」

「黒ウサギはリリちゃん達を簡単には見捨てないさ。きつととびきり面白い答えを出す。……………でしょ？」

「……………はいッ！」

ひょコン！ と狐耳が立つ。ナニコレ新しい、そして可愛い。

というわけで、オレとリリちゃんは黒ウサギ達を置いて一足早くコ

ミュニティに戻ることにした。



『「ノーネーム」の皆様へ

これから暫く旅に出ますが、逆廻も一緒なので探さなくても大丈夫です。

謹慎くらってる黒ウサギ達と違って自由の身なのでゆっくりと旅をしますが五日以内には戻ってくるつもりです。

それではお体に気を付けて。

P. S. オレは反省なんてしていない 天野剣士』

「……………」

「あ、あははは……………」

一枚の紙を覗き込んで黒ウサギ、飛鳥、耀の三人は固まり、そのそばではジンが頭を抱えリリが苦笑している。

昨日の”ペルセウス”との諍いの翌日、本来なら謹慎状態の三人は部屋から出でこれないのだが、剣士の部屋に置いてあった置手紙をリリが見つけて緊急に招集されたのだった。

十六夜と剣士の二人は昨日の一件で特に争いを起こしたというわけではないので謹慎処分を下さなかったが、こんなことになるなら二人にも謹慎を言い渡しておくべきだったとジンは今更ながら心の中で後悔する。

「あの問題児の御二人は…………ッ！」

怒りのために髪の色が徐々に緋色に変化していく黒ウサギ。手に持っている手紙も力強く握られてるためかクシャクシャになっている。

「お、落ち着いて黒ウサギ。別に何か問題を起こしたってわけじゃないでしょ…。」

「これから何か問題を起こすかもしれないじゃないですか！ 十六夜さんなら多少の良識はあるかもしれませんが剣士さんは不安すぎます！」

「そ、それは……否定できないけど……」

なだめているジンは黒ウサギの正論(?)に説き伏せられ言葉を失う。飛鳥と耀も気まずそうに顔を伏せている。

「皆様、きつと大丈夫ですよ。剣士様は良い人ですから」

「リリ……」

剣士の事で不安に包まれる中でリリだけがそれを否定していた。

「剣士様は優しい方です。初めて会った時だって水を運ぶのを助けていたただきましたし、昨日だってお墓を作っていましたし……」

「お墓? それってどういうこと?」

”お墓”という単語に反応して耀がリリの言葉を遮るように問いかける。

「? 皆様ご存じないのですか?」

「知らないわね。そもそも誰のお墓よ」

「えっと、確か”フォレス・ガロ”のリーダーさんのお墓でした」
『!?』

その場にいるリリ以外の全員が驚愕する。無理もない、そもそも”フォレス・ガロ”に喧嘩を売ったのはガルドが外道で我慢ならなかったからだ。それなのにガルドの墓を作るということが四人には疑問でしかない。

「なんか……剣士らしい?」

「何で疑問形なのよ。……まあ、言わんとしていることは分かるけど」

飛鳥と耀は今までの剣士を重ね合わせて納得していた。黒ウサギはまだ驚いたままだが二人同様に今日の剣士の態度を思い出し、釈然としないが納得する。

「まあ、御二人とも基本的に何か問題起こしても自分で何とかするくらい力はあからあまり心配することは無いんじゃないかな」

ジンの『あまり』という部分に少なからず不安が残っていることを示してはいるが全員頷き合う。

あれから四日後、剣士と十六夜が旅行(?)に出た日を含めると五日後。この日は雨だった。

黒ウサギは自室の窓際に座りながら窓の外をじつと見ていた。何

故こんなことをしているのか。それは、四日前に和解できるかと思われたが、頑なに自分の意見を曲げようとしない黒ウサギと飛鳥、耀、ジンの第二回目の論争が始まったのだ。結局のところ再び謹慎をくらってしまい、こうして窓の外を眺めているというわけだ。

この光景を剣士が見ればバカにするかもしれない、と黒ウサギは想像の中で自分のことをバカにしてくる剣士に少し苛立ちを覚える。

それからしばらくすると、コンコンと控えめなノック音が響く。

「はい、鍵もかかっていますし中には誰もいませんよー」

「……。入ってもいいという事かしら？」

「そうじゃないかな？」

飛鳥と耀の声だ。しかし二人とも元々入る気満々だったのか黒ウサギの言葉をまともに受け取ろうとしない。というか黒ウサギの声がした時点で入る気だった。

「あら、鍵がかかっているわ」

「ん……………ホントだ。こじ開ける？」

「はいはい、開けます開けます！ 御二人はもう少しソフトというかオブラートにですね」

「まあ、待て。こういうのはこじ開けるのが楽しいんだよ」

「逆廻…………。その話乗った！」

「じゃあ、まず私から」

バキンッ！

「オブラアアアアアト！」

「五月蠅い」

黒ウサギの叫びを飛鳥と耀の二人が一蹴する。

「そんじゃ、次は俺だな」

ドガアン！

「い、十六夜さん！ 今まで何処に、って破壊せずに入ってこれないのでございますか貴方達は！」

「だって鍵かかってたし」

「あ、なるほど！ じゃあ黒ウサギが持っているドアノブは一体何なんですかのお馬鹿様！」

手に持っていたドアノブを投げつける黒ウサギ。十六夜がそれかわらずとドアノブが”ドアに”ぶつかる。

「!?」

「ラストオオオ!」

ガチャ

「普通に入ってくるんですか!?!」

「いや、ドアってそんなもんだろ?」

入ってくる前の掛け声に反し、至って普通に入室した剣士に何故か驚く黒ウサギ。前の三人の派手な登場のせいで身構えた分その反動は大きかった。

「……剣士、その風呂敷は何?」

耀の視線が剣士と十六夜がそれぞれ持っている風呂敷へと向く。

「ん? ああ、これね」

そうやって風呂敷を目線の高さまで掲げる。

「お土産だぜ。退屈してそうなお前らへのな」

ヤハハ、と笑いながら十六夜が風呂敷を近くのテーブルへと置くと包まれていたものが姿を現す。

「!…こ、これは……!」

黒ウサギが口を両手で押さえながら今までで一番驚いた顔をする。そんな黒ウサギの反応に気を良くしたのかニヤニヤと笑っていた二人がハイタッチをする。

「貴方達、これはどうしたのかしら?」

「勿論説明する。だけどその前に一つだけいいか?」

「何?」

剣士が深呼吸をして佇まいを正す。そしてそれをした意味があるのかわないのか再びヘラヘラした顔に戻り、軽い口調で言い放つ。

「オレ、レティシアを助ける気はないから」

「……へ?」

13話 留守番（強制） 任されました

「さて、理由を話してもらおうかしら」

「その前にオレを椅子に縛り上げた理由を聞いてもいいか？」

現在オレは黒ウサギの部屋で何故か椅子と仲良く縛られて問題児三人十駄ウサギに囲まれている。

因みに何故こんな状況になったかというところ、仲間の吸血鬼——レイシアを助けないと行ってそのまま部屋を去って自分の部屋で寝ようとしたところを春日部に組み伏せられ、久遠と黒ウサギの連係プレイによって今の状況になっている。

……それはもう見事な連携で、逃げ出す隙がまったくありませんでした。

「人間の体は自然と恐怖——危険から逃れようとするから縛り付けておくのはしかたがない」

「言い直してもあんまり緩和されてませんよ春日部さん。というかオレに何をするつもりだ」

「何って拷も——事情聴取をするだけよ？ 他には何もしないわ」

「そうか、なら二人とも今その手に持っている刃物をゆっくりテーブルの上に置くんか。アンドンスタン？」

「……Sorry. I can't understand English」

「ペラペラじゃん！ めっちゃ英語喋れるじゃん！」

「剣士君、少しは黙ったらどう？ 貴方は今の状況が理解できてるのかしら？」

「理解できてるから十分な説明を求めているところだろうが」

理解と納得は必ずしも同じとは限らない。

そもそも縄で縛られた位じゃオレの行動は制限できるはずもないのだが、唯一の出入り口に逆廻と黒ウサギという最終兵器が二つも仁王立ちされてたら逃げる気も失せるといふものだ。

「剣士君、貴方の返答次第では無傷で解放されるのよ。ならここは協力的に情報を交換するべきではないかしら？」

「こちらから提供できる情報はあっても、こっちは聞きたいことが一つも無いんだが……」

「小さな女の子が良く遊んでいる場所の情報はどうかしら？」

「いらん。というか何回も言わせてもらおうがオレはロリコンじゃない！」

何故、こんな誤解が広まったのやら……。皆目見当もつかないな。

「なら三毛猫の喋ってる内容。日常会話編」

「なんか三毛猫とはこう……。魂で通じてる気がするからいい」

「そんじや、黒ウサギのスリーサイズでどうだ」

「教えません!! どうか何で知ってるんですか!？」

「ハッ」

「鼻で笑われた!？」

そんな知つても役に立たなそうな情報など知つても無意味だ。

何処かの変態どもに情報を買えば高値で買うかもしれないが面倒くさいのでいいや。

「何だよ、お前ら結局たいした情報持ってないじゃん」

「剣士君にバカにされると無性に腹が立つわね……」

「やーい、バーカバーカ。脳なしー」

「春日部さん、その果物ナイフ取ってくれるかしら？」

「マジスイマセンでした。自分調子乗ってました」

「あら、謝るのが速いわね。……チツ」

「おい、仮にもお嬢様が舌打ちするんじゃないやありません」

「良いから早く言いなさい。でないと……春日部さん」

「ボッコボコにしてやんよ」

「分かった。分かったから顔面寸止めシャドーはやめようか」

ただの拳のはずなのに何故か前髪が揺れるほどの風圧を感じるよ。

オレは佇まいを正すと（縄で縛られてるのでそんなに変わらないが）ため息を一つつき説明する。

「いや、だってオレ行く必要ないじゃん。あの七光りのバカ息子倒すのぐらいは逆廻一人で十分だし久遠と春日部の力があればそこらへんの奴らなんて相手にならないだろ」

「おいおい、俺達が喧嘩を売るのはその坊ちゃんを含めたコミュニティ全員なんだぜ？ さすがに戦力がたんねえよ」

「黙れバトルジャンキー。そんな戦力差を覆すのが楽しいんだよ的な顔してるじゃん」

「ヤハハッ、当たり前だろそんなこと」

「もしかしたら方が一のことがあるかもしれないじゃない。何事も保険を打つとくべきだとは思わないかしら」

「だるい。だからヤダ」

「えい」

「おふっ!？」

可愛らしい声と共に放たれた殺気を帯びた春日部の拳は正確にオレの鳩尾へと入り、思わず変な声が出てしまった。

……………マジで痛い。というか苦しい。

オレは若干せき込みつつも逆廻の方を向く。

「つか逆廻。お前にはちゃんと話しただろうが」

「え？ お前あれマジで言ってたのか？ だったら少し引くぞ……」

「うるせえよ……」

「あら、十六夜君には教えたのに私達には教えてくれないのかしら？」
「こつちにも色々事情があったんだよ。察してくれ」

正直逆廻に引くとか言われからではないが、元々話すつもりはなかった。

ガルドがあんなになったのはレティシアが原因だったからなどといつらには話すことはないだろうな。

勿論レティシア自信を憎んだり恨んだりしている訳ではないが、悪いことをした奴には罰が必要と思っただけだ。

それにこいつ等がいれば絶対負けることがないから助けることもできるだろう。それならばオレは今回の一件に関しては極力関与しない、そう決めたのだ。

「……はあ。分かったわ、剣士君は今回のゲームは参加しなくてもいいわ」

「え？ マジで？ ラッキー」

「その代りゲームが終わるまで謹慎処分よ。それでもいいかしら？」
「もち、ろ……んん？」

「謹慎処分？ それってあの人に密室から一步も出るなど命令して自由を奪う、非人道的なあれ？」

「そんな、オレから自由を奪うなんて……。正気かお前らっ!!」

「正気よ。それとも貴方もゲームに参加する？」

「久遠が不敵な笑みを浮かべて問いかける。くそっ、挑発しやがって……っ！」

「オレは……オレは……っ!!」

□ ■ □ ■ □ □

「……………暇だ」

オレはベッドの上で体を投げ出して天井を見つめていた。

部屋を出たい。この狭い世界から抜け出して外の広い世界を気の向くままに歩きたいという衝動に駆られるが我慢する。

いつもなら本能の赴くままに行動するオレがこんなことをしている訳は至って単純で、あの後オレが此処に残ることに決めたからだ。

最初は一日位部屋でゆっくりするのもいいかもしれないと思っていたが、久遠の条件をのみ初めて嵌められたことに気付いた。

「ゲームが終わるまで」とは言っていたけど、ゲームが始まって終わるまで」とは言ってなかったもんね……」

久遠が言うには「明確なスタートを決めていないから今からでも問題ない」とのこと、もちろんオレもそれなら別に今からじゃなくても良いのではないかと反論したのだが、説明（武力）によってオレの意見は弾圧されてしまった。

チラリと扉の方を見ると二人の子供が城の衛兵よろしく手を後ろに組んだ状態で仁王立ちしている。

そう、これこそがオレが現在暇な原因である。

この子供たちはオレが部屋から逃げ出さないようにするためのいわば番人であり、ここに閉じ込めておくための枷でもあった。

何故そうなのかと言うと、これもまた久遠の汚い作戦——もとい策略で曰く、「ロリコンの剣士君には子供に暴力は振るわないでしょ」とのことだった。

……いやいや久遠よ。普通は子供に理由もなく暴力は振るわないから。それとロリコンじゃないから。

まあ、そういう訳で罪のない子供たちを押しつけてまで外に出ようとも思っていないのでこうして部屋にいるわけだが……暇すぎて死にそうだ。

「ひーまーだー。何か事件でも起こらないかなー。なるべく平和的なやつ」

「そう簡単に事件は起こりませんよ」

「リリちゃん」

オレの独り言に返事をしてくるとは……まあ、暇はつぶせそうだしいい話相手になるよな。

「でも数日も部屋に軟禁されてたら流石に暇にもなるよ。番人の子達も逆廻に何吹き込まれたか知らないけど遊んでくれないし……」

「十六夜様にですか？ 確かに剣士様とは何があっても遊び相手にならないようにと言われてますが、飛鳥様が皆にそう言ってたと思いませんが……」

「ああ、なるほどね……」

あの腹黒お嬢様め、帰ってきたら覚えてろよ。ぎったんぎったんのぼっこぼこにしてや——られるからやめておこう。

「そういえばリリちゃんは どうして此処に？」

行き場のない怒りをどうにか心の奥底にしまいこんでリリちゃんに問いかける。

すると「そうでした」と耳と尻尾をピンツと立てる。

「実は旧館の天井に大きな穴が開いてしまいました、私達だけでは危険ですので手伝ってもらいたいのですが……」

「旧館ってリリちゃん達が寝泊まりしてる所だよね？ 何でまた」

「えっと、実は屋根の補強のために作業をしたのですが思っていたより屋敷の老朽化が進んでいたみたいなんです。それで私達の重さ

に耐えられず……」

子供の重さに耐えられなかったって……建物として大丈夫かよ。

「それで、怪我したりとかは？」

「あ、はい。皆怪我はありません」

「そっか。それなら良かった」

安堵のため息と共にほっと胸をなでおろす。

しかしこれは結構重大な案件じゃないか？　今回は怪我がなくて済んだけど次もそうだとは限らないし、屋敷全体の耐久性もガタがきてると見たほうがいいかもしれない。

こういうのはジン君や黒ウサギに相談した方がいいけど、生憎二人と問題児三人衆は喧嘩の訪問販売に行っていない。どうするべきなんだ……。

「うーん……。建物とかだと一部分を別の物とすり替えるってのが難しいからなあ……」

「あの、剣士様？」

「よし、建て直すか」

「……………はい？」



「ああ……疲れた」

「だ、大丈夫ですか？」

現在オレは目に蒸しタオルをのせて旧館前の地面に寝転がっている。その傍らにリリちゃんやんが心配そうに座っている。

何故こんな事になっているのかと言うと、端的に言えば”解析眼”を酷使したからだ。

”解析眼”は使うことによつて対象物の様々な情報を把握し、脳に保存する代わりに長時間の使用、連続して使用すると目に激痛を伴う実に不便なギフトだ。今回は屋敷の構造を調べるために使用したのだが、別館とはいっても以外に広く全ての構造を把握するのに三十分かかった。

オレが痛みを感じない限界時間は十分なので、もちろんそんな長時間使うとそれなりの激痛が目を襲うわけで今に至るわけだ。

「あの、剣士様。別館の方はどういった状況なんですか?」

「あー……正直に話すと結構ヤバイ感じだな。今のままだと崩壊するところもあるし」

「そんなに危険な状態なんですか!」

「半分冗談だ」

「むう……」

はっ! リリちゃんが頬を膨らませてこちらを睨んでる可愛い光景がそこにある気がする! くっ……見れないのが凄く悔しい……っ!!

「剣士様、ふざけないでください」

「ごめんごめん。でも、あんまり状態が良くないのは確かだよ」

ゆっくりと状態を起こして蒸しタオルを取る。その時には既にリリちゃんが頬を膨らませてなかったのが心残りではあるが説明を続ける。

「屋根もなんだけど壁も柱もちよつと危険かな」

「そうですか……。うちのコミュニティはあんまりお金ないし……どうしよう」

暗い表情でうつむくりりちゃん。まあ、普通は建物ひとつ建て替えるってなったらそんな顔になるよねー。

オレはそんなりりちゃんの肩にポンと手を置いて穏やかな声で話し掛ける。

「リリちゃん」

「何ですか?」

パチンツ (指を鳴らす音)

「建て替え終わったよ」

「はい。……って、ええええええ!!」

目を限界まで開いて驚くりりちゃん。その際に尻尾が点に向かって真っすぐ伸びて毛が逆立っているのだが、これもこれで面白い。

もちろん理由だってわかっている。ついさっきまで目の前にあつ

たのはボロボロの木造の別館だったのに、いきなり屋敷と同じ（もしかしたらそれ以上に）位新しい白い壁でできた建物が目の間に現れれば大体驚く。驚かないのは問題児三人十ヤっさんくらいだろう。

「え？ 剣士様、これは……。え？」

「とりあえずリリちゃんは一度落ち着こうか」

ぐるぐると目と尻尾を回すリリちゃんの肩に手を置いて落ち着かせる。

数回深呼吸をしてリリちゃんが落ち着いたのを確認して、ゆっくりと状況を説明する。

「簡単に説明するけど、オレのもう一つギフトで空間から物質を生み出すギフトがあつてそれを使って今までの別館と同じ構造で新しい資材を使って作ったんだ。壁とかは屋敷の物を流用したから問題ないよ」

「え、でもそれなら消えるんじゃないんですか？ 前に貸してもらった台車はコミュニケーションに着くと勝手に消えたんですが……」

「大丈夫だよ。構造は元のままにして良い資材を使つてるけど記憶の中にある完璧なものだからギフトが残留して消えたりしないよ」

そこまでの説明で何となく理解したのか困惑の表情から歓喜の表情に変わっていった。

「ありがとうございます、剣士様!!」

そう言つて深く頭を下げるリリちゃん。よほど嬉しかったのか二本の尻尾が勢いよく左右に揺れている。

「いいって。今回は黒ウサギ達がいなかったから現場判断でしたっただし」

「でも屋根の修理だけではなく別館丸ごと改修してくれたのは本当に嬉しいですよー」

「そこまで喜んでもらえると、こっちも嬉しいよ」

そう言つてリリちゃんの頭を撫でる。本当はこんな面倒くさい作業は二度としたくないと思つたのだが、満面の笑みでこちらを見上げるリリちゃんを見ると偶にならやっつてやらなくもないか、と思つた。

この後はコミュニケーションの子供達全員で新しくなった別館の掃除、お

よび点検をした。

問題はなく、子供達もリリちゃんのよう喜んでくれていたので働いたかいがあつたな。子供たちの笑顔のために頑張りますっ！

14話 夜空に目標立てました

「それで、何か言い訳はあるかしら？ 剣士君」

「人々の笑顔のために働いて何が悪い」

現在オレは喧嘩の訪問販売から帰ってきた久遠達（逆廻は遠くからニヤニヤ）によって正座＋説教をさせられていた。

オレの言い分を聞いた久遠がため息をついて、呆れた目でこちらを見る。

何だよ、オレは間違った事は言っていないだろ？

「そう……。春日部さん、バトンタッチ」

「了解」

久遠と入れ替わりでオレの前に春日部が立つ。

数秒オレと視線を合わせると、ゆっくりと座り視線の高さを合わせる。

「剣士」

そう言つてそつとオレの両頬に手を添えて――

「謹慎破ったお仕置き」

「いっだいっだいっ！」

思いつきり頬を引つ張った。この痛さ……。全力ですね、春日部さん。千切れそうで凄く痛いです。

「春日部さん、もっと思いつきり引つ張ってもいいわよ」

「分かった」

「ちよ、ま——っ!？」

オレが制止する前にオレの頬を引つ張る手にさらに力が加わる。すると何という事でしょう、頬から痛覚が消えてきたではありませんか。

「……………あれ、これつてヤバいんじゃない？

「ま、まあまあ春日部さん。今回はリリ達からお願いだったわけだからこれくらいで……」

「……………ジンが言うならこれ位で勘弁しとく」

何故か不満そうな顔でオレの頬から手を放す春日部。おいおい、何

でそんな顔するんだよ。不満ならこっちの方があるのに。

「あー痛かった……。もうちよつと加減と言うものを覚えてくれませんかね、春日部さんよ」

「ごめん、それ無理」

驚くことなかれ、この間わずか一秒未満である。

「ヤハハ。にしても随分と大規模な修理だったようだな」

「修理と言うか別館全体を建て替えたからな、めっちゃ疲れた。一生分の仕事をしたぜ」

「お前のギフト使えばあの廃墟区元道理になるんじゃないやねえの？」

『……………あ』

逆廻の言葉にオレを除く全員がぼかんとした表情になる。いや、確かにできなくはないんだけど、やりたくないというのが本音だ。

だって別館丸々建て替えるのだって、まず骨組みを頭の中である程度組み立ててそこから壁や床、屋根とかを付け足して釘が必要な所にどれくらいの長さの釘を何本使うかをイメージする。そのあとに”解析眼”で見たことある使える物質の記憶を掘り起こして何処に使うかを決めて、それを生み出す場所の座標を決定する……体こそ動かさないが頭をかなり使うので面倒くさい。

しかし、逆廻の言うようにオレの”創造者”の力を使えば廃墟区の復元ができるというのはこのコミュニケーションにとって大きな進歩となる。

断りたいけど断れない、そんな微妙な気持ちでいると意外なところから援護射撃が入った。

「あの、それでは剣士様の負担が大きすぎると思います……」

そう遠慮がちに言うのはリリちゃんだ。

「廃墟区はとても広いですし、別館を建て替えた後の剣士様はとてもお疲れの様子だったので……。一人でやらせるのは少々酷かと思えます」

「リリちゃん……」

何だろう、悲しくないのに……久遠にもテンちゃんにも罵倒されないのに泣きそうだ。

リリちゃんの言葉に逆廻は少々面くらったような表情になるが、その次の瞬間には通常モードのニヤニヤした表情に戻る。

「心配すんな、半分冗談だ」

「じゃあ何処から何処までが本気なんだよ」

「ヤハハ」

「笑ってごまかすなよ。気になって夜眠れなくなっちゃうだろうが」

睡眠不足で肌が荒れたらどうするんだ。今まで気にしたこともないけど。

オレと逆廻がそんなやり取りをしていると、久遠が腰に手を当ててため息を吐いた。

「はあ……。とりあえず、謹慎を破った剣士君には罰則を与えます」

「せんせーい。罰ならさつき春日部さんから受けましたー」

「黙りなさい」

相変わらずの暴君っぷりですね。最近では久遠ってお嬢様じゃなくて独裁者だったんじゃないかって思うよ、割と本気で。

「今回謹慎を破った剣士君には泣き叫ぶほどの罰を……」

血も涙もない鬼というのは久遠の事だったのか。

「……と、思っていたのだけれど。事情が事情なので軽い罰にしておくわ」

「鬼とか思ってますみませんでした」

「そう。それじゃあ暫く私たちの奴隷としてしっかり働いてもらうわね」

「返せ！ オレの謝罪の言葉と良心を返せ！」

「じゃ、一日交代な。順番はどうする？」

「じゃんけんで決める？」

「逆廻、春日部。人権って知ってるか？」

「二ジャンケン、ポン」

「話をきつけえええええええ!!」

オレの叫び声が屋敷中にむなしく響いた。



「えー、それでは！ 新たな同士を迎えた”ノーネーム”の歓迎会を始めます！」

黒ウサギの音頭の後には子供達の歓声がワツと上がる。しかし、オレは力なく「イエーイ……」と言うのが精一杯で一人だけ疲れ切っていた。

あの日から三日、オレは逆廻、久遠の世話をしていた。それはもう地獄のような毎日で、初日の逆廻の時は屋敷の地下にある書庫に籠って文献を読み漁る逆廻の所に食事を持っていったり、頼まれた本を数十冊単位で運搬したり、座り心地の良い椅子を出せなどの命令を忠実にこなした。

二日目の久遠の時は久遠の要望で朝起き時から夜寝るまで従者をやれと言われた。奴隷じゃなくて良かったと思っていたのだが、ここでも久遠の暴君ぶりが発揮されてやれ紅茶を淹れろだのやれ退屈だから面白い話をしろだの結構な無茶ぶりをさせられた。

しかし、幸か不幸か二人からの評判はあまりよくなり「もういいや。飽きた」と言われて解雇処分となった。その時オレは喜ぶべきか凄く悩んだ。

……え？ 一人足りないだつて？ いやいや、そんなことないですつて。だって今日は三日目ですよ？ だからつまり――

「剣士」

「……何でしょう、春日部様」

今日は一日春日部の奴隷なので何の間違いもないです。はい。疲れ切った体に鞭打って春日部のもとへと歩み寄る。

「歓迎会は楽しい？」

「唐突だな……。でもまあ、春日部のおかげで今日一日歓迎会のようなものだったからな。それなりに楽しんでるよ」

「そう。それは良かった」

そう言って手に持っているコップに口をつける。

今は夜で満点の星空の下で皆でわいわい食事をしているが、その前、午前中は春日部の命令で『前に約束したから、皆で遊ぼう』とな

り”ノーネーム”の子供達と久遠、逆廻。そしてジン君と黒ウサギ、新しく(?)”ノーネーム”のメイドになったレティシアを交えて敷地を大きく使った鬼ごっこなどの遊びを開催したので、実際一日歓迎会の様なものだった。

因みにレティシアの所有権は一：二・五：二・五：四となっており、オレは一だ。別にいらなかったのだが、仲間外れは淋しいので一応権利は持つておこうという考えだ。

今日一日のことを思い出していると近くにいた久遠が疑問顔で尋ねてきた。

「けどどうして屋外の歓迎会なのかしら？」

「うん。私も思った」

久遠の言葉に賛同する春日部。しかし、そこまで疑問に思うことがあるだろうか？

確かに屋敷にはこれだけの人数が入れる部屋があるので絶対に外でないとできないという訳でもない。実際どこでやっても同じだと思っている。

「黒ウサギなりに精一杯のサプライズってところじゃねえか？」

逆廻が肩を竦めながら言う。その言葉にオレ達は思わず苦笑してしまう。

何故なら”ノーネーム”の財政問題はかなり深刻で仮に今日歓迎会を開かなくても後数日でお金が底をつきそうだという。

百二十人＋αの生活費を考えると一日でもかなりのお金が消費される事になるし、こういったお腹いっぱい食べられるとなるとその倍かかると考えられる。それを知っているからこそ苦笑が漏れてしまう。

「無理しなくたっていいって言ったのに……馬鹿な子ね」

「そうだね」

春日部と久遠が顔を見合わせてそう言う。……『馬鹿な子』の部分でちらりとこちらを見たのはきつと気のせいだろう。

「それでは本日の大イベントが始まります！ みなさん、箱庭の天幕に注目してください！」

黒ウサギの一言でコミュニティの全員が空を仰ぎ見る。

黒い夜空に煌めく様に輝く無数の星が幻想的な光景を作っている。それはまるで苦しい状況ながらも一人一人が懸命に生きている”ノーネーム”そのものに思えた。

「……あつ」

誰かがそう小さく声を漏らした。

そしてそれを皮切りに無数の星が光の尾を引いて流れていく。それが流星群だという事に理解するのにそんなに時間はかからなかった。

嬉々としてはしゃぐ子供達に聞かせるような穏やかな口調で黒ウサギが語りだす。

「この流星群を起こしたのは他でもありません。我々の新たな同士、異世界からの四人がこの流星群のきっかけを作ったのです」

「え？」

黒ウサギの言葉に俺達は驚きの声を上げてしまった。しかし、黒ウサギは気にせずと同じ口調で言葉を続ける。

「……………そこからの話は難しかったので割愛させてもらおう。難しい話は苦手なんだ。」

「剣士」

「ん？ どうした」

クイクイとブレザーの袖を引っ張って春日部がオレを呼ぶ。どうしたのかと思つて春日部を見ると、無言である一点を指差していた。

その方向に視線を移すと逆廻と黒ウサギが良い雰囲気です星が流れる夜空を見上げていた。

「二人とも、良い雰囲気」

「そうみたいだな。……からかつてやろうか？」

「私もそう思うけど、人の恋路を邪魔すると馬に蹴られるからやめといた方がいいよ」

「だな。正直疲れたし今日はそつとしておいてやるか」

そう言つてオレはその場に腰を下ろした。春日部もそのすぐ隣に膝を抱えて座る。

「……綺麗だな」

「……うん」

星空を見上げながらそう呟く。

オレの元いた世界では町の光などのせいで中々綺麗な星が見れなかったもので、こんな満天星を眺めるのは初めてなのだが悪くないな。

「……なあ、春日部」

「何？」

「お前は何か目標とかあるか？」

「目標……」

そう言つて暫く考えるそぶりを見せた後に、「一つだけなら……」と呟く。

「私の目標はもつといっぱいこの世界で友達を作ること。動物だけじゃなくて今回は色んな人とも友達になる、それが私の目標」

春日部の強い意志の籠った言葉に一瞬呆気にとられるが、春日部らしいと思ひ微笑む。……訂正、ヘラツとした笑いを零す。

「……そうか。頑張れよ」

「剣士は？ 何か目標あるの？」

「オレ？ そうだな……」

春日部に言われて考える。オレがこの世界に来たのは『人間』になるためなのだが、それはこの箱庭に来て……”ノーネーム”という場所に来て達成されたようなもので別の目標を立てることにする。

頭の中でこの世界に来てからの日々が鮮明に蘇る。久遠に罵倒され、久遠に馬鹿にされ、テンちゃんに罵倒され……。あれ？ オレ罵倒しかされてない？

箱庭に来てからの悲しい事実には少しブルーになるが、そのおかげで目標が定まった。

「皆を笑顔にする事……かな」

「笑顔に……？」

隣りで首を傾げる春日部。オレは地につけていた右手を空にかざして言葉を続ける。

「コミュニケーションの仲間はもちろん。他にもヤっさんやテンちゃん、オ

レの知り合いを全員笑顔にすることが今のオレの目標」

「剣士……」

指の間から見える流星群はまるで掴もうとしても掴めない、そんな儚さを感じる。

だが、それでも頑張ればいつかは掴める。そんな根拠のない確信と共に星を掴むようにその手を閉じる。

「なんかそのセリフくさい」

「せっかくの感動のシーンが台無しだなおい」

春日部の容赦のない言葉に泣きそうになる。ほんと、箱庭の唯一の癒しはリリちゃんだな。

「でも………」

そう言っただけで今まで見たことがない穏やかな微笑みはその顔に浮かべてオレを見る。

「すごく、良い目標だと私は思うよ」

「……そうか」

春日部に言われて急に照れくさくなって誤魔化す様に頬をポリポリと掻く。

……絶対には叶えてみせる。

そう心に決めて再び星空を見上げる。

やっぱり、箱庭の星空は綺麗だった。

番外編01話 箱庭のとある日常く freedom

side)

「あー、今日もいい天気だなあ……」

「そうですねえ……」

現在オレはリリちゃんを始めとする年長組の子供達と芝生の上に寝転がりながら日光浴をしていた。

何故こんな事をしているのかと言うと、逆廻達が黒ウサギの依頼で魍の討伐に向かったのだがオレは久遠から戦力外通告を渡され干ばつ時の備えなどの準備を手伝っていた。

しかし、あの問題児たちは予想を裏切らず魍を討伐して帰って来た。そのため干ばつのために準備していたのが全て無駄になりやることもないのでこうしているという訳だ。

にしてもこんなにくっくりできるの何日ぶりだろうか。

最近はコミュニケーションの財政アップ(個人的に)のためにやつさんに割のいいギフトゲームを紹介してもらったり、町で行われている小規模なゲームにも積極的に参加していたので中々ゆつくりする時間が取れなかった。なのでこんな時間がとても心地よく感じる。

「剣士様剣士様」

「ん、何?」

名前を呼ばれて振り返ると年長組の黒髪に丸い狸耳(?)を生やした少女、名前は……確かシホちゃんだったかな? が俯せのまま顔だけこちらに向けていた。

「今、私達暇ですよ?」

「そうだね。どこの馬鹿共がやらかしてくれたおかげで今日一日分の仕事はほぼ終わってるから暇だね」

そう言うシホちゃんは苦笑を浮かべる。

「そこで提案があるのですが……どうでしょう?」

「ほう、提案が……」

「はい。でも内容はまだ言いません。のるかそるか先に返事を聞かせ

てくれませんか？」

そう言つてにやりと笑うシホちゃん。成程、この子中々できるな。提案の内容を伏せておくことによつて興味をひかせ、内容が面白いかどうか以前に言質をとる作戦か……。この箱庭では元居た世界とは違ったベクトルで面白い事が多く存在するのでシホちゃんの提案が一概に面白くなさそうと否定もできない。

この箱庭とオレの事を理解したうえでこの提案……。本当にこの子は十歳なのか？

左右を見ると他の子供達が期待したような目でこちらを見ていた。恐らくこの提案はここにいる子供達が関わっている、悪く言えばグルだという事が窺える。

……。ならばここは一つ提案に乗つてやるとしよう。

「分かった、その提案にのつてあげるよ」

「流石剣士様、そう言つてくれると思つてました！」

満面の笑みで喜ぶシホちゃん。他の子たちも起き上がつて「やったー」と喜んでいる子もいれば喜びのあまりオレに抱き着いてくる子もいた。

「それで？ その提案つて言うのはどういうものなの？」

体を起こして抱き着いてきた子供の頭を撫でながらシホちゃんに聞くと、シホちゃんは悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「ふっふっふー、それはですねえ……」

「それは……？」

「それはー——お菓子パーティーですっ!!」

「……………はい？」



「それでは今からお菓子パーティーの準備を始めます」

「リリちゃん、ちよつと待つて」

屋敷の厨房に移動したオレは未だに状況が呑み込めていないでいた。

この企画の料理長であると思われるリリちゃんはオレのいきなりのストップに首を傾げる。その仕草は可愛かったが今は状況の説明の方が優先だ。

「何個か質問があるんだけどいいかな？」

「あ、はい。何でしょう？」

「お菓子パーティーって何するの？」

「読んで字の通りです。皆でお菓子をたくさん作って皆で食べるパーティーです」

ニコニコと笑うリリちゃん。確かにそれは楽しそうだ。

「でも、材料はどうするの？ あんまり蓄えないんじゃないの？」

「その点は大丈夫ですよ」

シホちゃんがウインクしながら言う。

「最近は剣士様達のおかげで食料もお金もほんの少しずつだけ増えてきました。それには本当に感謝しています」

ペこりと頭を下げるシホちゃん。しかし顔を上げると少し困ったような顔で笑う。

「だけど食料はずっと放っておくと食べれなくなってしまいます。なのでそういう食べられなくなる一歩手前の物を一気に使ってしまうので勿体ないですが問題はありません」

成程、確かに食料が充実してきたといっても生ものもあるわけだし痛む食料も出てくる。それならそういう物は一気に使ってしまうのが良いな。

「今回はお菓子に使えそうな物ばかりだったのでお菓子を作る事にしました。それに白夜叉様から、先日売れ残った食材を分けていただいたので材料はたくさんあります」

そういうリリちゃんが指さす台の上には小麦粉や果物などが山積みになっていた。

「ヤっさん……………超グツジョブ!!」

「成程理解できたよ。それで、オレは何をすれば？」

「剣士様にはお菓子作りのお手伝いをしてもらいたいです」

「本当はこんな事は剣士様達に頼む事では無いんですが、一緒に料理

をしてもつと仲良くなれたらいいなーって皆で話してたんす」

「リリちゃん……シホちゃん……」

えへへと照れたように笑う二人を見てオレは不覚にも泣きそうになってしまった。

”ノーネーム”の子供達がオレと仲良くなりたいと思ってくれていたという事もあるが、それ以上にオレと積極的に関わろうとされるという事に涙が出そうになった。

元居た世界でオレは世界から嫌われていた。誰もがオレを恐れ、嫌い、殺そうとした。そんな世界で生きてきたオレには”アイツ”以外関わった人間が居なかった。

そんな事を知らないし、オレの全てを知らないとは分かっているも、俺にはとても嬉しい言葉だった。

「二人とも、ありがとう」

そう言って泣きそうになったのを誤魔化すために二人の頭を優しく撫でる。

優しく、大切な物を触るように……再び見つけた大切な物を壊さないように……。

「さあ、早くお菓子作って皆で食べようか!」

「はいっ!!」

元気よく返事をした二人と共にお菓子作りを開始した。

「なあなあ、剣士さん」

「ん? どうしたんだ?」

「ケーキのスポンジってこれ位混ぜればいいかな?」

「うーん……。もうちよつとだまがなくなる様に混ぜた方がいいな」

「そっか。ありがとうございませす」

「おう、頑張れよー」

片眼が前髪で隠れている少年、ジョン君とオレでケーキを作っているのだが如何せんお菓子作りなど初めてなので期待半分不安半分だった。

ジョン君も料理の経験が少ないのかたどたどしい手つきでスポン

ジの生地を混ぜている。

オレはそんなジョン君を見て苦笑を漏らしながら手元にある生クリームを混ぜていく。

「角が立つまでって言われたけどまだかなあ……」

カシャカシャというアルミが擦れあう音が聞こえる。力加減が未だによくわかっていないので中々一定のリズムでかき混ぜられない事に少し苛立ちを覚える。

一度手を止めてチラリと後ろを見るとリリちゃんとシホちゃんが心配そうにこちらをチラチラと見ている。

さて、こうなつた経緯を話すと、お菓子を作り始めた時間帯がちょうどお昼近くだったので、料理ができる年長組は問題児達の昼食の支度のため一度お菓子作りから離脱。筍を使った料理を作り始める。

しかし、問題に気づいたのはそれからすぐ後だった。

お菓子班に残った年長組の殆どが料理経験のない子供達ばかりだった。

レシピなどはリリちゃん達から渡されているので作り方に問題はないが、その過程に大きな問題があった。

ある物は包丁で指を切り、あるものは生地が入ったボウルをひっくり返してしまうなど昼食班の背後は地獄絵図となりつつあった。

人生初のお菓子作りは前途多難な作業でした（笑）

それら十分後、お菓子班の面々はようやく慣れてきたのかしつかりとした手つきで作業を進めていく。子供は覚えが早いなあ、と感心しつつ先程ジョン君が作っていた生地を焼いた物に生クリームを塗っていく。うーん、意外と均等に塗るのは難しいな……。

中々上手くいかずにため息を漏らしていると隣からクスクスと可愛らしい笑い声が聞こえてきた。リリちゃんだ。

「難しいですか？ 剣士様」

「ああ、お手上げだよ。塗るだけだから簡単だと考えてたオレが甘かった」

「ふふっ。食事の用意ができてますが……続けますか？」

「当たり前前だ。ここまでやって止められないよ」

「そうですね。……って剣士様、頬に生クリームがついてますよ」

「え？ どこに？」

リリちゃんに言われて頬を触るが中々生クリームが手につかない。

「ちよつと屈んでください」

それを見かねたりりちゃんはオレを屈ませてオレの顔に手を伸ばしてそつと何かを救う動作をする。

「はい、取れましたよ」

「ありがとうございます」

人差し指についている生クリームを見せて笑うリリちゃんの頭を撫でる。パタパタと二尾を振っているリリちゃんをこれまでもたくさん見てきたが相変わらず可愛い。

「飛鳥様の食事の用意が終わったら手伝いますのでそれまで頑張ってください」

「自身は無いけど任せとけ」

そう言っただけは回れ右をして今もお菓子作りに奮闘しているお菓子班の面々と向かいあう。

「皆、一度手を止めて聞いてくれ」

オレの声を聞いたお菓子班の子供達が手を止めてこちらに注目する。

全員が注目しているのを確認して拳を握って言い放つ。

「これより模擬ギフトゲームの開催を宣言する！」

「『模擬ギフトゲーム？』」

オレの言葉に首を傾げる子供達。まあ、いきなりこんな事言われたらそうなるわな。

「剣士さん、それって何？」

ジョン君が手を挙げて聞いてくる。こんなふうにして聞くあたり子供っぽいな。

「模擬ギフトゲームは名前の通りギフトゲームの模擬戦みたいなものをするんだ。簡単に言えばギフトゲームのマネだけだね」

簡単な説明で理解したのか「面白そう」「ギフトゲームだあ」とはしゃぎ始める。

「それじゃ、今からルールの説明な。まず今作ってるお菓子とは別にもう一品二人、もしくは三人でお菓子を作る。そして一番上手にできたところの勝ちだ」

この勝負にギフトは使わない。名前こそ模擬ギフトゲームだが、子供達の中にはギフトを持たない子もいる。それでは不公平になるので、今回は『協力』に重点を置いた勝負にする。ギフトを使うだけが勝負じゃない、チームワークや知力、身体能力なども必要だ。だから今回はあえて『模擬』なのだ。

「勝ち負けは誰が決めるんですか？」

「勝敗はここにいる全員と料理班の皆、後は逆廻達だな。こういう審判は味覚の違いとかあるから多いほどいい」

だが春日部には気をつけねば。もしかしたらお菓子を全て食いかねん。

「皆理解できたか？ そんなじゃ、ゲーム——」

「ちよつと待ってください剣士様」

「んあ？」

ゲームを始めようとしたところでリリちゃんの思わぬ制止が入り思わず行き場のなくなつた気合のせいで変な声が出てしまった。

そんなオレが可笑しかったのかクスクスと笑いながらリリちゃんと言う。

「剣士様、『模擬』とはいえギフトゲームですよ？ なら一つ足りない物がありますよ」

「え、足りない物……？」

足りない物……何だろう、全然見当がつかない。

オレがギフトゲームに参加するときには参加してギアスロール確認してゲームして勝って貰うもん貰って……。何が足りないんだ！？

頭をフル回転させても出てこない答えに悩んでいると「時間切れです」とリリちゃんが告げた。これはいつの間に時間制限が付いたのだろうか。

「剣士様、足りないのは賞品ですよ」

「……………ああ、納得」

この箱庭に来てから結構ギフトゲームに参加はしているが全戦全胜して感覚が狂っていたのかゲームの賞品を参加賞みたいな感覚で貰ってたわ。剣士、反省♪

馬鹿みたいな事を頭の中で繰り広げ気持ち悪くなるという自爆をかましつつもリリちゃんに言われた事を考える。

「賞品かぁ……どんなのがいいんだ？」

正直オレの”創造者”のギフトを使えば大抵なんでも造れる。だからこそ何を賞品にするべきか悩むな……。

今日はすごく頭を悩ませる日だなと下らない事を頭の片隅で思いながら賞品を考える。チラリと子供達の様子を窺うと期待の眼差しでこちらを凝視していた。何このプレッシャー、凄く怖い。

「何が……何が望みなんだ、お前らは……!!」

まるでドラマのワンシーンのように言うオレ。しかし特に何の反応もされずリリちゃんが穏やかな口調でオレに言う。

「簡単な事ですよ。私達は剣士様と仲良くなりたいたいのです」

「リリちゃん……」

そうか、確かに簡単な事だな。もしリリちゃんが言っていることが正しいならばそれはオレの”創造者”では造れない、でもオレから与えることができる事だ。

オレは短く息を吐いていつもの笑いを浮かべて子供達と向かい合う。

「このギフトゲームで優勝したチームは賞品として……オレを一日自由にする権利を与える！」

「自由にする権利？」

「ああ、そうだ。端的に言えばオレを一日好きにしている権利だ。こき使うのもよし、オレと遊ぶのもよし、オレを一日奴隷にしてもよしという事だ！」

「……やったー!!」

一気に沸き立つ子供達。厨房に一気に活力が溢れかえる。

「その意気やよし！ それではゲームスタート！」

オレの合図でそれぞれチームを作って素早く作業に取り掛かる。

仲間はずれが居ないところが”ノーネーム”の団結力というか硬い
絆みたいなのを感じられる。

「これで良かったみたいだな……」

「そうですね。私はちよつと違う賞品を想像してましたけど……素晴
らしい賞品ですね。私も参加したくなってきました」

「ん？ 別に参加してきて良いよ？ 久遠の飯はオレが運んどくか
ら」

するとリリちゃんは「だ、駄目です！」と両手と二尾を振る。

「皆様のお世話は私達の仕事なんですから、剣士様はしなくてもいい
ですー！」

「……………はあ」

「ため息をつかれました!？」

「あのね、リリちゃん」

さつきまでとは違う少し真面目なトーンで話す。急に真面目な声
になったのがびっくりしたのかりりちゃんの姿勢がきをつけの状態
になる。

「いくらリリちゃん達がオレ達のお世話係だつて言ってもリリちゃん
達はまだ子供なんだから」

「こ、子供じゃないです！ 私はもう十歳です！」

「オレからすれば子供なの。そして子供は年上の人に頼って甘えて良
いんだから、もつとオレや黒ウサギ。逆廻達に頼ってもいいんだよ」

「あう…………」

何か言い返したそうに口をパクパクと動かすが、結局何も言えずに
俯いてしまった。

そして上目使いで躊躇いがちに聞いてくる。

「あの……本当に良いんですか？ 剣士様に頼つても……」

多分リリちゃんは慣れてないんだろう。根っからしつかりしてい
るし年長組のリーダーとして皆を、コミュニティを支えていた反動な
のか誰かに頼るとか甘えるとかそういうのに不慣れなんだろう。

「ああ、もちろんさ」

ならば少しずつでもそうさせれば良い。”ノーネーム”の子供達

が子供らしくふるまえるようなコミュニケーションをオレ達で作るんだ。

「……ありがとうございます！」

子供らしく無邪気に笑うリリちゃん。オレがあ流星群の空に立てた目標に一步だけ近づいた気がした。

その後リリちゃんはシホちゃんとチームを組んでクツキーを作つて優勝した。その際にシホちゃんがこちらを見て凄く悪いな笑みを浮かべていたのが怖かったです。

番外編02話 金髪ロリと自由人

いつもと変わらない朝、オレはいつもの様に――

「Zzzz……」

しっかりと惰眠をむさぼっていた。スイミンハダイジ、コレジョウシキ。

きつと今日も快晴なのだろう、朝によく聞く鳥のさえずりが心地よい。あまりの心地よさに唯一起きている脳も活動を休止して寝てしましそうだ。

しかし、それは叶わずコンコンと部屋の扉を控えめにノックする音で休止しかけていた脳を再起動させる。

『主殿、起きていますか?』

凜としたロリボイスが聞こえる。

ロリボイスなのに凜としている声とはこれいかに、と少し疑問に思うが本当にそう感じるのだから仕方ない。というか考えるのが面倒くさい。

「ふあいふえまふよ……」

”聞いてますよ”と言おうとしたらあくびが出てまったく別の言語になってしまった。寝起きはダメだな、上手く体と頭が機能しない。

これを久遠に言うところ「いつもの事じゃない」と言われそうだなと考えていると、失礼すると声を掛けられてドアが開く。

「おはよう主殿。相変わらず朝には弱いようだな」

そうやって悪態をつくのは驚くほど綺麗な金髪の髪に大きなリボンが特徴のメイド。先の対”ペルセウス”戦で取り戻した仲間、レティシアだ。

かなり幼い外見とは裏腹にとっても落ち着いた思慮深い雰囲気を出している。逆廻達から聞いた話によると見た目は幼くても中身は三桁いつているとかいないとか……。ようするにロリババ――

「……随分と失礼な事を考えていないか?」

「……いえ、そんな事はございません」

どうやらレティシアも人の心が読めるらしい。これでこの世界に来て三人目だ、読心術のギフトでも流行してるのかよ。

「まあいい。主殿、朝食を持ってきた。リリが今日はかなり美味しくできたと言っていたが……食べるだろう?」

「もちろん。どんな状況でも朝食は食べとかないと一日の活動に支障をきたすからな」

「ふふっ、そうだな。ではすぐ準備しよう」

そう言っつて部屋の外から朝食の載ったカートを部屋に入れると、部屋の中に良い匂いが広がり食欲を刺激された。

因みに何故朝食をこのようにしてとっているのかと言うと、少し前に春日部がオレの朝食を強奪した事とそれが数回にわたって行われた事、それにオレ達四人の起床時間違いなどのために子供達がローテーション(と言う名のじゃんけん)で朝食を運ぶようになったのだ。

……これは余談だが、朝食を持っていく係の子供達の中で一番逆廻りが人気があるらしい。毎回そこだけ当番争いが起きるらしいが、当の本人は地下書庫などに籠っているため部屋にいないことが多いのだが……。

え? オレはどうなのかって? オレの所にはリリちゃん、シホちゃん、ジョン君の三人が来てるよ。極稀に他の子が来てくれるけど……別に人気がなくて寂しいわけじゃないよ?

そう考えるとレティシアが来たのは珍しいな。

「主殿、何かおかしな所でもあるのか?」

「ん? ああ、ごめん」

無意識にレティシアを見ていたようで少し照れたように言われる。別におかしな所は無いのですが気になる事はありますよ、面倒くさいから聞かないけど。

それからもぼーっとしてるといつの間にか準備が終わっていた。

「流石メイド長。準備が早いっすね」

「そうでもないさ。それにメイド長と言ってもただ一番年上なだけだからその呼び方はやめてくれ」

「そうか。ならレティシアはあさんと——」

「そういえばナイフを用意するのを忘れていたな。ちよつと待っててくれ」

「マジすんませんした。以後気をつけますんでナイフだけは勘弁してください」

腰を九十度に折った綺麗な土下座を披露する。ふつ、まさか対お嬢様に研究してきた奥義をレティシアに使ってしまうとはな……。レティシアは久遠とは違うベクトルで恐ろしい。流石元・魔王、威圧感がケタ違いだぜ！

因みに今日の朝食は和食のためナイフなど必要なかつたという事をここに捕捉しておこう。

「朝から土下座するはめになるとは思わなかつたよレティシアさん」

「私も朝からあんな見事な土下座を見るとは思わなかつたさ」

レティシアは食べ終わった皿が載ったカートを押しながら呆れたようにため息を吐く。まるでオレが悪いみたいな言い方だが、レティシアがナイフを取り出さなければ土下座することもなかつたんだが……。まあいいか。生きてるだけでも良しとしよう。

「しかし主殿、寝る時位は別の服に着替えたらどうだ。シャツがシワになつているぞ」

「ああ、これね……」

今のオレの恰好はいつも着ているブレザーは絶賛洗濯中なのでカッターシャツの中に黒いTシャツ、学校指定のズボンという軽装備のうち、昨夜は過度の疲労で着替えるのが面倒くさいということそのまま寝てしまったのでシャツにシワがよつて大変だらしない恰好となつている。

ま、オレは別に気にしないんだけどな。今は無き中学の制服はほぼ一年中着てたまでである。他の服と金がなかつたから。

「今から湯殿の準備をするから軽く汚れを落としておくといい。今のままだったら飛鳥に怒られるぞ」

「確かに……」

あのお嬢様の事だ、きつと「随分とだらしない恰好ね。貴方はいつ

もヘラヘラ笑って顔に締まりがないのだから服装位しつかりしなさい」と言うだろう。しかも呆れた表情とため息をセットで。

わあ、久遠のようなきつい性格が好みの人にとってはなんてお買い得なんだ。ぜひとも欲しいという方は今すぐ天野剣士までご連絡ください、すぐにでもご用意いたします！

「……命が惜しかったら今考えたことを絶対に飛鳥の前で口にしない事だな」

「……肝に銘じておきます」

オレもそう思っていました。てか何で思っている事が分かるんですかね？ やっぱりそういうギフトがあるの？ もしあるんなら是非とも欲しいんだけど。

今度やつさんにそういうギフトがあるか聞いてこようと思いつつ、厨房の前でレティシアと別れる。別れ際に部屋に居ると半分命令口調で言われたので大人しく部屋に戻る……わけもなく、日光浴をするために外へ出る。

「眩しい……」

外に出た瞬間眩しいほど輝く太陽の光に思わず目を細める。

爽やかな風が頬を撫で、草木を揺らす。微かに聞こえる草木が揺れる音は先ほどまでの睡眠欲を再び呼び起こす。

しかし寝るにしても玄関先で眠るといっなのはいささか不信だろう、という事でどこか気持ちよく眠れそうな場所を求めて歩き出す。どうかこのまま平和な時間が続きますように……。

「あら、剣士君じゃない」

「神よアンタはオレが嫌いか？ 安心しろ、オレもお前が嫌いだ」

「何よ会うなりそんな悲痛そうな顔して……。ちよつと失礼ではないかしら？」

少し怒ったような表情でオレを睨む久遠。だが久遠よ、平和な時間を打ち壊す確率が高い問題児三人組の一角を担っているお前を見た瞬間こんな顔になるのは仕方のない事なんだ……っ！

オレがメンゴ！ と反省の色を一ミリも見せずに謝ると腰に手を当てて怒気のはらんだため息を零す。

「貴方ね、少しは悪びれたらどうなの——って、何よそのだらしない格好は」

「あーあ、やっぱり言われましたよ。畜生、レティシアの言う事素直に聞いておけば良かった……」

「これから来るであろう久遠の罵倒に耐えるために心を閉ざして話を右から左へ聞き流す態勢に入る。」

「……あれ？」

「が、いつまでたつても久遠の口からはオレを罵る言葉は出てこなかった。」

「恐る恐る久遠の様子を窺うとさっきまでの怒ったような表情は何処へいったのか、まるでオレを労わるかの様な妙に優しい顔をしていた。」

「……ドユコト？」

「そう……着替える前に寝てしまう程疲れていたのね。ごめんなさい、気が付かなかったわ」

「え？　は？」

「未だに久遠の変わりように頭の処理が追い付かず混乱するオレをよそに久遠は言葉を続ける。」

「貴方がコミュニケーションのために尽くしてくれている事は聞いているわ。今までそんな風には見えなかったけれど……今の貴方を見て納得したわ」

「おい待て、誰がそんな事言っているんだ」

「今日はゆっくり休みなさい。もし黒ウサギに何か言われても私から説明しておくから安心して頂戴」

「スルーするなよ」

「それじゃ私は邪魔しないうちに部屋に戻るわね」

「だからスルーすんなよ」

「オレのツツコミを完全にスルーして屋敷へ入っていく。今のオレにはその背中をただ見つめることしかできなかった。」

「……なんなんだ、いったい」

「たった少しの会話でただの一回も会話のキャッチボールがなされ

ず、かつ誰から聞いたかわからないオレの謎の功績を久遠が労つてくれたという超展開。きつと多くの人は今のオレの気持ちを分かってくれよう。

暫く呆然と立ち尽くした後、本来の目的を思い出して眠れそうな場所を求めて歩き出す。

□ ■ □ ■ □

「どこだ、ここは……」

見渡す限りの白に包まれた場所。

前にヤっさんが用意した雪原のような雪の白さではなく、遠近感も狂うような何もなかった白い空間。現に今オレが立っている場所にも地面があるのか無いのか見るだけでは判断できない。と言うか立っている感覚があるだけでどっちが本当にオレが立っているのか疑わしい。

「おつかしいなあ、”ノーネーム”の敷地から出た覚えはないんだけど……」

腕を組んで今までの行動を振り返るが思い当る節は無く、ただ物置小屋の中で眠りについたという事しか思い出せない——って、そうだよ。オレ寝てたんじゃん！

「てことは此処は夢の中か。ならこの変な空間の説明もつくな」

夢だから何でもアリだよ！ と思ったが夢の中なのに何も無い場所はどうしろと言うんだよ。せめて登場人物を増やしてほしいです。はい。

「剣士、何変な顔をしてるの？」

「人の夢に勝手に出演しておいて第一声がそれかよ、春日部」

いきなり声を掛けられたと思ったら春日部がいつもの無表情でオレの後ろに立っていた。

いや、確かに登場人物を増やしてほしいとは言いましたがもうちょっと心が和むような人にして欲しかったな。

「あら、でも事実だから仕方ないじゃない」

「そこはお嬢様に同意だな。御チビ、お前は どう思う?」

「え!?!」

「十六夜さん! ジン坊ちゃんを困らせないでください!」

「落ち着け黒ウサギ。主殿もあまりジンで遊ぶな」

ため息をついて周りを見やるといつの間にか人影が増えている事に気が付く。しかもこの世界に着てから見知った顔ばかりだし……。そんな辛気臭い顔をしないでください、いつもより数倍鬱陶しくなってますよ」

「テンちゃん、君は夢の中でも平常運転で心をえぐってくるね」

「ククク、おんしは心をえぐられてもすぐに元に戻るといいうのによく言うわ」

「凄いナチュラルに勘違いしてるけどオレ別に不屈の精神を持つてるわけじゃないからね?」

寧ろ欲しいままである。理由? そんなの言う訳ないだろ。まあ、あえてヒントを出すなら久遠とテンちゃんの進化と言っておこうか。

「二「剣士様(さん)!!」二」

「リリちゃん! それにシホちゃんやジョン君まで……どうして此処に?」

夢の中だから何でもアリだと思っではいるのだが、「ただ白いだけの世界に知り合いが全員集合しました」なんて流石にこれがどんな夢なのか分からなくなってくる。

オレを囲むようにして皆が笑いながら(数名は苦笑しながら)オレを見る。

不意に世界が変化する。

皆の背後の世界が黒く染まる。皆が囲んでくれている場所だけが変わらず白かった。

黒い世界に一人の少女が立っていた。白い世界に皆が立っている。少女は悲しそうな顔をしてこちらを見ていた。白い世界では皆が笑ってこちらを見ていた。

オレは黒い世界に佇む少女に手を伸ばした。だけど足が動かない。白い世界から出られない。黒い世界に行けない。

少女の悲しそうな顔を笑顔に変えたくても足が動かない。

この白い世界から抜け出したら戻ってこれなさそう。この白い世界を壊したくなくて。

オレは伸ばした手を下ろした。

「主殿、起きてくれ。主殿」

体が優しく揺さぶられる感覚に目が覚める。

「ん……」

ゆつくりと目を開けると視界がぼやけているがレティシアの姿を捉えた。

目を覚ましたのを確認すると腰に手を当ててため息を吐いた。

「部屋に居ると言っただけだが……どうしてこんな所で寝ているのだ？」

「眠たかったのと、反抗期がなせる業だな」

ふざけてそう言う後半眼で睨まれました（笑）

地面に寝かせていた上体を起こして軽く伸びをして体をほぐす。

あれからどれくらい眠っていたのかは分からないが大分疲れが取れていた。流石睡眠、その時間が長ければ長いほどその効果は絶大な。

「という訳でおやすみ」

「いや、起きろ」

再び眠ろうとするがレティシアによって妨害されてしまった。

しかも聞いてくださいよ、まさかの全力チョップですよ？ くらった瞬間出会ったばかりの春日部とのやりとりを思い出したよ。あの時は耐性がなかった分痛く感じたな……。

「湯殿の準備ができています。早く体を洗ってくるといい」

「ふぁーい……」

「気の抜ける返事だな……。飛鳥が聞いたらまた説教されるぞ」

『飛鳥』と言う単語を聞いてふとさっきの久遠とのやり取りを思い出す。

” 貴方がコミュニケーションのために尽くしてくれている事は聞いてい

るわ。今までそんな風には見えなかったけれど……今の貴方を見て納得したわ”

”おい待て、誰がそんな事言っているんだ”

誰かが久遠に吹き込んだ情報。もしかしたら見た目は子供頭脳はばば——もとい大人のレティシアなら誰が言っていたのか知っているかもしれない。

そんな淡い期待を胸にレティシアに問いかける。

「そういえばなんかオレがコミュニティのために身を粉にして働いてるって噂を聞いたんだけど、誰が言ってたか知らない?」

「それは私だが」

「アンタかよっ!!」

探偵が真犯人とか斬新すぎるだろ。もはや誰を信じればいいのか分からなくなるレベルだな。

しかし当の本人は疑問顔で首を傾げていた。

「何も間違っていないと思うが……。現に主殿は毎日コミュニティのために多くのギフトゲームをこなしている、正直個人的な貢献では四人の中で一番だと思っている」

淡々と言葉が紡がれる。あまり褒められ慣れていないせいもありこそばゆく感じる。

「昨日だって遅くまでギフトゲームをしていたのではないのか?」

「え?」

「え?」

驚くオレに驚くレティシア。はたから見ればシユールな光景になっっているのだろうか、などと下らない事を考える。

「主殿、違うのか?」

未だに驚いた表情のままのレティシア。先程まで手放しで褒められていたせいもあり話すのが恥ずかしいが、このまま久遠に誤解されたままあんな扱いをされるぐらいならば解いておいた方がいいな。

「えっと、凄く言い難いんだけど……昨日は朝から晩まで廃墟街で迷子になってました」

「……………はい?」

あ、やっぱりそんな反応しますよね。でも久遠だったら一瞬で理解して絶対零度に等しい視線とセツトで研ぎ澄まされた言葉の刃で刺してくるのでオレ的には嬉しい反応だ。

因みに迷子になった理由はその日の朝に黒ウサギから廃墟街の様子を見てきてほしいと頼まれ二つ返事……とはいかなかったが渋々承諾。その後探索を始めるが思っていた数十倍広く、気が付いたら来た道も忘れて迷子になっていたという訳だ。我ながら下らない理由だと思う。

聞いていたレティシアも啞然という表情から最後には苦笑に代わっていた。久遠の様にバツサリと切り捨てられない分辛いものがあるな……。

「いやまあ、”ノーネーム”の敷地は意外と広いからな。迷うのも仕方ない」

「やめて！今のオレに優しい言葉を掛けないで!!」

優しさが凶器になる瞬間を体験しました。もう二度と体験したくないです、はい。

本当に涙が出そうになって目頭を押さえているとクスクスと笑い声が聞こえてきた。

「……………何だよ」

「いや、すまない。笑うつもりはなかったんだが……やはり主殿は優しいな」

今日って何の日？オレは決して頭が良いとは思ってないけど、それでも意味不明なやり取りが何度も起こるってマジで何の日だよ。

困惑するオレをよそにレティシアは言葉が続ける。

「ガルドの時の一件は十六夜から聞いている。だから”ペルセウス”の時は参加しなかったという事も……。だが、主殿は嫌っているはずの私に黒ウサギ達のように接してくれる」

「……………だからオレが優しい、と」

「ああ」

躊躇することなく頷く。しかし素直に喜べない。

誰がオレの事をなんと思おうが気にしないが、このロリばば——レ

テイシアは大きな勘違いをされてらっしやる。だからオレは素直に喜べない。

だからオレは――

「デコクラッシヤアアアアアアアアアアア!!」

「あう!？」

渾身のデコピンをくらわせてやりました♪

「な、何をするのだ主殿!!」

「デコピンですけど、何か?」

突然デコピンをくらわせたというのに反省を毛ほどもしていない態度にレティシアは言葉を失ったように固まる。しかしそんな事を構わずにオレは言葉が続ける。

「あのな、確かに”ペルセウス”の時はお前を助けに行かなかつたし、ガルドの一件で怒りが無いわけじゃない。でも、勝手に嫌われてるなんて妄想でオレを過大評価するのはやめろよ」

『嫌われてる』だからこうやって接することが『優しい』になるのは可笑しい。どれくらいかと言うと前に黒ウサギがやろうとした意味のない自己犠牲並に面白い。

「しかし、主殿は前々から私と関わろうとしなかったではないか! だから今日だってリリに頼んで話すきっかけを作ってもらったのに……っ!」

なるほど、だから今朝はいつもの面子じゃなくてレティシアが運んできたのか。

オレはレティシアを安心させるためにいつの間にか少し強張っていた表情を緩ませ、いつもの笑みを浮かべる。

「別にレティシアを嫌ってるわけじゃないさ。というかオレが誰かを嫌いになつたら話さないどころか出会わないようにするし」

無駄な争いは極力避ける、これが一番楽な生き方だ。ゆえに本当に嫌いな奴とは会わないようにしている。

「ほ、本当か? 本当に私を嫌ってるわけじゃないのか……?」

「当たり前だ。此処は仲間を嫌うような奴が集まっているコミュニティじゃないだろ?」

「そう……だな。ああその通りだったよ」

不安げな表情から一変し心底可笑しそうに笑う。

レティシアは何年も生きてきたが、それでも仲間に嫌われるというのは寂しいものがあるのだろう。最初会った時は孤高なイメージがあっただけれど、今は他のメンバーと同じ親しみやすさを感じていた。

それから暫く笑いあった後にオレは汚れを流しに湯殿に向かった。そして湯殿から上がるとレティシアが懇切丁寧に説明してくれたのだらう絶対零度の視線をくれるいつもの久遠と鉢合わせしてしまい一時間ほどぐちぐちと文句を言われた。

勘違いして勝手にオレを労ってくれたのは久遠だろ、と言うとさらに一時間伸びたのは言うまでもないだろう。

そしてオレは仕返しに今度金髪ロリに悪戯を仕掛けてやろうと心に決めるのだった。

あら、魔王襲来のお知らせ？

15話 おや、問題児失踪のお知らせです

「十六夜君！ 何処にいるの!?!」

とある日の朝に飛鳥の声が地下書庫内に響き渡った。その後ろからは耀とリリが着いて来ている。

「……………うん？ ああ、お嬢様か……………」

何処か慌てている飛鳥とは反対に眠たそうに頭を揺らして今にも二度寝をしようとしながら十六夜は答える。

そんな十六夜の姿をみた飛鳥は十六夜が読み散らかした本を踏み台に側頭部に飛び膝蹴り、別名シャイニングウイザードを繰り出した。

「起きなさいー!」

「させるか!」

「グボハア!?!」

飛鳥の放った攻撃を十六夜はあろうことか自分達のコミュニティのリーダーであるジン少年を盾にして防いだ。

寝込みの側頭部を強襲されたジンは三回転半して見事に吹き飛んだ。このことから飛鳥がまったく手加減していなかったことが窺える。

もちろん問題児四人組とは違ってそんなびっくり展開に慣れていないリリは悲鳴を、耀はいつもの抑揚のない声で驚きの声を上げた。

「じ、ジン君がぐるぐる回って吹っ飛びました!?! 大丈夫!?!」

「……………。側頭部を膝で蹴られて大丈夫な訳ないと思うな」

そう言いつつ耀は吹っ飛んで行ったジンに向かって合掌する。

一方、ジンを吹き飛ばした張本人である飛鳥は全く悪びれた様子もなく、腰に手を当てて二人に向かって叫ぶ。

「十六夜君、ジン君！ 緊急事態よ！ 二度寝している場合じゃないわ!」

「そうかい。それは嬉しいが、側頭部にシャイニングウイザードは止

めとけお嬢様。俺は頑丈だから兎も角、御チビの場合は命に関わ——

「つて僕を盾に使ったのは十六夜さんでしょう!？」

ガバツ!! と本の山から起き上がってまるで自分は何もしていないかのように振る舞う十六夜にツツコむ。どうやら生きていたらしい。

「大丈夫よ。だってほら、生きてるじゃない」

「デットオアアライブ!? というか生きていても致命です!! 飛鳥さんはもう少しオブライトにと黒ウサギからも散々——」

「御チビも五月蠅い」

スコーンツ! と十六夜の投げた本がジンの額にクリティカルヒットし、再び吹っ飛んで失神する。もちろんそんなカオス展開に慣れていないリリは混乱してオロオロとしていた。

「……………それで? 人の快眠を邪魔したんだ。相応のプレゼントがあるんだろうな」

睡眠を邪魔された十六夜は不機嫌なのを隠そうともせず苛立ちのこもった視線を飛鳥に向ける。しかし睡眠を妨害されて不機嫌にならない人は少ないので当たり前だろう。

しかし飛鳥はそんな不機嫌な十六夜を無視して話を進める。

「いいからコレ読みなさい。絶対に喜ぶわよ」

そう言っつて飛鳥は封? がされた手紙を十六夜に渡す。それを受け取ると封を確認して中身を取り出し読み始める。

「双女神の封? ……白夜叉からか? あー何々? 北と東の”階層支配者”による共同祭典——”火龍誕生祭”の招待状?」

「そう。よくわからないけどきつと凄いいお祭りだわ。十六夜君もわくわくするでしょ?」

何故か自慢げに語る飛鳥。一方、十六夜は腕をプルプルと震わせて手紙を読みながら叫ぶ。

「おい、ふざけんなよ。こんなことで人の快眠邪魔して側頭部にシャイニングウィザードを決めようとしたのかよ!? それに、なんだよこのラインナップ!? 『北側の鬼種や精霊達が作り出した美術工芸品の

「展覧会および批評会に加え、様々な『主催者』がギフトゲームを開催。メインは『フロアマスター』が主催する大祭を予定しております』だど!? クソが!少し面白そうじゃねえか、行ってみようかなオィ♪」

「ノリノリね」

十六夜は身体を撓らせて飛び起きると、近くに脱ぎ捨てていた学ランを颯爽と着込んで先程までの眠気を吹き飛ばして、『火竜誕生祭』に行く支度をする。

肝を冷やししながらその光景を見ていたりりは血相を変えてまで十六夜たちを呼び止める。

「ままま、ま、待つてください! 北側に行くにしてもせめて黒ウサギのお姉ちゃんに相談してから……………ほ、ほら! ジン君も起きて! 皆さんが北側に行っちゃおうよ!」

「……………北? ……北側だつて!」

失神していたジンが「北側に行く」という単語に反応してガバツと起き上がる。

こんなに早く立ち直るところを見ると見た目に反してジンはタフな体をしているらしい。

「ちよ、ちよつと待つてください! 北側に行くって、本当ですか!」

「ああ。そうだが?」

「何処にそんな蓄えがあると思ってるんですか!? 此処から境界壁までどれだけあると思ってるんです!? リリも、大祭の事は皆さんには秘密にと——」

「『秘密?』」

三人がそう聞き返したところでジンは自分の失態に気が付き固まってしまう。

しかし時はすでに遅し。邪悪な笑みと怒りのオーラを放つ飛鳥、耀、十六夜の問題児三人組がジンの眼前にいた。

「……………そっか。こんな面白そうなお祭りを秘密にされてたんだ、私達。ぐすん」

「コミュニケーションを盛り上げようと毎日毎日頑張ってるのに、とつても

残念だわ。ぐすん」

「毎日ギフトゲームをしてコミュニティの為に頑張ってるてのにな。ぐすん」

「ここらで一つ、黒ウサギ達に痛い目を見てもらうのも大事かもしれないな。ぐすん」

かなり芝居がかかった泣きまねの裏側でニコオリと物騒に笑う問題児。『ニツコリ』ではなく、『ニコオリ』だ。

そんな隠す気もない悪意にジンと傍にいたりりはだらだらと冷や汗が流れ落ちる。

と、ここで飛鳥がふと思い出したように十六夜に問いかける。

「そういえば剣士君は此処にいないのかしら？」

「天野か？ 残念ながら見かけてないな」

そう言つて耀に視線を向けるが知らないと言うように首を横に振る。

「飛鳥の部屋に行く前に軽くお腹に入れようと思って剣士の部屋に行つたけど誰もいなかったよ」

「何で食べ物求めて剣士君の部屋に行つたかは聞かないけど……それだと妙な話ね」

「どうして？」

「剣士様は基本的に朝早く起きられる方ではないので、耀様より早く起きる事は少ないんです」

耀の疑問にリリが答える。因みに問題児四人組はだいたい十六夜、耀、飛鳥、剣士の順で起床する。

中でも十六夜は一日寝ない事があつたり、反対に剣士は一日中寝たりする事がある。

つまり飛鳥が言っている妙な話というのは一番起床時間が遅い剣士がすでに起きていてという事を指す。

「……………剣士居ないけど、どうする？」

耀が二人に問いかける。二人は暫く思考を巡らせて結論を同時に出す。

「おいて行こう」

因みにしばらく思考を巡らせたと言ってもその間数秒である。しかも飛鳥にいたってはとてもいい笑顔のオプシオン付きだ。

「お、御二人ともここは剣士さんを探しましょうよ！ 仲間でしょう!?!」

そんな二人に反論する。しかし二人はやれやれといった体で肩を竦める。

「ジン君、よく聞きなさい」

「は、はい」

急に真剣な顔になる飛鳥にジンは動揺してしまう。

「剣士君をおいていくのは私達だって本当に心苦しいわ」

「でも即決でしたよね!?!」

「黙りなさい」

「っ!!」

飛鳥の一括でピンツと背筋が伸びて気をつけの態勢になってしまふ。

別に飛鳥がギフトを使ったわけではないのだが、その気迫でジンを黙らせたのだ。そしてジンはこの瞬間に理解した。剣士が飛鳥に逆らえないのはこれがあるからなのだ……。

「……こほん。それで私だっておいていくのはどうかと思うわ。決して面倒くさいとは思っていないわ。でもね………見つからないものはしょうがないじゃない」

「ま、そういう事だ。御チビ」

「っ!! っっ!!」

探してないじゃないですか！ ジンは言いたくても飛鳥の気迫が恐ろしくて言えなかった。リリもこの空気の中発言できるわけもなく、ただオロオロとしている事しかできなかった。

かくして、哀れな少年ジンⅡラッセルは三人に問答無用に拉致され、東と北の境界壁を目指すのだった。

「く、黒ウサギのお姉ちゃああああん！ 大変——!」

「リリ!?! どうしたのですか!?!」

黒ウサギがレテイシアと共に農園区の状況を確認していると、本拠に続く道の向こうからリリが叫びながら二人の元へ走ってきた。

その顔は今にも泣きそうだった。

「じ、実は飛鳥様が十六夜様と耀様を連れて……………あ、こ、これ、手紙！」

パタパタと二尾をせわしなく動かしながら、リリは手に持っていた手紙を黒ウサギに渡した。

『黒ウサギへ。』

北側の四〇〇〇〇〇〇外門と東側の三九九九九外門で開催する祭典に参加してきます。貴女も後から必ず来ること。あ、あとレテイシアもね。ついでに剣士君を見かけたら連れて来て頂戴。

それと、私達に祭りの事を意図的に黙っていた罰として、今日中に私達を捕まえられなかった場合”三人ともコミュニティを脱退します。”死ぬ気で探してね。応援しているわ。

P/S ジン君は案内役に連れて行きます』

「……………」

「……………？」

「……………!？」

たっぷり黙り込む事三十秒。手紙を読み、頭の中で反芻し——理解する。

黒ウサギは体全身をワナワナと震わせながら、悲鳴のような、怒声のような声を上げた。

「な、……………何を言っちゃってますかあの問題児様方あああ
……………!!!」

黒ウサギは今日も世界屈指の最強問題児集団に苦勞するのだった。

□ ■ □ ■ □ □

その後のレテイシアと黒ウサギの行動は迅速だった。

手紙を確認した後、農園跡地から本拠に戻り二人は十六夜達がコミュニティの領地内にか確認。しかし見当たらず、最後に宝

物庫の鍵を持って降りた黒ウサギは、豪華な扉と結界を解除して勢よく中に入る。重鈍とした音と共に開いた宝物庫の中は伽藍としており、ほとんどが空洞状態だ。

そんな中、黒ウサギは辛うじて真ん中にちよこんと置かれた袋に飛びつく。

それを追うレティシアと、同じく搜索を終えたりり率いる年長組の子供達も宝物庫の中に入って来る。

「食堂にはいなかったよ!」

「大広間、個室、貴賓室全部見てきた!」

「世界の真理も見てきた!」

「貯水池の付近にもいないっ!」

「お腹すいた!」

「それはまた後でな。……………そして誰だこの短時間で何かを悟った奴は」

しかしレティシアのその問いかけに答える者はおらず、レティシア短くため息をついて黒ウサギに向き直る。

「それで、金庫はどうだ?」

「コミュニニティのお金に手を付けた形跡はありません。しかし皆さんの自腹で境界壁まで向かえるはずがございません! うまくすれば外門付近で捕まえることが可能です!」

自分達に勝機が見えたのか意気込む黒ウサギ。しかしレティシアの表情は依然として暗いままだ。

「しかし剣士のギフトだったら金貨を作る事など造作もないだろう?」

もしそうされたら今頃北側に行ってる可能性だってあるな……」

「それは恐らくないでしょう。以前剣士さんに似たような事を聞いたところ」そんなことしたら貨幣の流通がおかしくなって経済が破綻するからしないよ」とおっしゃってました」

「しかし剣士もこのコミュニニティの問題児の一角で言い方は悪いが頭が少し足りていない所が多々見られる。十六夜達に丸め込まれるという事もあり得るのでは?」

「そ、それは……」

レテイシアの指摘に言いよどむ黒ウサギ。どうやら心当たりがあるらしい。

しかし少し悪くなった空気を打破するかの如くリリが二尾をパタパタと振りながら説明を加える。

「でも剣士様は現在行方不明で飛鳥様達とは一緒に居ないんです。飛鳥様達も居場所を知らなかったようなので恐らく大丈夫だと……」

「あ、確かに手紙にもそのようなことが書かれていますね」

「ふむ、なら安心……か？」

「ですね」

「なら黒ウサギは先に外門へ急げ。万一捕まえられずとも、”箱庭の貴族”であるお前なら境界門の起動に金はかからない。私は”サウザンドアイズ”の支店へ行く。招待状を出したのが白夜又ならば、無償で北の境界壁まで送り届ける可能性があるからな」

黒ウサギとレテイシアはお互いの行動を確認し合って頷く。

特に黒ウサギの瞳には、かつてない程の怒りの火花が散っており今ならばその怒りの炎でお湯が沸かせそうだ。

「あの問題児様方……！ 今度という今度は絶対に！ 絶対に許さないのでですよ——ッ!!」

怒りのオーラで髪を淡い緋色で染め上げ、本拠の外に出るや否や、土埃を巻き上げて境界門へ向けて爆走を開始する。

「……さて、私達も剣士をたたき起こして”サウザンドアイズ”に急ぐとしようか」

「え？」

「ん？」

レテイシアの言葉に驚くりり。そしてそんな反応をされて頭に疑問符を浮かべるレテイシア。

暫くお互い首を傾げた後にリリが遠慮がちにレテイシアに問いかける。

「えっと、だから剣士様は……」

「自分の部屋以外の所で寝てるんだらう？」 ”ノーネーム”の敷地は広いからな、行方不明とはよく言ったものだ」

「いえ、そうではなく……。本当に朝から姿を見てないんです。先ほども他の子達と敷地全体を探したのですが見当たらなかったんです」「本当だよレティシア様。多分敷地内にはいないと思うよ?」「おれも今日は朝早く起きてたけど剣士さんの姿は見なかったよ」「シホとジョンがそう言うのと他の子供達も剣士を見ていないと言います。」

衝撃の事実を知り、レティシアは数秒固まった後に、額に指を当てて深い溜息を吐いた。

「まったく、剣士は十六夜達とは別の問題を起こしてくれる……」

「あ、あははは……」

リリはその言葉に苦笑を浮かべることしかできなかった。

16話 おや、北側到着のお知らせです

「いくらなんでも遠すぎるでしょう!」

飛鳥が”六本傷”のの旗印を掲げるカフェテラスで、テーブルを叩いてジンに抗議の声を上げる。

しかし先程まで飛鳥の剣幕に押されていたはずのジンも負けじと飛鳥に叫び返す。

「ええ、遠いですよ!! 箱庭の都市は、中心を見上げた時の遠近感を狂わせるように出来ているため、肉眼で見た縮尺との差異が非常に大きいです。あの中心を貫く”世界軸”までの実質的な距離は、目に見える距離よりもはるかに遠いんですよ!!」

だから止めましようってあれほど言ったんじゃないですかーツ!! とジンが叫ぶ。

耀と十六夜の二人は黙って二人のやり取りを見ていた。

そもそも何故二人がこのように叫びあっていたかというところ、ジンを拉致してリリに手紙を渡した三人は”六本傷”のカフェテラスを陣取ってどうやって北側まで行くかを話し始めた。

しかし和気藹々と話している三人に水を差すようにジンが北側までの距離の事を話したところ現在の状況に至ったという訳だ。

いつもはだからどうしたと一蹴するような三人だが、今回はそうもいかずに考え込んでいる。

「……………そうか。箱庭に呼び出された時、箱庭の向こうの地平線が見えたのは、縮尺そのものを誤認させるようなトリックがあったわけか」

十六夜が納得したように一人で頷く。

彼らが箱庭の縮尺を間違え、北側に歩いて行こうとした理由は、この箱庭に呼び出された時に箱庭のトリックに騙されていたからに他ならない。

巨大な外壁を持つ箱庭は、三人の想像以上に巨大なのだ。

そのことに飛鳥は具合が悪そうに黙り込むが、足を組みなおしてジンに再提案する。

「そう。なら仕方がないわ。」ペルセウス”のコミュニティに向かった時の様に、外門と外門を繋いでもらいましょう」

「……………それはもしかして”境界門”を起動してもらおうという事ですか？」

ジンが苦々しい顔をしながら飛鳥に問い返す。

——”境界門へアストラルゲート”とは、莫大な土地を有する箱庭を行き来する為に設けられた外門と外門を繋ぐシステムの事である。

地域の権力者が外門の造形をコーディネートする利権を欲しがるのは、行商や興行、ギフトゲームの開催や出場など、移動の拠点として多く使われるからだ。

コミュニティとしては、名前を広く宣伝することのできるアピール方法としてはこれ以上のものは無いだろう。

しかしジンはこれにも難色を示した。

”境界門”の起動にはお金がかかります！”サウザンドアイズ”発行の金貨で一人一枚！ 四人で四枚！ これはコミュニティのほぼ全財産と同額です！」

きつとこの場に黒ウサギがいたら「皆様は子供達を餓死させるつもりなのですかーッ!!」と髪を緋色に染めて怒るだろう。

それは飛鳥達も分かり切っている事だし、なによりそんな事をすれば剣士が何をしでかすか分かったものではないので苦々しい顔で再度黙り込む。

「九八〇〇〇〇kmか。流石にちよつと遠いな」

軽薄な笑みを浮かべる十六夜だが、流石の十六夜でも打つ手がない様子だ。

無駄な散財は避けたいし、如何に桁外れのギフトを持つ彼らでも地球二五個分も歩く訳にはいかない。ジンは怒鳴り散らして息が切れたのか、大きいため息を一つ吐く。そして先程よりやや落ち着いた口調で三人を諭す。

「今なら笑い話ですみますから……………皆さんも、もう戻りませんか？」

「断固拒否」

「右に同じ」

「以下同文」

ガクリ、と肩を落とすジン。黒ウサギにあんな挑発的な手紙を残して来た手前、彼らも引くに引けないのだ。

「それにもしかしたら剣士はこの手紙の事を知ってて先に行つたのかもしれない。もしそうなら許されざる事」

耀が言うのと飛鳥は頷いて同意を示し、十六夜はニヤニヤと笑つて耀を見た。

「春日部は本当に天野の事が好きみたいだな」

十六夜の一言で周りの空気が一瞬にして凍りついた。

呆然とする耀。何故か顔を輝かせて耀の様子を窺う飛鳥。そして何故かびくびくと怯えているジン。きつと今の状況を離れた場所から見るととても奇妙に見えるだろう。

「……なんで、そう思うの？」

沈黙を破つて耀が十六夜に問いかける。

「何でって……何かあるたびに剣士剣士言われてたらそう思うだろ」

彼らが出会つてまだそんなに月日は経っていない。しかし耀はよく剣士と行動を共にしている。十六夜はそのことを指しているのだろう。

耀は否定も肯定もせず、ただ純粋な疑問として十六夜の言葉を頭の中で反芻して考え込む。

「……………確かにそうかも」

たつぷり考え込んだ後にぽつりと呟いた。

そしてその言葉のすぐ後に「だけど」と付け加えて、首を傾げつつ言葉を続ける。

「でもこれは恋とかじゃなくて、こう……親愛？　みたいな。なんか剣士と居ると懐かしい気持ちになるというか……上手く説明できなない」

うーん、と唸つて黙り込んでしまう耀。しかし飛鳥は耀の言葉に同意するように頷く。

「春日部さんの言いたいことは分からないでもないわね。正直な所私

も似たような事を剣士君から感じてるわ」

「飛鳥も?」

「ええ。だから何かしつかりしてほしくてちよつと小言を言ってしまうわ」

その言葉にジンは「ちよつとじゃないですよ?」とツツコみたかったが、言えば最後。ジン自身もどうなるかわからないので大人しく引き下がった。

十六夜は二人の話を聞いて思う事があったのか、唇の端を少し釣り上げる。

「俺はお嬢様達の言う懐かしいって感覚は無いが……まあ昔からつるんでる悪友って感じはあるな」

「確かに昔から一緒にいたみたいなのが感覚はするわね」

「それだけ馴染みやすかった」

三人がうんうんと頷き合う。

ジンはその光景を見ながら少し安堵する。というのも、三人の剣士に対する日ごろの接し方ももしかしたら嫌われているのではないかと極うつすらと思っていたからである。

しかしそれはジンの取り越し苦労に終わり、実際は三人は思ったよりも剣士の事を信頼している事が分かったのだ。コミュニティのリーダーとしてはコミュニティ内に不和が生まれ無かった事に胸をなでおろすばかりである。

そして今なら北側に行かずに済むのでは? と考えたジンはその顔に微笑みを浮かべながら提案する。

「それじゃあ皆さんそろそろ……」

「そうね。そろそろ……」

「白夜叉の所に行くか!」

「え!?!」

三人は勢い良く立ち上がるとジンのロープを引っ掴んで走り出す。ジンは抵抗することもできずに引きずられていく。

「ちよ、み、皆さん!?! コミュニティに戻りましょうって! それが無理でもせめて剣士さんを探してあげましょうよ!!」

「馬鹿な事言わないで！ 黒ウサギ達にあんな手紙残してきて引ける
ものですか！ それに剣士君が先にあつちで楽しんでるかもしれない
いでしよう！」

「おう！ こうなったら駄目で元々！」 サウザンドアイズ”に交渉
に行くぞゴラア！」

「行くぞコラ」

自棄気味にハイテンションに笑う十六夜とキレ気味の飛鳥に続き、
その場のノリだけで声を出す耀。

こうして哀れなジン少年は問題児に色んな意味で首を絞められつ
つ連れまわされるのであった。

□ ■ □ ■ □ □

「お帰り下さい」

「まだ何も言っていないでしょう？」

” サウザンドアイズ”の支店前、いつもと同じ割烹着に竹ぼうきを
装備をした女性店員にいつもと同じ様に門前払いされていた。

この問題児達は女性店員に嫌われている節がある。きつとファー
ストコンタクトで失敗したのが原因だろう。

しかし飛鳥は髪を？きあげて、口を尖らせて抗議する。

「そこそこ常連客なんだし、もう少し愛想よくしてくれてもいいとお
もうのだけれど」

「常連客というのは店にお金を落としていくお客様の事を言うので
す。少なくとも貴方達の仲間のお馬鹿さんはお金を落としていきま
すよ」

「ねこばばは犯罪よ？」

「そういう意味ではありません。ちゃんと買い物をしているという意
味です」

絶対零度の眼で飛鳥達を睨む女性店員。しかし問題児達はそんな
の気にもしない。

「というか剣士は良くここを利用しているの？」

耀がそういうと店員は苦虫を噛み潰したような表情になる。

「……ええ。私はいつも追い返しているのですが、言葉が通じないのでそのまま入られるのが常ですが」

悔しそうに竹ぼうきを握りしめる。飛鳥はその姿に多少の親近感を感じて思わず頷いてしまった。

しかし女性店員も（あまり知られてはいないが）支店長として、そして誇りある”サウザンドアイズ”の御旗に集う者としてこのまま問題児達に負けるわけにもいかない。

彼女は握りしめていた竹ぼうきの先を十六夜達に向けて言う。

「それでもお金を一銭も落としていかない貴方達よりはましなお客です。そもそも貴方達のような人たちは常連客ではなく取引相手というのです」

「あら、それもそうね。じゃあ御邪魔します」

あっさり納得し、そのまま自然な流れで侵入する。が、飛鳥達の前に女性店員が大の字に立ち塞がる。

竹ぼうきを片手に八重歯をむきながら唸ると、十六夜達に向かって叫ぶ。

「だからうちの店は！ ”ノーネーム” 御断りです！ オーナーが居る時ならともかく今は」

「やつふおおおおお！ ようやく来おったか小僧どもおおおおお！」

何処から叫んだのか和装で白髪の少女、白夜叉が空の彼方から降ってきた。

白夜叉は嬉しそうな声を上げて空中でスーパーアクセルを見せつつ荒々しく着地する。

十六夜は土煙を払いながら、呆れたように女性店員に言う。

「ぶっ飛んで現れなきや気が済まねえのか、此処のオーナーは」
「……………」

痛烈に頭が痛そうな女性店員は、言い返せずに頭を抱えた。

白夜叉が着地の際に巻き起こした土埃を吸い込んでしまい咳き込む飛鳥の代わりに耀が持っていた招待状を白夜叉に見せる。

「招待、ありがと。だけど、どうやって北側に行こうか悩んで
……………」

「よいよい、全部わかっておる。まずは店の中に入れ。条件次第で路
銀は私が支払ってやる。……………秘密裏に話しておきたい事もあるし
な」

最初の陽気な話し方から一変して最後の言葉だけ真剣な声音が宿
る。スツと目を細めた白夜叉からはふざけた様子は窺えない。

それに反応した三人は顔を見合わせて悪戯っぽく笑った。

「それ、楽しい事？」

「さて、どうかの。まあおんしら次第だな」

意味深に話す白夜叉。三人はジンを引きずりつつ、嬉々として暖簾
をくぐった。

女性店員は制止を掛けようとしたが、彼らはオーナーである白夜叉
が通した客人であるので悔しそうに歯を食いしばりながら五人の背
中を見送って……………ある事に気が付く。

「……………今日は一人足りませんね」

「そういえば今日のはあの小僧の姿が見当たらんが別行動か？」

中庭を通って白夜叉の座敷に招かれ、さあ話を始めるぞとした所で
白夜叉が剣士の不在に気が付き十六夜達に問う。

「？ 先に来て北側に連れて行ったんじゃないの？」

「いや来てないぞ。というか最近小僧とあつとらんなのでな、正直退屈
しておった」

剣士がコミュニティ内に居ない事を知っていた耀たちは問い返す
が、白夜叉が知っているはずもなお互いに首を傾げる。

「……………何処に行ったんだ、アイツ」

五人の心の声が重なる。そして頭の中にいつものヘラヘラ顔のま
ま平気で迷子になっている剣士の様子が思い浮かんだ。

白夜叉は咳払いを一つして頭の中の剣士を追い払い、真剣な顔をす
る。

「本題に入る前にまず、一つ問いたい。」フォレス・ガロ」の一件以

降、おんしらが魔王に関するトラブルを引き受けるとの噂があるそうだが……………真か？」

「ああ、その話？ それなら本当よ」

飛鳥が首肯すると、白夜叉は小さく頷き視線をジンへと移す。

「ジンよ。それはコミュニティのトップとしての方針か？」

「はい。名と旗印を奪われたコミュニティの存在を手早く広めるには、これが一番いい方法だと思いました」

いつか十六夜に言われた事を白夜叉に伝えるジン。最初こそ反対したのだが、十六夜の言う通り名も旗印もないコミュニティはリーダーの名前を大々的に売り込むしかない。それに”打倒魔王”を掲げることによってこの箱庭の世界で特色のあるコミュニティとなり自分達の存在を広く宣伝することができる。

「リスクは承知の上なのだな？ そのような噂は、同時に魔王を引きつける事にもなるぞ」

鋭い視線で白夜叉がジンを射抜く。ジンは若干たじろぐがそれでも佇まいを正し、どこか堂々とした様子で返答する。

「覚悟の上です。それに仇の魔王からシンボルを取り戻そうにも、今の組織力では上層に行けません。決闘に出向く事が出来ないなら、誘き出して迎え撃つしかありません」

対等な条件で勝負しようとするそれまでに何年もかかってしまう。ならば、分が悪くても此方から一手投じる時もある必要になる。

たとえ周りから無茶だと言われてもただ仲間を……………問題児四人衆を信じて戦うだけだ。

「……………無関係な魔王と敵対するやもしれん。それでもか？」

腕を組んでジンを試すかのように威圧感を放ちながら更に切り込む白夜叉。

その問いに、傍で控えていた十六夜が不敵な笑みで答える。

「それこそ望むところだ。倒した魔王を隷属させ、より強力な魔王に挑む”打倒魔王”を掲げるコミュニティ——どうだ？ 修羅神仏が集う箱庭の世界でも、こんなにカッコいいコミュニティは他には無いだろ？」

「……………ふむ」

「それにこの御チビもアンタが思ってるほど子供じゃない。いつまでも過保護になつてると、いくら恩人とはいえ嫌われるぜ?」

茶化して笑う十六夜だが、その瞳は相も変わらず笑っていない。この男は一見して何も考えていないようだが、リスクを天秤に掛けて考えられるという程度には、白夜又は評価していた。

白夜又は二人の言い分を噛み砕く様に瞳を閉じる。

目の前に居るジンという少年は白夜又の中ではまだまだ子供だった。十六夜達が来る前はまるで小さな子供が背伸びをしたような理想論ばかり語っていた少年は白夜又の眼には幼く、自分が守らねばという感情がこみ上げてくるほどだった。

しかしどうだろう、今日の前に居るジンという少年はつい数日前とは比べ物にならない位——まだ無理している気がしないでもないが——成長しているではないか。

(ジンを変えたのはこの小僧達か、はたまたこの生意気な小僧か……。だが、こやつ等が居るのなら心配は無用じゃな)

しばし瞑想した後、呆れた笑みを唇に浮かべた。

「そこまで考えての事ならば良い。これ以上の世話は老婆心というものだろう」

「ま、そういう事だな——で? 本題は何だ?」

「うむ。実はその”打倒魔王”を掲げたコミュニティに、東のフロアマスターから正式に頼みたい事がある。此度の共同祭典についてだよ。よろしいかな、ジン殿?」

「は、はい! 謹んで承ります!」

子供を愛でるような物言いではなく、組織の長として言い改める白夜又。

ジンは少しでも認められた事にパツと表情を明るくして応えた。その変化にやはりまだまだ幼い所があるな、と白夜又は苦笑を漏らしつつ煙管を啜える。

「さて、何処から話そうかの……」

カン。と煙管で紅塗りの灰吹きを軽く叩き、一息つく白夜又。視線

を中庭に移して遠い目をして考え込んだ後、ふっと思い出したように話し始める。

「ああ、そうだ。北のフロアマスターの一角が世代交代するというのはしっておるか？」

「え？」

「急病で引退だとか。まあ亜龍にしては高齢だったからのう。寄る年波には勝てなかったと見える。此度の大祭は新たなフロアマスターである、火竜の誕生祭でな」

「龍？」

キラリと耀と十六夜の瞳が輝く。その反応に白夜叉は苦笑しつつも説明を続ける。

「五桁・五四五五外門に本拠を構える”サラマンドラ”——それが北のマスターの一角だ。ところでおんしらフロアマスターについてどれくらい知っておる？」

「私は全く知らないわ」

「私も全く知らない」

「俺はそこそこ知ってる。要するに、下層の秩序と成長を見守る連中だろ？」

十六夜が軽く挙手をして”階層支配者へフロアマスター”についての説明をし、飛鳥と耀は説明を清聴した。

そしてその話が終わると、ジンは十六夜説明に捕捉をする。

「しかし、北側は複数のマスター達が存在しています。精霊に鬼種、それに悪魔と呼ばれる力ある種が混在した土地なので、それだけ治安が良くないですから……」

そういうとジンは悲しげに眼を伏せた。

「けど、そうですか。”サラマンドラ”とは親交があったのですけど……まさか頭首が替わっていたとは知りませんでした。それで、今はどなたが頭首を？ やっぱり長女のサラ様か、次男のマンドラ様が「いや。頭首は末の娘——おんしと同年のサンドラが火龍を襲名した」

白夜叉の言葉が頭ですんなり処理できなかったのか、は？ と小首

を傾げて二度ほど眼を瞬く。

しかし次の瞬間にはジンは驚嘆の声を上げて、驚きのあまり身を乗り出した。

「サ、サンドラが!? え、ちよ、ちよつと待ってください! 彼女はまだ十一歳ですよ!」

「あら、ジン君だつて十一歳で私たちのリーダーじゃない」

「そ、それはそうですけど……! いえ、だけど」

「なんだ? まさか御チビの恋人か?」

「ち、違つ、違います! 失礼な事を言うのは止めてください!」

ヤハハと茶化す十六夜と飛鳥に迫力なく怒鳴り返すジン。

「そういえばさつきも似たようなやり取りをしたな、とうっすら思いつつも全く関心の無い耀が続きを促す。

「それで? 私達に何をして欲しいの?」

「そう急かすな。実は今回の誕生祭だが、北の次代マスターであるサンドラのお披露目も兼ねておる。しかしその幼さの故、東のマスターである私に共同の主催者を依頼してきたのだ」

「アンタも見た目は十分幼いけどな」

「しばくぞ小僧。それに私はあれだ、着痩せする感じのあれだからな」

「ではそういう事にしておきましょう。それでも、それはおかしな話ね。北は他にもマスター達が居るのでしよう? ならそのコミュニケーションにお願いして共同主催すればいい話じゃない?」

「……………うむ。まあ、そうなのだがの」

急に歯切れが悪くなる白夜叉。

ポリポリと頭を搔いて言い難そうにしていると、十六夜が隣から助け船を出した。

「幼い権力者を良く思わない組織が在る。——とか、在り来りにそんなところだろう?」

「んー……ま、そんなところだ」

途端に飛鳥の顔が不快そうに歪む。その顔は依然ガルドを目の前にした時と同じそれだ。まさかそんな陳腐な話が絡んでくるとは思わなかったのだろう。その眼には激しい怒りと落胆の色が浮かんだ。

「……………そう。神仏の集う箱庭の長達でも、思考回路は人間並みなのね」

「うう、手厳しい。だが全くもってその通りだ。実は東のフロアマスターである私に共同祭典の話を持ち掛けてきたのも、様々な事情があつての事なのだ」

申し訳なさそうな苦々しい顔で項垂れる白夜叉。

重々しく口を開こうとした白夜叉を、耀がハッと何かに気が付いたような仕草で制す。

「ちよつと待つて。その話、まだ長くなる?」

「ん? んん、そうだな。短くともあと一時間程度はかかるかの?」

「それまづいかも。……………黒ウサギ達に追いつかれる」

耀の言葉にハッ、と他の問題児二人とジンも気が付く。一時間も悠長に”サウザンドアイズ”に留まっていれば、黒ウサギ達に見つかることは避けられないだろう。

忘れていたが、今は黒ウサギ達との追いかけつこの最中なのだ。気が付いたジンは咄嗟に立ち上がった。

「し、白夜叉様! どうかこのまま——」

「ジン君、黙りなさい!」

ガチンツ! と勢いよくジンの意思とは無関係に下顎が閉じる。

飛鳥の支配するギフトの力が働いたのだろう。

その隙を逃がす十六夜ではなく、すかさず白夜叉を促す。

「白夜叉! 今すぐ北側へ向かってくれ!」

「む、むう? 別に構わんが、何か急用か? というか、内容を聞かずに受諾してよいのか?」

「構わねえから早く! 事情は追々話すし何より——その方が面白い! 俺が保証する!」

その言葉を聞いた白夜叉は瞳を丸くし、呵々と哄笑を上げて頷いた。

「そうか、面白いか。いやいや、それは大事だ! 娯楽こそ我々神仏の生きる糧なのだからな。ジンには悪いが、面白いなら仕方ないのう?」

「……………!? ………………!?」

悪戯っぽい笑みを浮かべる白夜叉に声にならない悲鳴を上げるジン。しかしこの白夜叉も問題児と同類なのだ。今更何を言おうとも何もかもが遅い。

暴れるジンを嬉々として押さえつける十六夜達。彼らを余所目に、白夜叉は両手を前にだし、パンパンと柏手を打つ。

「……………ふむ。これでよし。これで御望み通り、北側に着いたぞ」
「……………は？」

17話 おや、フラグ建設のお知らせです

四人は素っ頓狂な声を上げた。

それもそのはずだ。あれだけ遠いと言われた北側に着いたと言われれば誰だつてそうなるだろう。

しかしそこは最強の問題児達。疑問より好奇心を優先し期待を胸に店の外へ飛び出す。

その瞬間熱風が三人の頬を撫でる。

高台に建つ”サウザンドアイズ”の支店からは街の一角が展望できた。しかし見える景色は彼等のよく知る街ではなかった。

飛鳥は大きく息を呑み、胸を躍らせるように感嘆の声を上げた。

「赤壁と炎と……………ガラスの街……………!?!」

東と北を遮る赤い境界壁。彫刻の街と言つても過言ではない程眼下に広がる街は芸術性に溢れており、遠目からでも分かるほど色彩鮮やかなカットガラスで飾られた歩廊に飛鳥は瞳を輝かせる。

昼間だというのに黄昏を思わせる色味を放っているのは街の装飾だけではなく、境界壁の影に重なる場所を朱色の暖かな光で照らす巨大なペンダントランプが数多く点在している為だ。

二本の足で歩くキャンドルスタンドが街中を闊歩している様子を見て、飛鳥だけではなく十六夜も喜びの声を上げた。

「へえ……………九八〇〇〇〇kmも離れているだけあって、東とは随分と文化様式が違うんだな。歩くキャンドルスタンドなんて奇抜なもの、実際に見る日が来るとは思わなかったぜ」

「ふふ。しかし違うのは文化だけではないぞ。其処の外門から外に出た世界は真っ白な雪原でな。それを箱庭の都市の大結界と灯火で、常秋の様相を保っているのだ」

白夜叉が自慢げに小さな胸を張り、十六夜は眼下の街に目を向けながら頷く。

そんな二人をよそに飛鳥は、美しい街並みを指して熱っぽく訴える。

「今すぐ降りましょう！ あの歩廊に行ってみたいわ！ いいでしょ

う白夜叉？」

今までの凜としたお嬢様の雰囲気は消え去り、瞳を輝かせて楽しそうに声を弾ませている飛鳥はまるで子供のようだった。

白夜叉はそんな飛鳥の様子に満足したように頷くと着物の袖をゴソゴソと探り、一枚のチラシを飛鳥たちに見せる。

「ああ、構わんよ。続きは夜にでもしよう。暇があればこのギフトゲームにも参加していけ」

そう言われて白夜叉が差し出したチラシを覗き込む。

「見いつけた——のですよおおお!!」

ズドオン!! と、ドツプラー効果の効いた絶叫と共に、まるで爆撃の様な着地。

何処からともなく全力跳躍し、彼等の目の前に現れたのは問題児達の同士、黒ウサギ。

「ふ、ふふ、フフフフ……………! ようおおおやく見つけたのですよ、問題児様方……………!」

怒りのため本来黒いはずの彼女の髪は緋色に変わっており、怒り狂ったその姿は仁王をを連想させた。

危険を感じ取った問題児の中で、真っ先に動いたのはやはり十六夜だった。

「逃げるぞツ!!」

「逃がすかツ!!」

「え、ちよつと!?!」

十六夜は隣にいた飛鳥を抱きかかえ迷わず展望台から飛び降りる。耀は一瞬遅れて旋風を巻き上げて空中に逃げようとするが、そのタイムラグと相手が悪かった。

怒りの化身と化した黒ウサギは十六夜達に逃げられたと即座に判断すると、標的を耀に切り替え、大ジャンプで耀のブーツを握りしめる。

「わ、わわ、……………!」

「耀さん、捕まえたのです!! もう逃がしません!!!」

どこかぶつ壊れ気味に笑う黒ウサギは耀を胸に引き寄せ、耳元で囁く。

「後デタツプリ御説教タイムナノデスヨ。フッフ、御覚悟シテクダサイネ♪」

「りよ、了解……」

反論を良しとしないカタコトの声に、流石の耀も怯えながら頷く。今日の黒ウサギは普段よりバイオレンスだと野生の直感が見抜いたのだろう。着地した黒ウサギは、乱暴に白夜叉に向かつて耀を投げつける。三回転半して吹っ飛んだ耀と白夜叉は悲鳴を上げた。

「きゃー！」

「ゴボハア！ お、おいコラ黒ウサギ！ 最近のおんしは些か礼儀を欠いておらんか!? コレでも私は東のフロアマスター——！」

「耀さんの事をお願い致します！ 黒ウサギは他の問題児様を捕まえるに参りますので！」

白夜叉の言葉に聞く耳を持たない黒ウサギに、白夜叉は勢いに負けて頷く。

「ぬっ…………そ、そうか。良く分かんが頑張れ黒ウサギ」

「はいー！」

展望台からジャンプする黒ウサギ。

黒ウサギと十六夜達の追いかっこという名のゲームは、後半戦にもつれ込むのだった。



「………いないか？」

「ええ、多分。だけどこんなに早く追いつかれるなんて思わなかったわ……」

「黒ウサギを焚き付ける餌としては、冗談でも効果抜群だったってことだな」

安全を確認した飛鳥は靡かせるようにステップを踏み振り返る。

「さ、それじゃ散策を開始しましょう。エスコートはお願いできるの

かしら、十六夜君？」

飛鳥の言葉に一瞬驚いた顔をする十六夜だが、すぐに唇の端を釣り上げて笑う。

「へえ？ 見るからに野蛮で強暴そうだと思われていたはずだけどな？」

「あら？ 細かいことを気にしては、素敵な紳士になれなくてよ？」

クスクスと互いをからかいあつて笑う二人。飛鳥は普段剣士に頭を悩まされているので、仲間とこうして笑う事に少しばかり新鮮なものを感じていた。

問題児同士、なんだかんだで息が合っているのだろう。

十六夜は肩を竦ませて飛鳥の隣に立つ。

「それでは僭越ながら、エスコートの真似事でもさせてもらいますよお嬢様。——そうだなあ。まずはこの赤い歩廊を散歩かな。商店街のようだし、ご当地品や限定ものを物色して回るのも観光の醍醐味って奴だ」

「そう。物好きな十六夜君がそういうなら、そうなのでしょう」

「そうだとも。お嬢様も女ならショッピングは好きだろ？」

「……………さあ？ 好きかもしれないし、そうじゃないかもしれないわ」

飛鳥の表情に一瞬、陰が差す。

もちろんその表情の変化を見逃す十六夜ではないのだが、飛鳥に手を引かれて質問する機会を逃す。

「さ、行きますよ。あの歩くキャンドルスタンドも、店で売っているかもしれないわ」

「そうだな。……………お嬢様が欲しいなら、その辺のを一体ぐらい盗つてもいいが？」

「あら、そんなのダメよ。ルール違反だわ」

飛鳥は左右に首を振った後、今までの中で最高に悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「どうしても欲しい物は——ギフトゲームに挑んで勝つ。それが

箱庭のルールでしょう?」

「ハハッ、そりやそうだ」

にこやかに箱庭における絶対遵守のルールを語る飛鳥に、哄笑を向ける十六夜。

十六夜と飛鳥の性格はどこか似たところがある。

片や世界に極上の快楽を求める快樂主義者。片やつまらなかつた人生に刺激を求めるお嬢様。

求める方法は違えど、この世界に来た目的が似ている二人は気が合うところが多々あるのだろう。少なくとも飛鳥は剣士という時よりも楽しそうな表情を十六夜に向けていた。

そんな事を知ってか知らずか、二人は嬉々とした表情で朱色に染まったガラスの歩廊を散策するのだった。

「前々から思っていたけれど………十六夜君はどうしてそんなに博学なの?」

飛鳥のこの問いは、十六夜がとある彫像に使用されているテクタイト結晶の解説を飛鳥に事に起因する。

問題児の中でも頭何個も抜けて十六夜の知識は豊富で、剣士からは知識がある分理屈で丸めこめないのやつかいと言われた事がある程だ。……そのすぐ後に剣士は耀にそもそも剣士は小学生レベルの頭脳しかないと言われていた。

「そうでもないさ。博学というよりは雑学程度だ。………お、歩くキャンドル発見!」

二足歩行で歩くキャンドルスタンドを見つけた十六夜は、飛鳥を置いて軽快に走って行く。

飛鳥はその背中を慌てて追いかける。歩くキャンドルスタンドも美術展の作品らしく、首………と云っていいのかは分からないが”ウィル・オ・ウィスプ”という看板を下げていた。

「二足歩行のキャンドルスタンドに浮かぶランタン………ならカボチャのお化けはいないのかしら? ハロなんとかっていうお祭りに出てくる妖怪なのだけど、十六夜君は知ってる?」

「んあ？」

突然の飛鳥の言葉に、十六夜は足を止めて眼を丸くする。

「おいおい、箱入りが過ぎるぜお嬢様。カボチャの怪物って、ジャック・オー・ランタンの事だろ？ 今時ハロウィンぐらい知っておけよ——と、そうか。お嬢様は戦後間もない時代から来たんだっけ？」

半身だけ振り返って質問する十六夜。

飛鳥が過ごしていた時代はハロウィンという文化はあまり認知されておらず、知識に差があるのは仕方のない事だ。

飛鳥にとつて、逆廻十六夜は未来人だ。

海外との交友が確立され、情報を入手する手段が豊富な時代から来た十六夜の知識は本人が言うように雑学程度しか知らないものもあれば、かなり専門的な知識もある。それも知りたいと思えば情報はそこら辺に転がっているようなものだったので情報には事欠かなかった。

対して飛鳥は、戦後間もないため情報網も確立されておらず一つの事を調べるのにも時間がかかる程だった。なので豊富な知識を持っている十六夜は、飛鳥の目には博学多才な少年に映るのだろう。

そんな十六夜の視線から、飛鳥は事情を察する。

「そう………十六夜君の時代には、もうハロウィンは珍しいものではないのね」

「まあな。お嬢様はハロウィンみたいなお祭りが好きなのか？」

「好きという程のものじゃないわ。ただ幼い頃に小耳に挟んだ時は……とても素敵で催しものだと思ったの」

飛鳥は空を仰ぎ、遠い場所を見るように瞳を細くさせる。

口元には、自嘲の笑みがあった。

「私が居た場所は、本当につまらない場所だったわ」

そう語る飛鳥の顔に陰が落ちる。

「財閥の令嬢なんて言えば聞こえはいいかもしれないけど……肝心の両親はもう居ないし、人心を操る力なんて持って生まれたせいで、隔離のような形で寮制の学校に閉じ込められていたもの」

「……………へえ？ それはお嬢様らしくねえな。さつさと抜け出せばよかったじゃねえか」

「そう、それよ。あの手紙が来なかったら、帰省に乗じて出ていくつもりだったの。行き先は……そうね。終戦のお祝いに、さつき話していたハロウィンでも経験しに行っていたわ」

歩廊の真ん中でおどけて笑う飛鳥。十六夜はその瞳に、哀愁の様なものを感じていた。

飛鳥の鬱屈とした生活の裏には、外の世界や文化に対する強い憧れがあったのだろう。

「Trick or Treat!!」——このフレーズ、とても可愛らしくて素敵じゃない？ 私も仮装をして、大人達に苦笑いされながらお菓子を貰ったわ」

「大きなカボチャの被りながら？」

「そうそう！ ああだけど、そうね今の私なら魔女でもいいわ。似合うと思わない？」

「そうだな。天野辺りははまり役とか言いそうだな」

そう相槌を打つ十六夜。飛鳥はくるりとスカートを大きく靡かせ、一回転する。

その仕草は普段の落ち着いた彼女よりも、ずっと少女らしいものに見えた。

「私……箱庭に来て本当に良かったわ。こんなに素敵な場所に来る事が出来たんだもの。噂のハロウィンを経験する事は出来なかったけど……実家で飼った殺しにされる人生なんかよりも、よっぽど明日に期待を持てるもの」

「……そうかい。そりゃ何よりだな」

くるりくるりと歩廊の真ん中で廻る彼女を、十六夜は静かに見つめていた。

クルリクルリ——ステップを踏んで、ターンターン。飛鳥は飛び込むように十六夜の顔を覗き込んだ。その表情に陰は無い。何時もの小憎たらしく、悪戯っぽい笑みを向ける。

「さ、それじゃあ行きましようか。一か所にずっといたら黒ウサギに

見つかるもの」

「ん、そうだな。それはそうなんだが……なあ、お嬢様」

「何?」

「俺と手を組んでみないか?」

十六夜の突然の勧誘にえ? と呆ける飛鳥。しかし十六夜は気にせず言葉を続ける。

「契約内容は至ってシンプルだ。俺とお嬢様で春日部や天野、”ノーネーム”の奴らやこの箱庭に住まう修羅神仏全員を巻き込んで、俺達の……いや、俺達でハロウィンをやる。それだけだ」

十六夜の語る契約の中心。それは二人——恐らく”ノーネーム”は強制参加——でハロウィンをやるうというものだった。

その内容に少々面喰い一つも飛鳥は十六夜に聞き返す。

「そ、それは随分大事になりそうだけれど……:要はハロウインのギフトゲームを主催する、という事?」

「ああ。箱庭で過ごす以上、やっぱり”主催者へホスト”は経験しないとな」

十六夜の言葉に、飛鳥はパアツと瞳を輝かせる。両手を合わせて感嘆の声を上げた。

「素晴らしい提案ね! スケールが大きくなって……何より楽しそうだわ!!」

「なら、俺と手を組んでくれるって事で受け取ってもいいの?」

「もちろんよ!」

「なら俺達が”主催者”するギフトゲームはハロウィンで予約しておくぜ。じゃないとどつかの天野が勝手に何かを始めそうだ」

「そうね。もしそんな事したらハロウインのゲームの時酷使してあげるわよ」

「ヤハハ! 相変わらず天野には手厳しいな、お嬢様」

二人は可笑しそうに笑いあう。

まるで悪戯を考えた子供のようになり、周りから見れば仲睦まじく遊ぶ少年と少女のようだ。

「とはいえ、今はまだ無理だけどな。まずは色々なギフトゲームに勝

たない」と

「もちろん。こんなに大きなお祭りなんだもの。凄いギフトが貰えるゲームがあるはずよ」

「YES！ 祭典では創作系のギフトを競い合う二大ギフトゲームが進行中なのですよ！」

「創作系？ 何か作るの？」

「はいな。耀さんの持つ”生命の目録”のように人造・霊造・神造・星造を問わず、様々な創作系ギフトを持つもの達が参加できるギフトゲームなのでございます♪」

「へえ？ よく分からんが、凄いギフトが貰えるのか？」

「それはもう！ 新たにフロアマスターとなったサンドラ様から直々に恩恵を与えられるとなれば、よっぽどのものでございますよ！」

「そう。なら春日部さんに連絡して出場してもらおうかな。伝言お願いね、黒ウサギ」

「YES！ 任されたのですよ♪ それではそれでは御二人様！ 今から向かうので黒ウサギ二オトナシク捕マツテクレマスヨネ？」

壮絶な笑顔で問う黒ウサギ。二人は即答した。

「断る！」

瞬間、十六夜は地面にクレーターをつくる勢いでスタートダッシュ。飛鳥は反対方向に逃げるが、そこから現れたレティシアに捕まってしまう。

「ぎゃー！」

「フフ。観念してもらおうぞ飛鳥」

黒い翼を畳み、微笑しながらブラブラと抱きつくレティシア。

飛鳥は仕方なさそうに降参の意味を込めて両手を上げる。最後に十六夜に向かって叫ぶ。

「十六夜君！ 貴方が最後の一人よ！ 簡単に捕まったら許さないわ！」

「了解！ 任せとけお嬢様！」

ヤハハハハハハ！ そう叫びながら赤窓の歩廊を走り抜ける。しかし”箱庭の貴族”と呼ばれる黒ウサギも負けじと並みの神仏です

ら持て余す身体能力を発揮して追いかける。

「逃がさないのですッ！ 今日という今日は堪忍袋が爆発しました！ 捕まえたら黒ウサギの素敵な説教を長々と聞かせて差し上げるのですよーッ!!」

「ハッ！ それは素敵な申し出だ！ 帝釈天の眷属のご説法、聞かせたいのなら捕まえてみる！」

十六夜は更に加速する。直線に逃げるのを止めて、建造物を蹴り上がる様に跳躍して上り、尖塔群の頭部に躍り出る。黒ウサギも壁を垂直に走って追いつく。

騒ぎを聞きつけたギャラリーの一人が、黒ウサギを指さして叫んだ。

「アレを見る！ ウサギだ！ ”月の兎”が誰かと戦っているぞ！」

”箱庭の貴族”がこんな最下層に!!”

「あれ、逆廻と黒ウサギじゃん。何してるんだ？ こんなところで」

「何してるの？ 早く行くわよ」

「まさかサンドラ様の就任式の為にわざわざ上層から祝いに来たのか!?!」

観衆の様々な声を無視して黒ウサギも屋根に上った。

十六夜と黒ウサギは激しく睨み合いながら距離をとる。

そしていくつかの言葉を交わす。それはゲームに勝った方が互いに一回分の首輪を賭けるといふものだった。

物騒に笑う十六夜の眼には先ほどまでの遊び心は見当たらず、真剣なものに変わっていた。

互いの自由を賭けた、対等な勝負。それを望まれては全力で挑まざるを得ない。

問題児と黒ウサギの追いかけてこは、最終ラウンドを迎えようとしていた。

18話 おや、魔王についてのお知らせです

「随分と派手にやったようじゃの、おんしら」

「ああ。ご要望通り祭りを盛り上げてやったぜ」

「胸を張って言わないで下さいこのお馬鹿様!!」

スパアーン! と黒ウサギのハリセンが奔る。その後ろでジンが痛い頭を抱えていた。

今彼等がいるのは運営本陣の謁見の間だ。床全体に敷かれた赤い絨毯と、部屋のきらびやかな装飾が荘厳な雰囲気を出している。

何故彼らがこんなところにいるのかというと、端的に言えば二人の鬼ごっこが過激すぎて街に被害をもたらしたためである。

そしてどちらが先に捕まえたか言い争っている所を二人は連行され、運営本陣の謁見の間まで連れてこられたのだ。

白夜叉は二人のやり取りを見て必死に笑いを噛み殺しつつ、なるべく真面目な姿勢を見せる。今は誕生祭の主賓という立場の上、サンドラも傍に控えているのだ。はしたない真似は出来ないだろう。

サンドラの側近らしき軍服姿の男が鋭い目つきで前に出て、十六夜達を高圧的に見下す。

「ふん!」ノーネーム”分際で我々のゲームに騒ぎを持ち込むとはな! 相応の厳罰は覚悟しているか!?”

「これマンドラ。それを決めるのはおんしらの頭首、サンドラである?」

白夜叉がマンドラと呼ばれた男を窺める。

サンドラは謁見の間の上座にある豪華な玉座から立ち上がると、黒ウサギと十六夜に声を掛けた。

「箱庭の貴族」とその盟友の方。此度は”火竜誕生祭”に足を運んでいただきありがとうございます。貴方達が破壊した建造物の一件ですが、白夜叉様のご厚意で修繕してくださいませ——はずだったのですが……」

困ったように苦笑するサンドラ。その笑みに”ノーネーム”一同は頭に疑問符を浮かべる。

「どうしたんですか？」

「実は破壊されたはずの建造物が破壊されていなかったと言いますか……。私達も混乱している状態なのですが、街の被害は落下した瓦礫のみなんです」

「？ 瓦礫とは、十六夜さん」が”破壊した時計台の事でございますよね？ ならば街の被害はもつと酷いはずではないのでしょうか？」

「おい黒ウサギ。まるで俺だけが悪いような言い方をするなよ」

「事実じゃないですか！ 現に黒ウサギは街を破壊なんてしてません！！」

「ふ、二人とも落ち着いてください！」

サンドラの前だというのにいつものように口論(?)を始める二人を、ジンが何とか諫める。

十六夜はつまらなそうに肩を竦めるが、すぐに真面目な顔つきになり白夜叉に問いかける。

「しかし確かに妙な話だな。今の話が本当だとすると、俺が破壊した建造物は元通りになってるって事になるんだが？」

「それは私もわからん。ただ、本当に何事もなかったように時計台があるのだからな。瓦礫は確かに時計台のものだと分かっているのにな、予想できる事は——」

「破壊された個所を復元した……ってことか」

十六夜の呟きに白夜叉はうむ、と頷く。

「復元、ですか……。まるで剣士さんのようなギフトですね」

「もしかしたらその剣士の仕業かもしれないぜ、御チビ」

「いやいや、流石にそんなこと……ないですよね？」

「僕に聞かれても困るよ黒ウサギ……」

そんな三人のやり取りをサンドラと白夜叉は苦笑しながら見ていた。

「ともかく、負傷者は奇跡的になかったようなので、この件に関して私からは不問とさせていただきます」

サンドラの言葉にチツ、と舌打ちするマンドラ。意外そうに声を上げる十六夜。

ほつと胸を撫で下ろす黒ウサギ。十六夜は軽く肩をすくませた。

「……………さて、そろそろ、昼の続きを話しておこうかの」

ついさつきまで纏っていた陽気な雰囲気をつつ込めて、真面目な雰囲気を出す。

白夜叉が連れのを者に目配せする。サンドラも同士を下がらせ、側近のマンドラだけが残る。この場に残ったのは彼らを除いて十六夜・黒ウサギ・ジンの三人だけだ。

サンドラは人が居なくなると、固い表情と口調を崩し、玉座を飛び出してジンに駆け寄り、少女つぼく愛らしい笑顔を向けた。

「ジン、久しぶり！ コミュニティが襲われたと聞いて随分と心配していたー！」

「ありがとう。サンドラも元気そうよかった」

同じく笑顔で接するジン。サンドラは鈴の音のような声で一層はにかんで笑う。

「ふふ、当然。魔王に襲われたと聞いて、本当はすぐに会いに行きたかったんだ。けどお父様の急病や継承式のことですつと会いに行けなくて」

「それは仕方ないよ。だけどあのサンドラがフロアマスターになっていたなんて——」

「その様に気安く呼ぶな、名無しの小僧!!」

ジンとサンドラが親しく話していると、マンドラは獠猛な牙を？き出しにし、帯刀していた剣をジンに向かって抜く。

ジンの首筋に触れる直前、その刃を十六夜が足の裏で受け止めた。蹴り返した十六夜は軽薄な笑みを浮かべているも、その瞳は笑っていない。

双眸には触れば切れそうな鋭い光が灯っている。

「……………おい、知り合いの挨拶にしちや穏やかじゃなえぜ。止める気なかつただろオマエ」

「当たり前だ！ サンドラはもう北のマスターになったのだぞ！ 誕生祭も兼ねたこの共同祭典に”名無し”風情を招き入れ、恩情を掛けた拳句、馴れ馴れしく接されたのでは”サラマンドラ”の威厳に関わ

るわ！ この”名無し”のクズが！

「今の言葉、うちのロリコンが聞いたら激怒するから今度から気をつける。じゃねえとさつき以上の面倒事に巻き込まれるぞ」

「どういう事だ、貴様!!」

「言葉通りの意味だよ」

睨み合う十六夜とマンドラ。慌ててサンドラが止めに入る。

「マ、マンドラ兄様！ 彼らはかつての”サラマンドラ”の盟友！

此方から一方的に盟約を切った挙句にその様な態度を取られては、我らの礼節に反する！」

「礼節よりも誇りだ！ その様な事を口にするから周囲に見下されるのだと——」

「これマンドラ。いい加減に下がれ」

呆れた口調で諫める白夜叉。しかし今度は怒りの矛先を十六夜から白夜叉に変え、睨み返すマンドラ。

「そもそも”サウザンドアイズ”も余計な事をしてくれたものだ。同じフロアマスターとはいえ、越権行為にも程がある。『南の幻獣・北の精霊・東の落ち目』とはよく言ったもの。此度の噂も、東が北を妬んで仕組んだ事ではないのか？」

「マンドラ兄様ツ!! いい加減にしてください!!」

サンドラが見かねて叱りつける。いくらなんでも失言が過ぎた。

しかし事情を知らない”ノーネーム”一同は、顔を見合わせて首を傾げている。

「おい、噂って何の事だ？ 俺達に協力して欲しい事と関係があるのか？」

うむ、と白夜叉は全員の顔を一度見回した後、一枚の封書を取り出した。

「この封書に、おんしらを呼び出した理由が書いてある。……………己の目で確かめるがいい」

怪訝な表情のまま十六夜は手紙を受け取り、内容に目を通す。

内容を確認した十六夜は表情からは、普段の軽薄な笑みが完全に消

えいていた。

それを不思議に思った黒ウサギは、ピョンと跳ねて十六夜の後ろに立つ。

「十六夜さん……………？ 何が書かれているのです？」

「自分で確かめな」

珍しく抑揚のない声音の十六夜は、背中越しに手紙を渡す。

其処にはただ一文、こう書かれていた。

『火龍誕生祭にて、”魔王襲来”の兆しあり』

「……………?!？」

黒ウサギは絶句した後、呻き声の様な声を漏らす。次に確認したジーンも同様だ。顔から血の気が引き、とても恐ろしいものを見るような目でその手紙を何度も読み返す。

十六夜は一人、鋭い瞳のまま無表情に白夜又へ問い返した。

「正直意外だったぜ。てつきりマスターの跡目争いとか、そんな話題だと思っただがな？」

「何ッ!？」

牙を?くマンドラを慌てて窘めるサンドラ。白夜又を無視して話を進める。

「謝りはせんぞ。内容を聞かずに引き受けたのはおんしらだからな」

「違いねえ。……………それで、俺たちに何をさせたんだ？ 魔王の首を取れって言うなら喜んでやるぜ？ つーかこの封書はなんだ？」

白夜又がサンドラに目配せをする。機密を話す合意が欲しかったのだろう。

サンドラが頷くと、白夜又は神妙な面持ちで語り始めた。

「まずこの封書だが、これは”サウザンドアイズ”の幹部の一人が未来を予知した代物での」

「未来予知?」

「うむ。知つての通り、我々”サウザンドアイズ”は特殊な瞳を持つギフト保持者が多い。様々な観測者の中には、未来の情報をギフトとして与えておる者もおる。そやつらから誕生祭のプレゼントとして贈られたのが、この”魔王襲来”という予言だったわけだ」

「なるほど。予言という名の贈り物へギフト〜ってことか。それで、この予言の信憑性は？」

「上に投げれば下に落ちる、という程度だな」

白夜叉の例えに、一瞬で疑わしそうに顔を歪ませる十六夜。

「……………それ、予言なのか？ 上に投げれば下に落ちるのは当然だろ」

「予言だとも。何故ならそやつは”誰が投げた”も”どうやって投げた”も”何故投げた”も解っている奴での。ならば必然的に”何処に落ちてくるのか”を推理することができるだろ？ これはそういう類の預言書なのだ」

はい？ と、十六夜は呆れた声を上げる。黒ウサギ達も周囲の人間もその事実言葉に言葉を失っている。マンドラに至っては顎が外れるほど愕然としていた。だが仕方がないだろう。

犯人も、犯行も、動機も、全て分かっているのに、未然に防ぐことが出来ない……………というより、防ごうとしないというのだ。

マンドラは顔を真っ赤にし、怒鳴り声を上げた。

「ふ、ふぎけるな!! それだけ分かっているながら魔王の襲来しか教えぬだど?! 戯言で我々を翻弄しようという狂言だ!! 今すぐにでも棲み処に帰れッ!!」

「に、兄様……………これには事情があるのです……………!」

憤るマンドラを必死に窘めるサンドラ。

白夜叉は扇で口元を隠し、無視して明後日の方向を向く。

十六夜は頭の中で情報を整理し、確認するように白夜叉へ問う。

「なるほど。事件の発端に一石投じた主犯は既に分かっている。……………けど、その人物の名前は出すことは出来ないんだな？」

「うむ……………」

歯切れの悪い返事をする白夜叉。

十六夜はニユアンスを変えてもう一度強く問い直す。

「今回の一件で、魔王が火龍誕生祭に現れる為、策を弄した人物がほかにいる————その人物は”口に出すことが出来ない立場の相手”ってことなのか？」

ハッとジンが声を漏らし、サンドラを見る。

北側へ来る際、白夜叉との会話にはこうあった。

『幼い権力者をよく思わない組織が在る』

もしもその人物が『口に出す事も憚られる人物』だというのなら、それは――

「まさか……………他のフロアマスターが、魔王と結託して”火龍誕生祭”を襲撃すると!?”

ジンの叫び声が謁見の間に響く。それは想像するのも恐ろしい事だった。

秩序の守護者である”階層支配者”が、その秩序を乱すという暴挙の矛盾。仮に十六夜の予想が正しかったとしたら、それは秩序が秩序を蹂躪するという事になる。

白夜叉は哀しげに深く嘆息した後、首を左右に振った。

「まだわからん。この一件はボスから直接の命令でな。内容は預言者の胸の内一つに留めておくように厳命が下っておる。故に私自身はまだ確信には至っていない。……………しかし、サンドラの誕生祭に北のマスター達が非協力的だったことは認めねばなるまいよ。何せ共同主催の候補が、東のマスターである私に御鉢が回ってきたほどだ。北のマスターが非協力だった理由が”魔王襲来”に深く関与しているのであれば……………これは大事件だ」

唸る白夜叉と、絶句する黒ウサギとジン。

しかし十六夜は一人、得心がいかないように首を傾げていた。

「それ、そんなに珍しい事なのか?」

「へ!?!」

「お、おかしなことも何も、最悪ですよ! フロアマスターは魔王から下位のコミュニティを守る、秩序の守護者! 魔王という天災に対抗できる、数少ない防波堤なんですよ!?!」

「けど所詮は脳味噌のある何某だ。秩序を預かる者が謀をしないなんてのは、幻想だろ?」

一瞬、十六夜は冷めたような笑いを浮かべた。彼のいた世界は、秩序や政を預かる者が道を踏み外すことなど、さほど珍しい話ではな

かった。そんな冷めた時代から十六夜は来たのだ。察した白夜叉は、静かに瞳を閉じて首を振る。

「なるほど、一理ある。しかしなればこそ、我々は秩序の守護者として正しくその何某を裁かねばならん」

「けど目下の敵は、予言の魔王。ジン達には魔王のゲームに協力してほしいんだ」

サンドラの言葉に、合点がいたという顔で一同は頷く。

魔王襲来の予言があった以上、これは新生”ノーネーム”の初仕事でもある。

ジンは事の重大さを受け止めるように重々しく承諾した。

「分かりました。”魔王襲来”に備え、”ノーネーム”は両コミュニティに協力します」

「うむ、すまん。協力する側のおんしらにすれば、敵の詳細が分からぬまま戦うことは不本意であろう。……だが分かって欲しい。今回の一件は、魔王を退ければよいというものではない。これは箱庭の秩序を守るために必要な、一時の秘匿。主犯にはいずれ相応の制裁を加えると、われら双女神の紋に誓おう」

「サラマンドラ”も同じく。——ジン、頑張って。期待してる」
「わ、分かったよ」

ジンは緊張しながら頷く。白夜叉は硬い表情を一変させ、哄笑を上げた。

「そう緊張せんでもよいよい！ 魔王はこの最強のフロアマスター、白夜叉様が相手をする故な！ おんしらはサンドラの露払いをしてくれればそれで良い。大船に乗った気でおれ！」

双女神の紋が入った扇を広げ、呵々大笑する白夜叉。

しかしジンが快諾する一方で、スツと目を細めて不満そうな双眸を浮かべる十六夜。

それが気になった白夜叉は、口元を扇で隠しながら苦笑を向けた。

「やはり露払いは気に食わんか、小僧」

「いいや？ 魔王つてのがどの程度か知るにはいい機会だしな。今回は露払いでいいが——別に、”何処かの誰かが偶然に”魔王を倒

しても、問題はないよな？」

挑戦的な笑みを浮かべる十六夜に、呆れた笑いで返す白夜叉。

「よかろう。隙あらば魔王の首を狙え。私が許す」

こうして交渉が成立。

その後、一同は謁見の間で魔王が現れた際の段取りを決めて過ごした。

十六夜の発言を不謹慎だと告げるマンドラは“ノーネーム”をゲームから追放するように訴えたが、白夜叉とサンドラに説き伏せられ、十六夜達は渋々協力を受け入れられるのだった。

『さて、貴方達。明日の段取りは分かっているわよね？』

『もちろんですマスター』

『つたく、なんでいちいち明日まで待たなきゃならないんだよ。こういうのはさっさと終わらせた方がいいだろうに』

『我慢なさい。明日には大会の決勝があるのだから、それまでの辛抱よ』

『ねえ、マスター？ どうしてそれまで待たなきゃいけないのかしら？』

『そんなの決まってるじゃない。決勝に出場するくらいなら——いい玩具へおもちゃ』がいるかもしれないじゃない』

『……ま、一理あるか』

『そうね。じゃあ明日まで私と向こうで遊んでいきましょう、マスター』
『嫌よ』

『ああん。相変わらずつれないですね、マスターは』
『勝手に言っただけじゃない。……とところでハンバート、貴方は明日の事を理解しているのかしら？』

『……………』

『聞いているの？ ハンバート』

『え？ あーうん聞いてた聞いてた』

『……信用しにくい返事ね』

『貴方、まだその名前に慣れてないの？』

『ああ、まあいきなりだったし……』

『早く慣れろ。じゃねえとお前は参加できないんだからな』

『……………善処します』

『……………明日、すごく不安だわ』

19話 おや、魔王と登場のお知らせです

昨日の十六夜達が起こした騒ぎ、及び魔王襲来の話を聞いてからの翌日、耀が見事決勝進出を果たした大会の決勝戦が行われようとしていた。

その開会宣言の為に黒ウサギは舞台の中央に立ち、息を豊満な胸一杯に吸い込んで観客席に満面の笑みを向ける。

『長らくお待ちいたしました！ 火竜誕生祭のメインギフトゲーム”造物主達の決闘”の決勝戦を始めたいと思います！ 進行及び審判は”サウザンドアイズ”の専属ジャッジでお馴染み、黒ウサギが務めさせていただきます♪』

満面の笑みを振りまく黒ウサギに会場からワツと歓声上がる。そして、それ以上の奇声が舞台を揺らした。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお月の兎が本当にきたああああああああああああああああああああああああああ!!」

「黒ウサギいいいいいいいいいいいい!! お前に会うために此処まで来たぞおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

「なんか迷ったんだけど……何処おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

「今日こそスカートの中をみてみせるぞおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

割れんばかりの熱い情熱を迸らせる観客たち。実に六割の観客が似たような事を叫んでいる。

流星の黒ウサギも笑顔を見せて手を振りながらも、へによりとウサ耳を垂れさせて怯んだ。

十六夜達とは少し違った危険。形容し難い身の危険を黒ウサギは感じたのだろう。実に気の毒である。

「……………。随分と人気者なのね」

観客の六割が熱狂的な歓声を上げる中、あくまで冷静な残り四割のグループである飛鳥は生ゴミの山を見るような完全に冷めきった目で観客席を見下ろす。その視線の先には、選手よりもサンドラよりも

妙な存在感のある『L・O・V・E 黒ウサギ♥』の文字があつた。
(これも日本の外の異文化というものなのかしら………頭を柔軟に
して受け入れないと……)

ふうと息を吐いて観客席へげんじつから一度目を逸らす。

しかし、彼らが熱狂するのも飛鳥だって少しは理解している。

事実、黒ウサギは可愛い。その事に関しては文句は言わないし、逆に可愛くないという者がいれば小一時間その可愛さを説いて分かせてやってもいいとさえ思っている。

だがそれでも、あそこの領域にはたどり着かないだろうと飛鳥は思うのであつた。

十六夜はその有象無象の観客席の声を聞いて、ハツと重要な事を思出し神妙な顔つきになる。

「そーいや白夜叉。黒ウサギのミニスカートを絶対に見えそうで見えないスカートにしたのはどういう見だオイ。チラリズムなんて趣味が古すぎるだろ。昨夜語り合ったお前の芸術に対する探究心は、その程度のものなのか？」

「そんな事を語り合っていたの？」

身内にもあの観客席にいる者達と変わらない馬鹿がいたのだが、彼女の馬鹿じゃないの？ という言葉はバカ二人二人には届くはずもなかつた。

その馬鹿の片割れである白夜叉は、双眼鏡にくらいついていた視線を外して不快そうに十六夜を一瞥する。その表情は十六夜に対する……志を同じくする者に対しての明確な落胆の色が見え隠れしていた。

「フン。恩師も所詮その程度の漢であつたか。そんな事ではあそこに群がる有象無象と何ら変わらん。おんしは真に芸術を解する漢だと思つておつたがの……」

「……………へえ？ 言つてくれるじゃねえか。つまりお前には、スカートの中身を見えなくすることに芸術的理由があると言うんだな？」

無論、と白夜叉は幼い顔立ちをした頭を縦に振る。まるで決闘を受

けるかのような気迫で白夜叉は凄む。

「考えてみよ。おんしら人類の最も大きな動力源はなんだ？ エロか？ 成程、それもある」

白夜叉はかっと目を見開いて一氣にまくしたてる。

「だが時にそれを上回るのが想像力！ 未知への期待！ 知らぬ事から知る事への渴望!! 小僧よ、貴様程度の漢ならばさぞ足数々の芸術品を見てきたことだろう!! もう一人の小僧が足元にも及ばない程に、だ。そしてその中にも、道と言う名の神秘があったはず!! 例えばそう！ モナリザの美女の謎に宿る神秘性ツ!! ミロのヴィーナスの腕に宿る神秘性ツ!! 星々の海の果てに垣間見るその神秘性ツ!! そして乙女のスカートに宿る神秘性ツ!! それらの圧倒的な探究心は、同時に至る事の出来ない苦渋！ その苦渋はやがて己の裡においてより昇華されるツ!! 何物にも勝る芸術とは即ち——己が宇宙にあるツ!!」

ズドオオオオオオオオオオン!!

そんな効果音が幻聴で聞こえてきそうな雰囲気言い切る白夜叉に、十六夜は硬直する。

「なッ……………己が宇宙の中に、だと……………!?!」

自分の知らない新境地。未知のフロンティア。人類が初めて月に降り立った時のような、そんな衝撃を十六夜は受けた。

一方で、スカートの中身を熱く語る白夜叉に十六夜とは別の意味の衝撃を受けるサンドラ一同。その顔には明らかに戸惑いの表情が浮かんでいる。

「し、白夜叉様……………? 何か悪いものでも食べたのですか……………!?!」

「見るな、サンドラ。馬鹿がうつる」

「貴方はその子の視界にその馬鹿二人が映らないようにお願いね。何か悪影響があったらウチのロリコンに怒られるわ」

「……………貴様らのコミュニティにはまともな奴がいないのか?」

「少なくとも私以外では一人ぐらいしか知らないわ」

マンドラが不安そうなサンドラの顔をそっと隠し、呆れた顔で十六夜達を見る。その目は先程の飛鳥の目と同じくらい冷え切っていた。

しかしその位でへこたれる二人ではない。冷たい視線など、芸術を追い求める彼女には針ほどの痛みもない。小さな手で固い握り拳を作って、己の説法をこう締めた。

「そうだッ!! 真の芸術は内的宇宙に存在するッ!! 乙女のスカートの中身も同じなのだ!! 見えてしまえば只々下品な下着たちも――

――見えなければ芸術だッ!!」

再びズドオオオオオオオオオオ!! という効果音が聞こえるかのような顔で彼女は言い切った。

其処には本来あるべき乙女的な恥じらいは無く、外聞も介在しない。只々、ロマンの求道者が凹凸の殆ど黙視できない胸を大きく張って十六夜を睨んでいた。

その双眸には一点の曇りもない。右手には好敵手と認めた十六夜に差し出す双眼鏡が握られていた。

「この双眼鏡で、今こそ世界の真実を確かめるがいい。若き勇者よ。私はお前が真のロマンに到達できる者だと信じておるぞ」

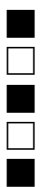
「……………ハッ。元魔王様にそこまで煽られて、乗らないわけにはいかねえな……………!」

ガッ! と双眼鏡を受け取り、二人は仲良く黒ウサギのスカートの裾を目で追う。

きつと訪れる。そう信じてやまない、奇跡の一瞬を逃す事の無いように……………。

因みに飛鳥はというと、そんな二人を空気と思い、今から始まる耀の決勝戦に集中することにしたのだった。

十六夜も飛鳥も、そしてサンドラや観客席の人達もこの時は思いもしなかった。たった数十分後にこの決勝戦よりも”盛り上がる”ゲームが開催される事になるなど誰も思わなかったのだ……………。



「……………負けてしまったわね、春日部さん」

「ま、そういう事もあるさ。気になるなら後でお嬢様が励ましてやれ

よ」

ゲームが耀の敗北という結果に終わり、気落ちする飛鳥と反対に軽快に笑う十六夜という対照的な反応が特別席では見られた。

飛鳥を励ます気配のない十六夜に代わって、中央に控えていたサンドラと白夜又は励ますように声を掛けた。

「シンプルなゲーム盤なのに、とても見応えのあるゲーム。貴方達が恥じる事は何も無い」

「うむ。シンプルなゲームはどうしてもパワーゲームになりがちだが、中々堂に入ったゲームメイクだったぞ。あの娘は単独の戦いよりそちらの才能があるのやもしれんな」

そう、耀はとても奮戦していたのだ。上位コミュニティである”ウィル・オ・ウイスプ”に對して一歩も引かないどころか、敵の挑発をもものともせず、逆に相手の冷静さを奪って最低限のやり取りで重要な情報を得てそれを生かす。これは中々できる事ではない。

結局は相手との力の差で負けはしたものの、相手のパートナーさえ抑える事が出来る仲間がいたのならば耀の勝利もありえただろう。

その事を十六夜も理解できているようで、ヤハハと笑いながら椅子に深く座りなおす。

「春日部にパートナーだったらあのロリコンぐらいしか思いつかねえな」

「そう？ 戦力的に考えても十六夜君が妥当じゃないかしら？」

「ヤハハ。俺の場合パートナーって関係にはならねえだろうな。なんせ俺も春日部も前衛タイプだしな」

「そう言われてみればそうね……」

十六夜と耀が互いに各個撃破に向かい、フォローするというのは少し違うというシーンが容易に頭に思い浮かんだのかあつさりと納得する。

無論、それなら自分がパートナーでもいいのでは？ と思ったが、格上の相手には自分のギフトが効かない以上、今回の試合においても自分は足手まといになりかねないと気付き口にするのはやめた。

今のコミュニティの戦力で分けるなら十六夜と飛鳥、耀と剣士が一

番ベストだと頭の片隅で理解する。

「確かにあの小僧ならおつむが多少弱いが、あの力はトリツキーさをうりとしているあの娘とは相性がいいだろうな」

「地形を変えられるなら素早い春日部にはうってつけだな」

白夜叉の言葉に軽く肩を竦める十六夜。飛鳥はおもしろくなさそうな顔をしていたが、やはりその通りだと思ってしまっているので反論はないし、難癖もつけない。

と、話がひと段落したのを見計らって、傍らで十六夜達の話聞いていたサンドラがおずおずと白夜叉に問いかける。

「さつきから話題になってるロリコンさんとは、どんな方なんですか？」

「ほう、気になるか？」

「多少は。このような素晴らしいゲームをした人のパートナーとなる人物なのですから」

「確かに今の話だと凄い人のように聞こえるからの……」

ふむ、と少し考え込んだ後ににやりと悪戯好きの少年のような笑みを浮かべて言う。

「サンドラよ、よく聞け」

「は、はい」

「そやつはな………名前を通りロリコンなのだっ!!」

「え、ええ!?!」

白夜叉の言葉に衝撃を受けるサンドラ。そんなサンドラの反応がお気に召したのか、白夜叉は演技がかった口調で言葉を続ける。

「奴は“ノーネーム”の子供が理由で加入して、ほぼ毎日コミュニケーションの子供たちを大人を見るのとは違う特別な視線で追い回し、過激なスキンシップをしているのだ」

「しせ……すきん……?」

「そうだ。毎日毎日子供と戯れるのを生きがいにして、夜に幼女を連れて徘徊してた事もあるんだぜ」

「はい……かい……」

白夜叉の企みに気づいた十六夜が悪乗りして、大げさなりアクシヨ

ンと共に話す。それを聞いているサンドラの頭は処理墮ちして混乱しているのが見て取れた。

「かくいう私も出会いがしらに熱い抱擁をされての……。どうやら見た目が幼ければ誰でもいいようだな……」

「ほ、抱擁!？」

「そーいや俺も、この前遂にコミュニティの子供と寝たって聞いたぜ。あれには流石の俺もビビったぜ」

「ね、寝た……!？」

「ええい！ それ以上その下衆の話をするのはやめろ!! 耳が穢れる!!」

完全に混乱したサンドラを庇うようにマンドラが怒鳴り声をあげてサンドラを二人から引き離す。しかし二人の顔は不快さも不満気な雰囲気もなく、何処かやりきった職人のような表情をしていた。

マンドラは低俗なものを見る目で十六夜を見る。

「やはり”ノーネーム”には低俗な者しかないようだな……」

「一応訂正しておく、さっきの話は二人が誇張してるだけで本人はいたって普通のロリコンよ。それと、残念だけど貴方が思ってるほど低俗な人は居ないわよ」

マンドラの言葉にカチンときた飛鳥が若干の怒気を滲ませる。その口調が気に入らなかつたのかマンドラも飛鳥に対して怒気を滲ませる。

今にも口論が起こりそうな雰囲気を感じたのか、サンドラが落ち着いてくださいと気取った雰囲気はがれた口調でなだめる。

「カカカツ。マンドラも冗談が通じない男だのお……。つと、どうかしたか？ 小僧」

「ん？ ああ、いやたいしたこと無いんだが……」

二人の喧騒など気にする素振りもなく、彼の視線は箱庭の天蓋に向けられていた。

そして視線を天蓋に向けたまま怪訝そうな表情で白夜叉に問う。

「……………白夜叉。アレはなんだ？」

「何？」

十六夜に釣られて白夜叉も上空へ目を向ける。観客の中にも十六夜と同じく異変を感じて者がいたのかにわかになぞわつき始める。

遙か上空から、黒い雨のようにばら撒かれる真つ黒の封書。黒ウサギはすかさず落ちてきた封書を手に取り、開封して中身を読む。

「黒く輝く”契約書類”……………ま、まさか!?!」

深紅の封蝋には笛を吹く道化師の印。その”契約書類”にはこれから始まる戦いの開会宣言が書かれていた。

『ギフトゲーム名：”The PIED PIPER of HAM ELIN”

・プレイヤー一覧：現時点で三九九九九外門・四〇〇〇〇〇〇外門・境界壁の舞台区画に

存在する参加者・主催者の全コミュニティ。

・プレイヤー側・ホスト指定ゲームマスター：太陽の運行者・星霊
白夜叉。

・ホストマスター側 勝利条件：全プレイヤーの屈服。
・プレイヤー側 勝利条件：一・ゲームマスターを打倒。

二・偽りの伝承を砕き、真実の伝承を掲げよ。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

”グリムグリモワール・ハーメルン”印』

「魔王が……………魔王が現れたぞオオオオオオ——!!!」

誰かが叫んだ。



——境界壁・舞台区画。大祭運営本陣営、貴賓室。

豪華な飾り付けが施された貴賓室を、重苦しく殺伐とした雰囲気
が支配している。

本来招くはずだった来客がゲームの外にいる為不在となっており、
対等のゲームを定めるための交渉を謁見の間で行う訳にもいかない

ので、この貴賓室で行われる事となった。

部屋の中央を占拠する大きなテーブルの片側にサンドラ、マンドラ、ジン、十六夜と座っており、その対面には白と黒の斑のワンピースを着た少女と布面積の少ない白装束を着た女が座っていた。

彼女たちが何者なのか、そしてどうしてこのような状況になっているのかというと、説明するのは簡単だ。

斑の少女が今回ゲームを仕掛けてきた魔王で、今はそのゲームに対して異議申し立てをしている最中だという事だ。

（ふうん？ あの露出度激しい女が”ラッテンヘネズミ”で何故ここに来てない軍服ん男が”ウエーザー河”。あとサンドラを倒した巨人が”シュトロムへ嵐”だったか？ ならこのロリは……いや、後でいいか）

今はそこが重要ではないと判断した十六夜は一度思考を止める。

「それでは、これよりギフトゲーム”The PIED PIPER of HAMELIN”の審議決議、及び交渉を始めます」

厳かな声で黒ウサギが告げる。その瞬間サンドラ側の者達の身体が少しだけ強張った。

「ちよつといいかしら？」

が、斑の少女の静止が入り、出鼻を挫かれて身体に入った力が少しだけ脱力する。

「……………なんででしょうか？」

黒ウサギも同じなのか、少し不機嫌そうな様子で少女に応える。

しかし少女はそんなのお構いなしに薄く微笑んで黒ウサギに告げた。

「ごめんなさい。まだ此方のメンバーが揃ってないの。もう少ししたらその二人が来ると思うから、もう少しだけ待ってもらえるかしら？」

申し訳なさそうな顔で言う少女だが、少しだけこの雰囲気に対してのからかいが見て取れる。

それにマンドラも気づいたのか少女に対して棘を飛ばす。

「ふざけるなよ貴様。いきなりこのようなゲームを仕掛けて来ただけ

でも無礼であるのに、その上メンバーが揃ってないから待てだど？
随分と厚かましいではないか」

「だからわざわざこうやって下手に出てお願いしてるのよ？ それ
に、そっちが四人ならこっちも四人出席するのが”対等” っていうもの
じゃない？」

「ぐっ……………」

この場はゲームを対等に進めるための場だ。だから少女の言っている事はもつともである。

「……………おい、ちよつといいか斑ロリ」

「なにかしら」

十六夜の中で何かが引つかかり、その引つ掛かりを少女に投げかける。

「お前は後二人この場に来ると言ったな？ だが俺の知る限り、お前の
のコミュニケーションでまともに話せそうなのはこの場にいないウエー
ザーぐらいだ。あと一人は巨人のシュトロムって訳じゃないさそうだ
し…………。てめえはいったい誰を待ってるんだ？」

「そうねえ……………端的に言えば迷子よ」

「迷子だと？」

「そう、手のかかる迷子よ……………。ふふっ、どうやらウエー
ザーが連れて来たみたいね」

少女がそういうと貴賓室の扉の向こうから微かに話し声が聞こえてくるのに気付いた。

十六夜達五人は少女から視線を外して扉の方に注意を向ける。

『つたく、何でてめえは先に行かせたのに迷子になってんだよ』

『人波に流されて、な……………』

『何で少しカッコよさげに言ってるんだよ……………』

『え、こういうキャラで通せて事じゃないの？』

『ちっげーよ！ なんてお前そんなに面倒くさいんだよ！』

『まあまあ落ち着きなよ上座衛門君』

『だから俺は上座衛門じゃねーって言ってるんだろ！』

『あ、あそこの扉じゃない？』

『話聞けつての！　というかその一つ手前の扉だ馬鹿野郎』

『馬鹿って言った方が馬鹿だって習わなかったのかよ！』

『人の名前未だに覚えられねえ奴にはぴったりだろうが』

扉の向こうから聞こえてくる声は、この非常事態に似つかわしくない随分と低レベルな会話だった。

この事に少女の口角がひくつとつり上がったが、自分の優位な立場を崩さないためにも何とか平静を保つ。

この状況で”ノーネーム”の面々は困惑していた。

「この声……凄く聞き覚えのある声なんですが」

「奇遇ですねジン坊ちやま。ウサギもそんな気がするのです」

「……というか、多分気のせいじゃないぜ」

十六夜の言葉と共に貴賓室の扉が開かれる。

開かれた扉の向こうには軍服の男ともう一人、十六夜と同じくらしい少年が立っていた。

その少年はこの世界には不釣り合いな、所謂制服と呼ばれる白いシャツと紺のブレザーを着ており、しわの寄ったスラックスを穿いている。そしてぼさぼさの寝癖頭に何がおかしいのか分からないがへらへらとした笑みを浮かべていかにも軟派そうな雰囲気をしている。

「……随分遅かったじゃない」

「わり。コイツ探すのに手間取ってた」

軍服の男が少女に謝りラッテンの隣に腰掛け、少年は空いている少女の隣に腰掛ける。

「其処の金髪の奴。あと一人が誰か知りたいって言ったわよね」

十六夜の眼は驚きに見開かれており、ジンと黒ウサギに至ってはあいた口が締まりそうにない様子だ。

「本人が来たから自己紹介させてあげるわ。ほら、早くしなさい」

「え、あ、うん」

どうも気の抜けるような声で返事をして、少しだけ声のトーンを落として黒ウサギたちに告げる。

「オレはコミュニケーション”グリムグリモワール・ハーメルン”所属のハンバーグだ。以後よろしく」

貴賓室の空気が凍りつく。誰もが声を発しない。

少年があれ？ と首をひねって疑問符を浮かべるとなりで、少女が頭を押さえて大きくため息を吐いた。

「……………彼は私たちのコミュニティ所属のハンバートよ」

その言葉の後にジンと黒ウサギから少女へ同情の眼差しで慰められたのは十六夜しか気づかなかった……。